日　本　独　文　学　会　研　究　叢　書　１２４

時代を映す鏡としての雑誌

―　18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る

竹田　和子　編

日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 124

Zeitschriften im Spiegel des Zeitgeistes

－Die Frauen- und Familienzeitschriften vom 18. bis zum 20. Jahrhundert

Herausgegeben
von
Kazuko TAKEDA

JGG Tokyo

目　次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹田　和子　1

理性と貞節
—マリアンネ・エールマン『アマーリエの休息時間』*Amaliens Erholungsstunden* が提示する女性の自己陶冶
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北原　寛子　3

『ガルテンラウベ』*Die Gartenlaube*
—大衆化する活字メディアとその政治性・・・・・・・・・・・・竹田　和子　19

『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte*
—女性による女性のための雑誌
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・桑原　ヒサ子　36

フォーラムとしての家庭欄
—東ドイツの人気週刊誌『ヴォッヘンポスト』*Wochenpost* に見る女性像の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・重野　純子　55

非政治性の政治性
—戦後西ドイツにおける女性雑誌『コンスタンツェ』*Constanze* の誌面分析
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・横山　香　74

質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹田　和子　91

Inhalt

Kazuko TAKEDA:
Vorwort 1

Hiroko KITAHARA:
Vernunft und Tugend. Die Selbstbildung von Frauen in Marianne Ehrmanns *Amaliens Erholungsstunden* 3

Kazuko TAKEDA:
Die Gartenlaube. Eine Zeitschrift zu Beginn des Massenzeitalters und ihr politischer Charakter 19

Hisako KUWAHARA:
NS Frauen Warte als Zeitschrift von Frauen für Frauen 36

Junko SHIGENO:
Familien- und Leserseite als Familienforum. Eine Untersuchung über die Veränderungen des Frauenbildes in der DDR-Zeitschrift *Wochenpost* der 50er Jahre 55

Kaori YOKOYAMA:
Das Politische am Unpolitischen. Analyse der Frauenzeitschrift *Constanze* in der Nachkriegszeit der Bundesrepublik Deutschland. 74

Kazuko TAKEDA:
Fragen und Antworten bei der Diskussion und ihre Resultate 91

まえがき

竹田　和子

この論文集は、2016 年 10 月 23 日に関西大学で開催された日本独文学会秋季研究発表会におけるシンポジウム「時代を映す鏡としての雑誌－18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る」で発表された研究報告を基にまとめられたものである。

シンポジウムの目的は、時代精神と深く結びついた雑誌というメディアが、いかに時代に影響を与え、また逆にいかにそれぞれの時代の潮流の影響下にあったのかという相互作用を、家庭雑誌・女性雑誌を中心に検討することだった。雑誌の揺籃期である 18 世紀を出発点に、活字メディアが大衆化した 19 世紀を経て、ナチズムの時代、戦後の 1950 年代における東西ドイツそれぞれで人気を博した雑誌の家庭欄や女性誌の記事に注目し、それらが各時代の何を問題にし、何を伝えようとしたのか、読者がそこから何をどのように受け取ったのかを明らかすることにより、そこから見えてくる時代の姿を捉えようとした。

まず始めに、北原寛子氏が女性・家庭雑誌の原型とも言える 18 世紀の女性雑誌『アマーリエの休息時間』を取り上げた。この雑誌を作ったマリアンネ・エールマンは、女性がいかに振る舞い、いかに考えればより幸福になれるのかを問題にし、女子教育の必要性を訴えた。しかし彼女は女性に学問は必要ではなく、受けるべき教育とは家庭で必要とされる範囲にとどめるべきだという立場をとっていた。それでも家庭を支える女性の役割の重要性を指摘し、男性に女性の尊厳を認めるよう求めたのである。彼女の主張は 19 世紀のブルジョワ女性運動へと発展していく。女性の活動領域に制限を設けたことによりかえって、現実の世界での理想の追求を可能にしたと、北原氏はエールマンを肯定的に評価した。

第 2 に竹田和子が、啓蒙時代の教養雑誌が大衆化した 19 世紀最大の家庭雑誌『ガルテンラウベ』を扱った。この雑誌はそれまで教養の蚊帳の外に置かれていた小市民層に、平易な文章で世界の様々な情報を伝えて、自分たちも世界の最先端にいるという実感を与え、よりよい社会への希望を抱かせた。その一方で、社会構造や国際情勢の変化に伴い、小市民層は大きな不安を感じるようになっていった。しかし家庭雑誌は批判的読書習慣を持たない読者を、彼らが望む「平和な家庭」、「愛国的高揚感」、「進歩した豊かな世界」という仮想世界に逃避させることに終始し、読者は安易に仮想敵を作り、それに対峙する「我々」という意識に浸っていた。そこに後のフェルキッシュ運動につながる精神風土も準備されていったのである。

第 3 に桑原ヒサ子氏がナチス時代の官製女性雑誌『ナチ女性展望』を取り上げた。この雑誌は「ナチ女性団」の機関誌として発刊されながら、グラビア女性誌と共通する、家事や育児などの実用的情報や娯楽的要素を多分に含んでおり、読者獲得につながったのはま

さにその商業女性誌的な要素だった。そしてナチスのイデオロギーが良妻賢母を女性の理想としていたことを逆手にとって、ナチ女性団は女性の地位向上に資する社会活動を展開していった。女性は民族共同体の半分を支える存在であり、さらに社会そのものを「家庭」をみなして、その母たる行動を取るべきだという拡大解釈を生じさせたのである。この「精神的母性」は 19 世紀以来のブルジョア女性運動に根差したものであり、ナチ時代においてブルジョア女性運動のヴィジョンは実現されたといえる。しかしそれは限定された領域の中の自由に過ぎなかった。

第 4 に、重野純子氏が東ドイツの人気週刊誌『ヴォッヘンポスト』の家庭欄に注目した。労働力不足に苦しんだ DDR は女性の社会進出を表向き歓迎したにもかかわらず、1950 年代の記事では女性が依然として家事や教育の担い手として登場していた。しかし 50 年代末から、夫婦関係や女性のあり方について疑問を投げかける記事が掲載されるようになり、家事の担い手としての女性を描く傾向は格段に弱まり、女性にも仕事を持つよう促す記事が掲載されるようになった。そしてその裏には女性を労働力として利用したいという東ドイツ政府の意図もあったのである。重野氏は、女性の地位と役割のとらえ方の変化とその背景を探った。

最後に、横山香氏が西ドイツで 1948 年に創刊された女性雑誌『コンスタンツェ』を取り上げた。西ドイツの 1950 年代は保守化が進み、女性に「子供・台所・教会」という女性「本来の」役割への回帰が促された。しかし女性誌においては、そのような女性の役割が直接的に喧伝されるのではなく、むしろあらゆる物／商品を「幸福」という記号に変換しながら、読者を「幸福な世界」(heile Welt)という理想的世界へと向わせた。けれどもその根源にあるのは「愛」、「ぬくもり」といった人間にとって「普遍的な善の感情」である。物質的豊かさと幸福とをイデオロギー的に結合する、非政治性における政治性が指摘された。

ここで取り上げられた雑誌は、いずれも女性や家庭をターゲットとしていた。彼らは時代のメインストリームから外れた存在ではあったが、しかしそれだけ一層それぞれの時代の状況や考え方の影響を受けていた。これらの雑誌は、「楽しませながら啓蒙する、啓蒙しながら楽しませる」(belehrend unterhalten, unterhaltend belehren)をモットーに、「家庭を守る女性」、必要であれば社会を支える労働力としての女性、ナチズムの時代には「民族共同体の母」を求めた。19 世紀の産業革命の時期には「進歩した豊かな世界」、戦後西ドイツの女性誌では「より豊かで、美しく、便利な社会」という理想が描かれ、読者は「幸せな世界」(heile Welt)の夢に浸った。読者の数は時代を経るにつれ増大し、彼らの期待や批判を無視しては、雑誌も存在し得なかった。両者は両輪のように時代精神を形作っていたのである。

理性と貞節
—マリアンネ・エールマン『アマーリエの休息時間』*Amaliens Erholungsstunden* が提示する女性の自己陶冶

北原　寛子

はじめに

ドイツの書籍製造技術は 15－16 世紀頃筆写から活版印刷術に移行し、以後出版業は情報や思想を伝達する手段として重要な役割を担いつつ発展した。[1]17 世紀末には新聞や雑誌などの定期刊行物が徐々に登場し、出版物は人々の日常生活への結びつきを深めていくことになった。[2]なかでも 18 世紀初頭にイギリスで発刊されたジョゼフ・アディソン Joseph Addison やリチャード・スティール Richard Steele らによる『タトラー』*Tatler*（1707-1711）や『スペクテイター』*Spactator*（1711-1712、1714）などの定期刊行物はドイツでも間もなく受け入れられ、生活規範への問題意識を喚起し、議論の場を提供することになった。これらの刊行物は、市民の道徳的な行動規範に注目したその内容と定期的に発刊されたその出版形態から「道徳週刊誌」Moralische Wochenschriften と呼ばれ、18 世紀における市民層の拡大と成長を精神面から支えたといえる。

18 世紀のドイツにおいては定期刊行物が人々に内面と社会活動の側面の両方における役割を増大させており、その影響は男性のみならず女性にも及んでいた。たしかに当時は、限られた社会層の人々しか文字文化に親しむことができなかった。さらにそうした上位の社会層でも、娯楽としての読書が生活習慣を堕落させたり、性的な放埒に結びついたりするという偏見が広がっており、女性が小説や雑誌などの娯楽的な書籍を手に取ることが現在と比べてはるかに困難な状況にあったといえる。しかしこうした批判的な意見に対応して欠点を克服しようとする議論が書籍の中で展開されただけでなく、何よりも、新しい知見を獲たいという人間の基本的な欲求は容易に押さえつけられるものではなく、読書への非難を凌駕する勢いで広まっていったのであった。書籍はますます多くの読者を獲得し、出版市場は拡大し続けたという事実をとってみても、そうした文化の大きな流れは否定しようがない。

本論では、1790 年から 92 年にかけて発刊されたマリアンネ・エールマン Marianne Ehrmann による『アマーリエの休息時間　ドイツの娘たちに捧ぐ』*Amaliens Erholungsstunden.*

---

[1] アンドルー・ペティグリー（桑木野幸司訳）『印刷という革命　ルネサンスの本と日常生活』白水社、2015 年、45－79 頁参照。

[2] Jürgen Wilke: *Literalische Zeitungen des 18. Jahrhunderts (1688-1789).* Teil I: *Grundlegung.* (Sammlung Metzler Bd. 174) Stuttgart 1978 (=Teil I), S. 36ff.

Teuschlands Töchtern geweihnt（以下『休息時間』と略記）[3]（図 1 参照）を取り上げて分析を行う。この雑誌は、その発刊が一個人からの発信にも可能性が残されていたそれまでのあり方から組織化され流通システムの中に取り込まれていく過程の具体的な一例として、そして女性の活動という観点から見て、近代的なシステムの完成前であったからこそ可能であった自由と、19 世紀初頭の保守反動の時代とのせめぎあいが展開したという 2 点において注目すべきだからである。こうした時流の大きな潮目が雑誌の内容にどのような痕跡を残しているのかを分析し、時代精神と雑誌の関わりについて考察していきたい。

１．マリアンネ・エールマン略歴

最初に、なぜマリアンネ・エールマンは自らの雑誌を立ち上げるに至ったのかについて、それまでの経緯を略歴と合わせて確認しておきたい。[4]彼女の旧姓はブレンターノといい、1755 年[5]スイス・ザンクトガレン州のラッパースヴィル Rapperswil というチューリヒから直線で南東に 30 キロ弱の湖のほとりの町で商人の子として生まれた。しかし父はあまり商才に長けたタイプではなかったらしく、家族は経済的な苦労を強いられる状況にあったという。エールマンの母は彼女が幼少時に亡くなっており、彼女が 20 歳になる 1775 年頃に父を亡くすと、後継人の不正で相続財産の大半を失った上に、貧しさの中で幼い兄弟と死別するなど、つらい体験を重ねることになる。

ケンプテンには叔父ドミニクス・フォン・ブレンターノ Dominikus von Brentano（1738-1797）がいた。彼はエールマンのよき理解者ではあったが、カトリックの聖職者だったため、彼女はこの叔父を頼って暮らすことはできなかった。そのため他の親戚を頼ったり、貴族の元で仕事をしたりと自活のための努力を重ねる。そんな中 1777 年、22 歳のころに現在では名前の伝えられていないとある兵士と結婚する。ところがこの夫には賭博癖があり、生活は経済

---

[3] 研究に用いたのは、次のマイクロフィッシュ版である。*Amaliens Erholungsstunden.* 1. 1790-3. 1792. Mikrofische Edition. Historische Quellen zur Frauenbewegung und Geschlechterproblematik; Nr. 42. Erlangen 1999. 引用に際しては「A. E.」と略記し、出版年、巻号、ページ数を記す。

[4] Vgl. Theophil Friedrich Ehrmann: *Denkmal der Freundschaft und Liebe der verewigten Frau Marianne Ehrmann errichtet, und allen ihren Gönnerinnen, Freundinnen und Leserinnen geweiht.* Leipzig; Gräff, 1796.
さらにエールマンの伝記については、次の研究を参照した。
Vgl. Edith Krull: *Das Wirken der Frau im frühen deutschen Zeitschriftwesen.* Berlin 1939.
Siegrid Düll: *Mariannne Ehrmanns Lebensdaten.* In: *Marianne Ehrmann, geb. Brentano: Amariens Erholungsstunden. Nachdruck einer Monatsschrift. Originalausgabe Stuttgart 1790. 1. Bändchen mit einer Einführun.* Hrsg. von Siegrid Düll unter Mitwirkung von Bernhard Fischer und Josef Wallig. Zwischen Nähkästchen und Pianoforte. Musikkultur im Wirkungskreis der Frau herausgegeben von Siegrid Düll, Walter Pass und Josef Wallig. Band 2.1. Sankt Augustin 1998 (= AENchdr.), S. 87*-89*.
また次の拙論でもエールマンについて取り上げている。
拙論「女性による女性のための雑誌―マリアンネ・エールマンの雑誌発行活動」ゲルマニスティネンの会光末紀子他編『ドイツ文化を担った女性たち―その活動の軌跡』鳥影社、2008 年、149－162 頁参照。

[5] テオフィルは彼女の誕生日を 11 月 25 日と記している。Vgl. Th. Fr. Ehrmann, a. a. O, S. 23.

的にも精神的にも多くの問題を抱えることになった。そして夫の暴力によって流産するというつらい出来事も経験した。1779 年ごろ彼女は夫と別居することになり、その後夫は新大陸への航海中に亡くなったとされ、彼女は自由を取り戻した。[6]

しかし身寄りも結婚相手もない女性が自活する道は少なく、家庭教師の職を求めて、25 歳くらいの時期にあたる 1780 年にウィーンで暮らしていた。しかし自立心にあふれた女性を雇おうとする貴族はなかなか現れず、彼女は希望していたポストを得ることができなかった。そこで彼女は思い切って舞台に向かい、マリア・アントニア・フォン・シュテルンハイム Maria Antonia von Sternheim という偽名で劇団[7]に参加した。こうして女優としてドイツ各地のみならず、オランダやハンガリーなど、広くヨーロッパを旅する生活を送っていた。

1784 年、劇団所属の傍らで発表した『ある女性の余暇』*Müßige Stunden eines Frauenzimmers* と『女の哲学』*Philosophie eines Weibs* が好評を博した。1785 年に劇団がシュトラースブルクを訪問した折に、体調の悪化もあり、当地で劇団から離れて身を落ち着け、執筆活動に専念する。この町で彼女は 2 人目の夫となるテオフィル・フリードリヒ・エールマン Theophil Friedrich Ehrmann と出会った。当初テオフィルは彼女と知り合いではなかったが、その著書に好意的な評を地元誌に寄稿していた。これを知ったエールマンが謝意を表するためにテオフィルに町で声をかけたのだという。彼はエールマンより 7 歳若く、当時はまだ大学生であった。しかし翌年に 2 人は秘密の結婚式を挙げ、その後 1 年かけてテオフィルの両親の理解を得て、晴れて結婚生活を始めた。

1787 年にはテオフィルが『女性新聞』*Frauenzimmerzeitung* を発刊するが、わずか数号で頓挫してしまった。そして 2 人は 1788 年にはシュトゥットガルトに活動の場を移した。そこでも引き続き夫婦で執筆活動を行い、マリアンネは自伝的要素の強い書簡体の作品『アマーリエ、真実の物語』*Amalie, eine wahre Geschichte* を発表した。そして 1790 年にはさらなる経済的な安定を目指して雑誌『休息時間』を立ち上げる。この雑誌についての詳細はのちに譲るが、1792 年には休刊にいたったことを挙げておきたい。その後 1793 年から翌年にかけて、新たな雑誌『アルプスから来た女隠者』*Die Einsiedlerinn aus den Alpen* を発表するが、長年続いた体調不良が回復せず、39 歳の若さで 1795 年に肺炎により死去した。

２．18 世紀の雑誌について

先述のように、ドイツ語圏では 18 世紀初頭にイギリスで発行された雑誌の影響を受けて、道徳週刊誌と呼ばれる読者の道徳的教育に貢献することを目指した雑誌が次々に発売された。先行研究の指摘によれば、これらの雑誌は当初それぞれの発刊スタイルに合わせて「週

[6] Th. Fr. Ehrmann, a. a. O., S. 61.
[7] Christoph Ludwig Seipp の劇団など。Vgl. S. Düll, a. a. O., S. 88*.

刊誌」Wochenschrift や「月刊誌」Monatschrift と呼ばれていた。[8]雑誌の発行は、人気が出ればそれなりに経済的に報われることが見込まれたが、一方では労力や手間がかかる割に失敗する危険も大きい事業でもあった。[9]18 世紀における女性の雑誌への貢献について研究したなかでも草分け的な 1939 年のエディト・クルルの研究では 1715 年から 1800 年の間に発行された雑誌のタイトルが 140 挙げられているが[10]、そのうち最後の 20 年、80 年代と 90 年代に発刊されたのはタイトルだけでも 73 に上り、その約半数を占めている。クルルがこの時期の雑誌に特に注目したというよりも、18 世紀の雑誌全体を考慮したため、結果的に隆盛期が浮き彫りになったと考えるべきであろう。これらの雑誌は 2－3 年継続して廃刊になるのが一般的であった。[11]

1780－90 年代の雑誌は、道徳週刊誌から徐々に発展し、ページ数などの規模も大きくなり、内容も娯楽から学術的な知的好奇心に応えるものまで幅広くなり充実している。例えばフリードリヒ・シラーFriedrich Schiller の『ターリア』*Thalia*（1785-1793）（1792 年より『新ターリア』*Neue Thalia*）やクリストフ・マルティン・ヴィーラント Christoph Martin Wieland による『ドイツ・メルクール』*Der teutsche Merkur* （1773-1810）（1790 年より『新ドイツ・メルクール』*Der neue teutsche Merkur*）がある。女性向けには、ハレ大学で哲学を講じハルバーシュタットの司教座教会参事会員でもあった大家ヨハン・ゲオルク・ヤコービ Johann Georg Jacobi が、当時の文学を女性たちにわかりやすく解説することを意図した『イリス』*Iris*（1774-1776 (-1778)）がある。ゾフィー・ラロッシュ Sophie La Roche による『ポモナ』*Pomona*（1783-1784）は非常な人気を博し、これに先立つ時代にはエルネスティーネ・ホーフマン Ernestine Hofmann の『ハンブルクの娘たちへ』*Für Hamburgs Töchter*（1779）[12]やシャルロッテ・ヘッツェル Charlotte Hetzel による『女性週間新聞』*Wochenblatt für's Schöne*

---

[8] 現在のようにそれらを総括する「定期刊行物（＝雑誌）」Zeitschrift という概念が使われるようになったのは 1751 年のペーター・フォン・ホーエンタール男爵 Peter Freiherr von Hohenthal が『経済時報』*Oeconomische Nachricht* 第三巻の前書きによるとされている。Vgl. J. Wilke, a. a. O., S. 26.

[9] Bernhard Fischer: Marianne Ehrmanns „Amaliens Erholungsstunden" und die J. G. Cottaische Buchhandlung. In: AENchdr., S. 31*-86*, S. 33*.

[10] E. Krull, a. a. O., S. 306-310.

[11] 18 世紀の道徳週刊誌がわずか数年しか継続しなかった理由を、ヴォルフガング・マルテンスは編集者がそのように意図したためであると主張している。道徳週刊誌は新しい出来事を扱うのではなく、道徳的な慣習について批判的な意見をすることが主な内容であったため、長く続ける過程で類似の話題が取り上げられると、新鮮味がなく、また重苦しくなりがちなので、切りのいいタイミングで別の雑誌に衣替えする方法が選ばれたという。さらに、発表された雑誌はその後まとめられて書籍として流通したので、規模が大きすぎると読者に読む労力をかけるだけでなく、経済的にも負担になるため、長期の継続が選択肢に上らなかったことも理由として挙げられている。Vgl. Wolfgang Martens: *Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften.* Stuttgart 1968, S. 119ff.

[12] Vgl. E. Krull, a. a. O., S. 194ff. Jürgen Wilke*: Literarische Zeitschriften des 18. Jahrhunderts (1688-1789).* Teil II: *Repertorium*. (Sammlung Metzler Bd. 175) Stuttgart 1978, S. 125.

Geschlecht（1779）[13]、ドロテーア・リーリエン Dorothea Lilien の『友人たちの書簡』*Papiere einiger Freunde*（1780-1783）[14] といった諸タイトルがある。

1780 年代になると、雑誌に注目しただけでもいろいろなタイトルが上がるようになっているので、書籍一般となるとさらにその規模は大きく、『一般文学新聞』*Allgemeine Literatur-Zeitung*（1785-1849）のように書評を主眼とする雑誌も登場した。こうしたメディアに批評が出ることで、雑誌は知名度を上げ、購読者の増加を期待することができた。

当時の雑誌は定期購読が一般的な販売方法であった。[15]創刊号を発刊する前に、他の雑誌に広告を掲載して定期購読者を募る方法がとられていた。エールマンの雑誌『休息時間』は、1786－1827 年に発行された『奢侈流行ジャーナル』*Journal des Luxus und der Moden* の 1790 年に公告を出している。[16]（図 2 参照）当時は書籍に掲載される図は銅版画で、経費と労力の負担が大きかったので、広告といえども特別な視覚的効果は用いられず、見出し語と本文から構成されており、記事に類似した文章の体裁をとっている。エールマンの雑誌広告の前行に掲載された「ヴィーラント」の名はクリストフ・マルティン・ヴィーラントその人であり、この記事は先に挙げた『新ドイツ・メルクール』刊行の告知文である。これらの広告記事には、雑誌の内容や構成、ねらいなど読者にアピールしたい点が織り込まれており、価格、申し込み方法など、読者にとって必要な情報も文章に記載されている。

この広告によると、『休息時間』は半年の定期購読のみの受付となっている。半年の価格は 2 ライヒスグルデン、あるいはザクセンの通貨では 1 ターラー4 グロッシェンとなっている。実際に購入するためには、手紙で直接シュツットガルトのエールマンの元に申し込みを出すか、郵便局や書店でも申し込む方法が挙げられている。面白いのは、個人で 6 件の予約を集めることができたら、1 件分無料という割引も設けられており、読者獲得のための工夫や努力がなされていたことが垣間見える。[17]

マリアンネ・エールマンがこうして集めた初期の注文は、個人からのものだけでもおよそ 500 部に上った。[18]その後雑誌は 1000 部に数字を伸ばし、1792 年に販売が落ち込んできた

---

[13] Vgl. E. Krull, a. a. O., S. 200ff. J. Wilke, ebd.
[14] Vgl. E. Krull, a. a. O., S. 203ff. J. Wilke, ebd.
[15] J. Wilke, Teil I, S. 129f.
[16] エールマンの雑誌は、『一般文学新聞』*Allgemeine Literatur-Zeitung* 第 111 巻（1792）S. 244-246 にも好意的な批評が出ている。これは現在の研究では、公告の一種とみなされている。Vgl. B. Fischer, a. a. O., S. 63*.
[17] ヴィーラントの『新ドイツ・メルクール』は、1 冊 8 グロッシェンだが、年間定期購読にすると 2 ライヒスターラー（ザクセンの通貨で 3 ライヒスターラー）で、1 ライヒスターラー12 グロッシェン割安になるという。この雑誌でも、申し込み先は取次書店や郵便局などが指定されている。
ヴィルケの指摘によると、一般的に、年間定期購読では郵送費込みで 4－5 ライヒスターラーだったという。（Vgl. J. Wilke, a. a. O., S. 129f.）
[18] そのうち、女性の名前で申し込まれているのは、貴族で 130 件（うち 60 件は高位の貴族）、市民で 136 件、またそれ以外にも貴族から 55 件、市民で 172 件（これらを合計すると 493 件と

ころでも 700 部ほどは販売されていた。一方当時人気を博していた先述のヴィーラントの『ドイツ・メルクール』の発行部数は、最盛期の 1774 年で 2000 部に上った。その後徐々に減り、1783 年にはそれでも 1500 部が売れ、1788 年は 1200 部となり、1798 年でも 800 部を販売した。[19]これらの数字を比較すると、エールマンの雑誌が 500－700 冊販売されたというのは、ある程度優秀な営業成績を上げており、人気を博したといえるであろう。

エールマンがこの雑誌を打ち切った理由は、編集の主権をコッタ社に取られてしまったためである。ゲーテやシラーの作品を出版したことで今日でも有名な出版業者ヨハン・フリードリヒ・コッタ Johann Friedrich Cotta（1764-1832）は、1787 年に父親からテュービンゲンで大学の専門家向けにラテン語書籍を販売していた出版社を引き継ぐ。[20]その際の経営状況は思わしくなく、共同経営者・出資者としてクリスティアン・ヤーコプ・ツァーン Christian Jacob Zahn を迎え入れざるをえなかった。ツァーンはのちに『休息時間』の編集の中心となり、エールマン夫妻に発行部数の減少の責任を負わせ、彼らを雑誌から遠ざけた。その後『休息時間』は『フローラ』*Flora* と名をかえ、1793 年から 1803 年まで 10 年間継続した。

コッタ社がエールマンの雑誌に目を付けた動機は、限られた購入層にしか働きかけることのできない学術書の専門書店から、より幅の広いジャンルを、そして販売量の見込める書籍を扱う会社に衣替えしようとしていたからである。個人で経営していた書籍取引業者にとって、人気のある雑誌の編集・販売権を買い取ることは、新規参入のリスクを軽減しつつ販路を広げる絶好の機会であるとみなされたのであろう。またエールマン夫妻にとっても、出版社から原稿料の形で一定額が支払われる条件が提示されており、収入を不安定な購読料に頼る必要がなくなる点で有利に思われた。さらに自費出版で印刷から発送の管理まですべてを担わなくてはならない労力から解放され、内容の充実に力を入れる可能性も見込まれた。そのような目論見から両者は契約を交わし、『休息時間』の 2 年目にあたる 1791 年第一号からコッタ社の銘が扉に記されることになった。しかし先述のようにツァーンはエールマン夫妻に、記事の質が悪いと苦情を言ったり、そのために雑誌の売り上げが落ちたとクレームをつけたりしはじめた。追い打ちをかけるように、エールマンは体調不良で編集・執筆活動が滞りがちになり、やがて彼が選んだ執筆者の原稿がより多く掲載されるようになった。最後の 1792 年第 12 号では、マリアンネ・エールマンの名前が消えてしまい、やがて翌年の新年号から雑誌のタイトルが『フローラ』に変更になり、『休息時間』は実質的に廃刊となる。

18 世紀の書籍は、紙の値段が高かったこともあり、全紙 1 ページでとれるページ数（これを「1 ボーゲン」と呼ぶ）によって単位が区切られていた。『休息時間』は 8 つ折り版と

なり、上記のおよそ 500 件の数字の根拠となる）である。Vgl. S. Düll, a. a. O., S.15*.

[19] Vgl. P. Hocks u. P. Schmidt, a. a. O., 113.

[20] B. Fischer, a. a. O., S. 32*

いう小型版を採用していたが、その場合は 16 ページが 1 ボーゲンに相当する。1 か月分は 96 ページ前後であるので、これはおよそ 6 ボーゲンに相当する。これらは 3 号が揃うと一巻を構成するようにページが割り振られていた。年 12 号（つまり 4 巻）発刊され、1790 年 1 月から 92 年の 12 月までの計 12 巻がある。当初は各月ごとに掲載される娯楽読み物の内容と連動した扉の銅版画が掲載され、巻末にはとじ込みで楽譜も付録になっていた。それらはのちにコッタ社の緊縮財政のために毎号掲載されなくなったが、この雑誌の娯楽的な特徴を代表する要素である。[21] そのほかに振舞い方や日常生活の行動規範などの道徳的な論文もあれば、テオフィルは外国の地誌や社会情勢についての記事を執筆していたし、エールマン夫妻以外に詩や短い物語（「寓話」Anekdote）などの種類の記事も、署名があるものとないものがあるが、多様に掲載されていた。

３．エールマンの記事の特徴

エールマンが主に編集に携わった 1791 年の途中までは、この雑誌の中心になる娯楽読み物や、道徳についての意見記事の多くは彼女自身が執筆していた。彼女の記事の特徴は、厳しい道徳と女性の権利を擁護する論調である。エールマンの関心は一貫して、人間は社会においてどのようにふるまうべきかに向けられていた。特に男女の性差に基づく行動規範や社会的義務の相違には特別の注意が向けられている。雑誌が若い女性向けということもあり、女性がいかに振る舞い、いかに考えればより幸せになれるのかということはもちろん大きなテーマの 1 つである。しかし道徳的な問題に関しては、性差を超えて厳格な態度を示している。

例えば初期の 1790 年 1･2･3 号に連載された娯楽読み物『可哀そうなハンナ』は彼女の代表作でもある。この物語では、大学町のとある家で奉公する女中のハンナが大学生カールに言い寄られ、強い意志で拒絶できなかったばかりに未婚のまま妊娠して社会から疎外されてしまう。その後赤ん坊を授かってからも経済的困窮から盗みを働き、絶望感から監獄で幼子に手にかけてしまうという不幸の連鎖が語られており、どこにも救いがない。女性にとっては、ハンナのような運命に陥らないために、その入り口に当たる恋愛で軽はずみに振舞うべきではないという教訓を含んでいる。一方ハンナを不幸に陥れたカールについても続編

[21] エールマンは刊行を宣伝する広告の中で、定期購読者の名前は掲載する旨を明記しており、実際にこの雑誌の読者の一部を、不定期に掲載されている定期購読者のリストから窺い知ることができる。高位の貴族は大きな文字で冒頭に紹介されており、例えば 1790 年 7 月号には「ナッサウ=ヴァイルブルク公女・ヴィート=ルンケル侯国皇太子妃殿下」の名があげられている。その他の購読者は、地名のアルファベット順で掲載され、特に個人名が記されていない市民と並んで、下位の貴族と思しき人名もが上げられている。これらの中に町の読書クラブも混じっており、ここから皇太子妃と読書クラブが同じ書物を手に取っていたことを推し量ることができる。

で物語られている。彼は彼女を死に追いやったことにまったく良心の咎めを感じない悪漢とされている。父の跡を継いで宮廷参事官になり順風満帆に見えたが、その邪悪な性格のために結婚相手に選んだ女性も悪人で、仲睦まじく穏やかな暮らしをすることができない。夫婦喧嘩の末に妻によって政治的な陰謀に巻き込まれ、結局は牢獄で果てるという不幸な転落人生が語られている。このように男性についても、不道徳が不幸の引き金になるという因果が強調されている。

ハンナの話には「実際起こったこと」という但し書きがあるが、これは 18 世紀のフィクションによくある言及で、本当にこの通りのことが起こったのか、過去に見聞した出来事に脚色を多分に加えているのか、その点は不明である。ただ独立した文学作品としてではなく定期刊行物にこのような出来事が紹介される場合、3 つの側面が考えられる。まず起こったことを伝える報道、ジャーナリズムの側面がある。次に報道としての即時性よりも、そのような社会問題があることへ注意を喚起する役割がある。そして最後に好奇心の充足させる娯楽としての機能がある。[22]18 世紀のドイツでは、ゴットシェートがホラティウスを引用しつつ「楽しませつつ教える」と文学の役割を定義したように、読書が道徳の強化につながることを期待する声が大きかった。であるから、たとえ読者がこれらの記事を好奇心の充足のために受容したとしても、それは作品を手に取ってもらうために必要な働きかけであって、その結果としてこうした物語を社会問題として身近に考え、自らの行動を顧みるための参考にしてほしいという意図が掲載する側にはあったと考えられる。

創作物語だけではなく、論文においてもエールマンは厳しい道徳律に貫かれた人間観を提示している。「性格描写　実践的人間知識からの試論」という 8 回にわたった連載記事では、いろいろな性格・性質の人間が紹介されている。「私たちは人々にはちきれんばかりの高邁な理想を提示するつもりはありません。その弱さを受け入れ、その罪を許し、しかしその徳を温かく賞賛したいのです」[23]と述べてはいるが、しかし実際は温かく徳を称えるおおらかな雰囲気はほとんどなく、遊び人の男が性的放埒の末に病気になったり、コケティッシュな女性が自己愛と虚栄心のために不幸な結婚生活に陥ったりしたことが報告されており、享楽には罰が付き物だといわんばかりのエピソードばかりである。さらには、すぐに何でも悩む人物や気の弱い者、おしゃべり、卑劣な振る舞いをする者、真面目すぎる者、軽率者など、度外れた感情が社会生活において不幸の引き金になるという戒めを発し続けている。

こうした厳しい道徳観の根底には、エールマンがスイスの商人の家の出身であり、カルヴァン派の倫理観に従った教育を受けていたことが考えられる。この厳格な道徳観に基づいて冷静な感覚と明晰な思考のバランスを重視する主張は、18 世紀後半の感情主義

---

[22] 拙論「ジャーナリズムと創作の間　―マリアンネ・エールマンの雑誌掲載小説についての一考察―」小樽商科大学言語センター広報「Language Studies」第 25 号（2017）、3－10 頁参照。
[23] A. E., 1790, 4. Bd. (H. 12), S. 237.

Empfindsamkeit への対抗と位置付けられる。18 世紀後半のドイツでは、古典派の調和や規則を重視する文化的風潮に対抗して、シェイクスピアを理想とする自由でのびのびとした人間像の追求が行われていたが、その副産物として感情を重視するあまり、多感と繊細を競い合う感情重視の態度をとる人々が現れた。エールマンの厳しい論調は、そのような風潮への反発と非難の表明として解釈可能である。しかし厳格で率直な感覚は、流行への宗教的な立場からの反論としてだけではなく、貴族的な奢侈・放埒に対する市民的実直さからの反抗であると考えることもできる。

この雑誌は、先に定期購読者リストについて言及した箇所で指摘したように、市民のみならず、宮廷の中心にいた高位から田舎の領地住まいの下位まで多岐にわたるとはいえ、貴族も手にしていた。この雑誌が発刊されていた時代はフランス革命勃発から間もなく、その余波がドイツ語圏にも伝わり、いつ収束するのか先が見えない状態にあった時期である。貴族と市民には身分の差があり、市民はどんなに努力しても超えることのできない壁を前にして、貴族に富が許され、名誉が与えられているように、禁欲と節制という欲望の制限を、自らを貴族と区別するための指標に選び、宗教的な価値に合致する生き方を貫くことによって自分たちは倫理的に優れた存在であるという誇りを抱こうとしていたのであった。

エールマンの論調の第二の特徴は、フェミニズム的な主張である。彼女は『休息時間』において、女性の権利を尊重するように声高に叫んでいる。例えば、先に『流行奢侈ジャーナル』におけるこの雑誌の広告について言及したが、その中で読者たちにつぎのようなアピールを行っている。

> 私がこの雑誌で目指していることは、力の及ぶ限り私たち女性の精神と理性、心と知識欲に滋養を与え、それらを啓蒙し、高貴にすることです。それは私が、先ほどから私たち女性の哀れさに必死で対抗している激しさからお分かりいただけるでしょう。[24]

エールマンは基本的に、多くの女性が精神的に困窮状態にあると考えていた。つまり必要な教育を受けていないために、社会で女性に課せられている義務を果たす能力がなく、そのために常に批判されざるを得ないと考えていたことが、テクストから読みとれる。家事などの仕事を満足にこなせない女性は、男性からはもちろんのこと、他の女性からも非難されることになる。先に挙げた人間一般への厳格な態度も相まって、エールマンが女性の欠点を指摘する論調は非常に激しい。だからこそ彼女は女性たちに自己陶冶の必要性を説くのであ

[24] Marianne Ehrmann: Amaliens Erholungsstunden, Teutschlands Töchtern geweiht. Eine Monatschrift von Marianne Ehrmann, Verfasserinn der Geschichte Amaliens. [Unterz.]: Die Verfasserin. In: Journal des Luxus und der Mode. Jahrgang 4(1789) November. Interigentblatt, S. CLXI-CLXV, S.CLXII. Auf HP: http://zs.thulb.uni-jena.//jportal_jparticle_00085989

る。彼女は創刊号の前書きでも、「私たちは偏見に逆らって、頭を高く上げ、魂を鉄くずから清め、私たちの義務をよい本と理性的な交友関係によって満たすことを学びましょう」[25]と、女性たちに自らの人格と知識を向上させることが必要だと熱弁をふるっている。[26]

エールマンは理想とする女子学校教育について、1790 年の第 8 号に「女子学校素描　女性教育施設についてのあれこれに対する補遺」と題された記事で具体的なアイデアを披露している。[27]女性には頭 Kopf ではなく、心 Herz が必要なのであり、よき母、しっかりとした家政婦、忠実な妻、愛すべき社交家になれるように教育する必要があると訴えている。[28]エールマンが考える理想の時間割は次のようなものである。1 日 4 コマで、最初は宗教かドイツ語、世界と人間についての知識という 3 つのうちどれかに順次当てられる。社交的な雰囲気の中で読書・音読・作文の能力も鍛えることを目標とする。注意力を鍛え、理解力を磨き、判断力を身につけさせるためのプログラムである。2 コマ目は、「厳格な男性教師」によるフランス語・地理歴史・自然についての予備知識・正書法のいずれかに充てられ、これを良妻賢母になるために必要な程度に教えるという。3 コマ目は女性教師の担当とされ、計算と経済を教えるよう求められている。4 コマ目も女性教師による手芸の指導が盛り込まれている。いずれの授業においても無味乾燥な知識の伝達にならないように、生徒たちの心を豊かにすることを目指した工夫を求めている。このように、国語・算数・理科・社会・外国語・芸術にあたる手芸と、現在の一般な学課にも劣らないバランスで理想的なカリキュラムが論じられている。

この記事に先立つ 1790 年第 6 号には、夫テオフィルの記事でも理想の女子学校の構想が示されている。[29]そこでは、寄宿舎のような施設は家族から引き離されるうえに生徒の経済的負担が大きくなりすぎるので、授業だけに特化した学校が必要であると主張されている。そこで彼は、女中仕事をするような女性たちに対しても、理性的に考えるための手引きや道徳、自然科学の基礎が教えられるべきだと述べている。身分の高低や性差を超えて、教育はすべての人に、女中のように経験的な知識だけでも十分で、特別な専門知識や高度な思考を求められないような労働に従事する人々にとっても必要だとエールマンは考えているので

---

[25] A. E., 1790, Bd. 1 (H. 1), S. 7.

[26] 一方形式上の後続誌『フローラ』では、「皆さんが前書きを読むのがお好きではないことは周知の事実です」（In: *Flora. Teutschlands Töchtern geweiht von Freunden und Freundinnen der schönen Geschlechts.* 1793. Bd. 1 S. 9. Aus der HP von Bayerischen Staatsbibliothek digital. http://reader.digitale-sammlungen.de/de/fs3/object/display/bsb10612171_00013.html?leftTab=toc）と前書きで社会的な立場を主張する姿勢が見られない。ではこの不要なはずの前書きに要件があるとすれば何かといえば、この雑誌がエールマンと無関係であることを読者に伝えるためである。（Ebd., S. 10f.）エールマンの雑誌が単なる娯楽誌ではなく女性の権利拡大のための運動の一種だったといえることは、『フローラ』の前書きとの比較によっても読み取ることができる。

[27] Entwurf einer Töchterschule als Nachtrag zu dem Etwas über weibliche Erziehungsanstalten. In.: A. E., 1790, 3. Bd. (Hf. 8), S. 176-182.

[28] Ebd., S. 176.

[29] Etwas über weibliche Erziehungsanstalten. In.: A. E., 1790, 3. Bd. (Hf. 6), S. 270-275.

ある。女性たちが教育の機会を奪われ、自分の人生がこれからどうなっていくのかを冷静に考えられなかったばかりに「可哀そうなハンナ」のように人々にさげすまれ、破滅へとまっしぐらに転落することを未然に防がなくてはならないと訴えるために筆を執っているという意味で、エールマンは詩人ではなく社会活動家に近い立場の作家と言える。

1792 年の 5 号から 6 回にわたって連載された「女性の労働について　一連の観察と経験」では、料理・洗濯・掃除・子育て・夫のための世話をはじめ、化粧から服装にいたるまで、日常的な事柄が取り扱われている。身分のある女性も知識がないと、使用人に騙されたり、いい加減な仕事をされたりするかもしれないので、料理や服の仕立ての知識が必要だと説いている。洗濯の項目では、濡れた洗濯物が重すぎるなどして健康を害するかもしれない重労働の様子が描写されている。無理をしないで使用人をきちんと監督する力があればいいと述べられているが、ここから家事が大変な作業だった当時の状況が推察されるとともに、一方ではやはりこの雑誌は使用人を雇う余裕のある市民層以上の文化に属し、ここで監督されて重労働に従事しなければならない人々はなおも蚊帳の外に置かれている状況も浮き彫りになっている。

エールマンは、家事について論じている箇所のみならず、理想の女子学校教育について考察している場合でも、学問的な授業は男性に対してのみ行うべきであって、少女たちには自分たちの文化に気を配るための心と人間についての知識を伝えれば十分であり、女性に学問は必要ないと繰り返し主張している。それは女性の権利を主張しておきながら、同時にその可能性を制限しており、矛盾した態度のように思える。しかしこれは、重労働の家事をこなしたり、使用人たちに的確な指示をだしたりする必要があった時代にあって、誰かが家庭内の仕事を引き受けなければ生活が成り立たないという義務感・使命感に基づいた信念だったとみなすべきであり、後で確認するように、女性の人格を否定したり能力を低く考えたりするなどの悪意から女性の権利を狭めようとしたわけではないのである。エールマンが、女性たちが怠惰であると怒り続ける様子から、完璧な家事をする難しさは当時も変わらなかったことが推察される。この社会的な問題に対して、エールマンは女性たちがきちんとした教育を受けていないために義務感に目覚めることができていないと考えていた。女性たちを自己陶冶に向けて鼓舞することで、女性を取り巻く問題を解決し、その地位を向上させ、活動の価値を認めさせようとしたのである。18 世紀において、男性は家庭にいる女性を天使や救い主と称賛する一方で、実際は家庭に閉じ込めて自分たちの都合がいいように仕事をさせようとしたのかもしれないが、エールマンはその活動分野に誇りをもち、自分の家庭をマネージメントすることは王が国を支配するのと同じだと胸を張って女性たちに語り掛け、女性の尊厳を守ろうとしているのである。

1791 年 6 号から 92 年 2 号にかけて、5 回にわたって掲載された「公開文通」という読者

からの投稿とそれに応じたエールマンの記事では、当時の男性が女性をどのように考えていたのか、それに対してエールマンがどのような意見であったのかがよくわかる。手紙の送り主は男性ということで、名は伏せられている。2 回目の手紙で特別な服装をしていないと言及があるところから、聖職者でも軍人などでもない一般市民と推測される。彼は最初の手紙で、女性というものは嘘つきで、金メッキの後ろに鉛や鉄を隠し持っている、と非難している。

> ［…］しかし私は、愚かさや狂気、子供じみた思い上がり、笑えるほどの虚栄心、悪趣味なお人形の飾り、きれいな顔や洋服への何とも言いようのない魂の抜けた思い込み、むき出しにしろ隠されているにしろ、でも非常に一般的にみられる快楽への好み、嫌悪すべき屁理屈癖、ねたみ、馬鹿げた社交のおしゃべり屋―ああ天よ、全部上げるとすればほかにまだ何が―私はこれらの礼儀正しい特性をあなたのように思いやりとお世辞でもって罰することはできません。このような心映えに対しては、もっと無遠慮な言葉が必要だと思います。わたしはそれがあなたの『休息時間』にないので、あなたは私たちのメス豚野郎どもの娘たちを、私よりも信頼なさりたいのだと推測いたしました。[30]

男性読者からの投書はこのような毒のある言葉でしたためられ、女性一般への批判をエールマンに伝えると同時に、なぜ彼女がそれでも女性たちの味方をするのかという疑問をぶつけている。

これに対してエールマンは「あなたがどなたであろうとも、数ある中であなたのお便りには驚きました」「あなたは女性をよくする勇気をお持ちではないのですか。なんと思いやりのない断定でしょう」[31]と、女性に対する悪意ある言葉に果敢に立ち向かう。「まずはあなたが、嘘をついて、好色な利益を不正に手に入れるために、女性の顔に向かって黄金の代わりに鉛と鉄でほめそやすのを止めなさい」[32]と応じる。[33]そしてエールマンは、女性は確かに多くの過ちを犯しているかもしれないが、女性が欠点を克服できないのは、男性がそれを助長しているからだと反論する。「私が女性のすべての過ちを、きちんとにせよ、不格好にせよ、並べ立てないのには、たしかに理由があります。私はそうすることで、あなたがた間違うことのない性に完全に勝利させたくなかったのです」[34]と、男性は完璧で間違えることが

[30] A. E. , 1791, Bd. 2 (H. 6), S. 264.
[31] Ebd., S. 266.
[32] Ebd., S. 267.
[33] この読者はエールマンに、上記の金メッキの比喩のみならず、「奥様は鉛や鉄を黄金に変えることができるというあの素晴らしい賢者の石やテオプラストスの秘薬をお見つけになったのでしょうか」（Ebd., S. 263）と、金属のたとえを多く用いており、彼女はその言葉を受けて反論している。
[34] Ebd., S. 269.

ないのかと逆に問いを発している。エールマンは「完全なるアダムの息子たち」[35]という皮肉を込めた言葉を用いて[36]、男性が女性に対して優れているという立場に疑問符をつける。

男性が女性を教育することができるのは、国全体という大きな規模での道徳的幸福を担うことができるのは男性だけだからだと、男性の支配に甘んずる姿勢をとってはいる。エールマンは女性の権利を主張はしているが、かといって男性優位の社会規範そのものを問うことはない。社会の現状に疑問を呈することがなかったことが彼女の考え方の限界ということができるかもしれない。しかしそれは同時に時代の限界でもあったとみなすべきである。しかし彼女はだからこそ、社会的な地位は既存の秩序に甘んじるとしても、人格においては男女が同権であることを目指して、女性の地位の向上を訴えたのである。

エールマンは先の手紙の中で、とある男性読者に「あなた方は私たちをただの動物のように扱います。[…] 女性があらゆるものに大きな影響を与えていることをあなたは知るでしょう。男性が私たちの教育をなおざりにすると、彼らはその結果も負うのです」[37]と訴えている。女性が社会で占める役割の大きさに注意を喚起し、お互いに高めあわなければよい社会は実現しないのだと彼女は主張している。エールマンが訴えたいことは次の一文に尽きるであろう。

> いつでも私の前々からの原則は同じです、男性たちは私たちを、神と世界の前で責任を持つことができるような尊厳をもって扱うべきなのです。[38]

エールマンは、女性に尊厳をもって対すること男性にを求めている。社会の秩序を問い直す以前に、女性の人間としてのあり方そのものを問題にしようとしている。これが彼女の伝えようとしたメッセージで核になる部分なのである。だから彼女は同性に対しても、自分たちが人間としての尊厳を持ちうることを必死に伝えようとして、ある時は論鋒鋭く問題を描き出し、ある時は懲罰的な判断を下しているのである。両性が互いに敬意をもって暮らすために何ができるかを提案し、実践を促すことが『休息時間』が内包していた使命だということができる。

この雑誌には、エールマン以外の執筆者による記事があると先に述べたが、その中には、エールマンの主張とは異なる調子で論じられている論文もある。例えば、1791 年の 6 号で、エールマンが男性読者の無礼な指摘に反論した文章のすぐ後に掲載されている「国家活動・国家事業に及ぼす女性の影響についての若干の考察」という執筆者の記載のない記事では、

---

[35] Ebd., S. 269.
[36] ここでもエールマンは、投稿者が自らを「ほかの人と同じように、まさにアダムの息子である私」（Ebd., S. 262）と書いた言葉を受けて、男性一般を「アダムの息子」と呼んでいる。
[37] A. E., 1791, Bd. 3 (H. 8), S. 121.
[38] Ebd., S. 116.

女性は家庭で子供を産み育て、家族を支えることが国家への奉仕でもあるのだという良妻賢母のイメージが打ち出されている。この記事は女性への美辞麗句で満ちているが、その陰に響く調子は、女性への尊厳ではなく、エールマンが批判していたはずのご機嫌取りの一種であり、それがそのまま秩序への従属を求める無言の圧力となっている。男性たちがこのように自分たちの政治的な優位性を家庭や社交における人間関係にまで延長させたとしても、エールマンは当時の男性優位の社会秩序を肯定しているので、反論するすべがない。そしてただ人格における両性の尊重を期待するだけにとどまっている。このようにエールマンの雑誌には、たとえ彼女が編集に従事していても、男性目線の女性像など、いろいろな主張が同居している。異なる主張であっても、併存している点が、多様な論客による同時代的な言説が掲載される雑誌というメディアの長所の一つでもあるといえる。

４．まとめ

エールマンは、女子教育の必要性を訴えながら、良妻賢母の壁を超えない程度という限定を設けており、その点ではルソーから続く「家庭の天使」のイメージを積極的に打ち壊すものではなかった。しかし、男性読者からの手紙に反論するときは、女性を見下す当時の考え方に決然と反論しており、たとえ当時の社会秩序の変革を迫るほど急進的な思想ではなかったにせよ、男性にとって都合のいい「家庭の天使」から、自立した人間が自覚をもって演じる「家庭の天使」へと、女性像の転換を促そうとした。このようにして彼女は、家庭や社交の場といった小さなサークルから女性の立場を向上させ、尊敬をもって遇せられるようになることを目指したのである。

当時は男性の教育については、ヘルダーが「人間は完成されることは決してなく、つねに成長し、先へ進み、完成を目指す」[39]といったように、際限なく追い求めることができ、これをそのまま人格や能力を発展させる可能性と結び付けて考えられていた。しかしこのように無限の可能性を喜ばしく受けとめた人々がいた一方で、方向も規模も内容も定まらない人間陶冶の広大さを前にして、目指す方向がわからず、自信喪失と不安に襲われた層もいたはずである。目標がないために感じる恐怖や焦燥感を自分の目からも隠すために、女性を攻撃できる強さが自分にあることを確認して自尊心を回復することは、誤った方法ではあったけれども選択肢の一つであった。男性読者からの手紙には、18 世紀が人間性の追求という高邁な理想を掲げた陰に取り残された人がいたことを強く推測させる。この人間関係は歪んでいるが、女性の教育問題についてこの雑誌で展開されている議論は、女性の自己陶冶のための導き手であったとともに、18 世紀後半の文化が求めた高尚な人間陶冶 Bildung に

[39] Herder: Abhandlung über den Ursprung der Sprache (1772), FA 1, S. 773. 濱田真『ヘルダーのビルドゥング思想』　鳥影社　2014 年、178 頁参照。

取り残されたすべての人々のための導き手であろうとしたといえる。

『休息時間』は、女性はどのような教育を受けるべきか、そしてどのような人間に成長していけばいいのかという自己陶冶のための具体的な問題を検討したり、どのように日々の家事をこなし、どのように人々と交流すべきかという日々の生活のあり方を議論したりする場であったとともに、男性も含んだ社会全体にとっても、理性というキーワードであらわされる精神的な落ち着きや、貞節という概念でまとめられる社会や家族に対して忠実に義務を果たすことを目指すプロテスタント的禁欲の価値をそれぞれ具体的な場面に即して検討する機会を提供していたのである。このような議論には、堅実さを志向する 19 世紀市民社会へと至る社会の意見形成の一翼を担った意義が認められる。

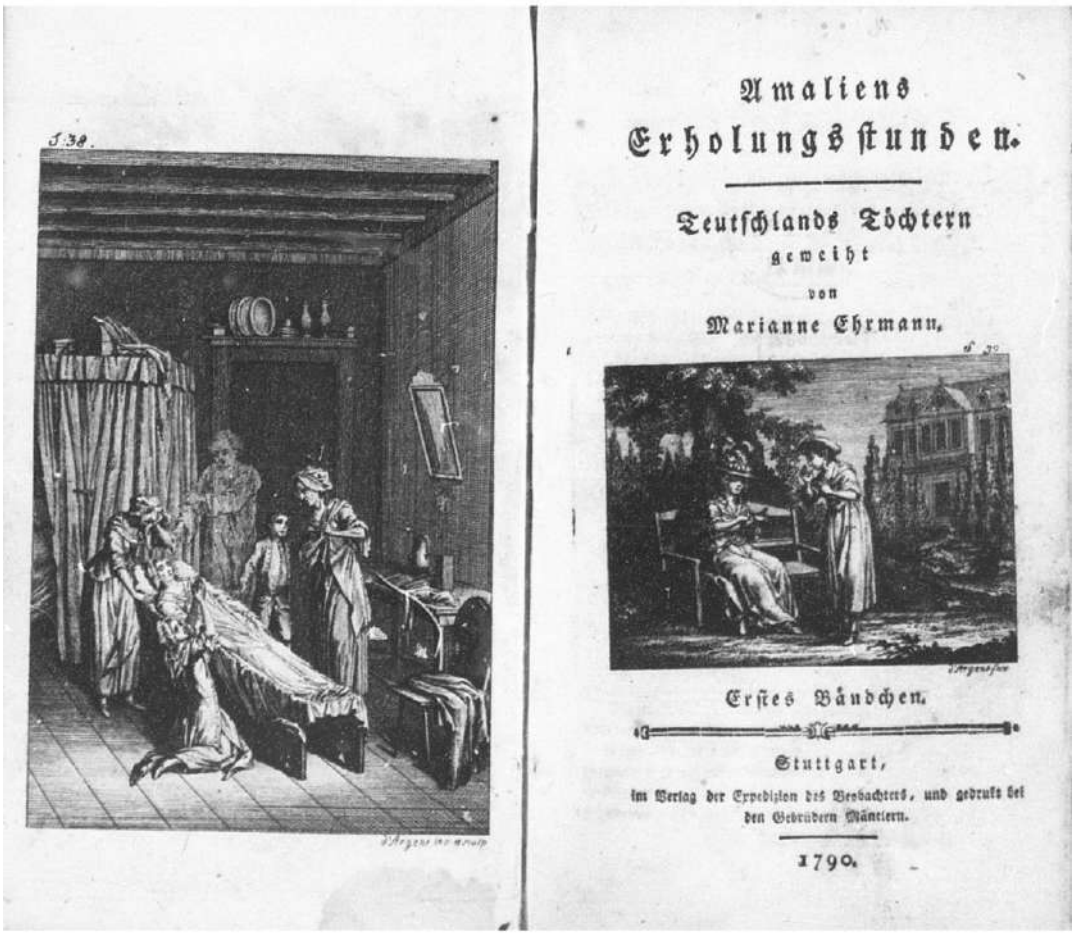


図 1　『アマーリエの休息時間　ドイツの娘たちに捧げる』1790 年創刊号内表紙

(CLXI)

land drey Reichsthaler, Sächs. Courant. Auswärtige Liebhaber können sich in allen Buchhandlungen, oder, wem es bequemer ist, bey allen L. Postämtern abonnieren.

Sämmtliche Postämter belieben sich mit ihren Bestellungen baldmöglichst bey der Zeitungs-Expedition des L. Kayserl. G. Postamts Erfurt, zu melden: die Herren Buchhändler aber sich, wie bisher, mit den ihrigen an Herrn Georg Joachim Göschen, Buchhändler in Leipzig, welcher die Hauptcommission dieses Journals behält, zu addressiren.

Nicht weniger können diejenigen, denen es gelegen ist, sich bey den Kayserl. privilegirten Addreß- und Zeitungs-Comtoir in Hamburg auf den N. T Merkur abonnieren.

Einzelne Stücke können künftig nicht anders als das Stück um acht Groschen, und ein ganzer Jahrgang den Nichtabonnierten nach Verfluß des Jahres nicht unter 3 Rthlr. 12 gr. abgeliefert werden.

Ich rechne, wiewohl ich mich in keine besondere Versprechungen einlasse, darauf, daß meine Freunde, und das Publikum überhaupt mir den ernstlichen Willen mein Möglichstes zu thun zutrauen werden; und mehr, sagt Hesiodus und Sokrates, verlangen die Götter selbst nicht von uns Sterblichen.

Weimar den 26sten Octob. 1789.

Wieland.

X.) Amaliens Erholungsstunden, Teutschlands Töchtern geweiht. Eine Monatschrift von Mariane Ehrmann, Verfasserinn der Geschichte Amaliens.

Dem Vorurtheil ungeachtet, welches sich den weiblichen Schreibereien entgegen stämmt, wagt es Amalie ihre Erholungsstunden der Bildung, Unterhaltung und Belehrung ihres Geschlechts zu widmen. Ich könnte diesen Schritt aus mehreren wichtigen Gründen vertheidigen, aber hier ist der Ort nicht dazu. Die edlen Töchter Teutschlands werden sich begnügen, wenn ich sie einstweilen versichere, daß ich die Muße, die ich zur Bearbeitung dieser Monatschrift verwenden werde, von den unnützen Putzgeschäften und von jenen seichten Schwatzgesellschaften entlehne, die uns Frauenzimmer so sehr erniedrigen, und so weit von dem hohen Zwecke entfernen, zu dem wir geschaffen sind. Ueberdies scheint mir das Schicksal seit einigen Jahren mein kargges Stückgen Brod in diesem Fache bestimmt

zu

図 2 『奢侈流行ジャーナル』に掲載された『休息時間』の定期購読者募集のお知らせ、巻頭頁。

Marianne Ehrmann: Amaliens Erholungsstunden, Teutschlands Töchtern geweiht. Eine Monatschrift von Marianne Ehrmann, Verfasserinn der Geschichte Amaliens. [Unterz.]: Die Verfasserin. In: Journal des Luxus und der Mode.
Jahrgang 4(1789) November.Interigentblatt, S. CLXI-CLXV, S.CLXI. Auf HP: http://zs.thulb.uni-jena.//jportal_jparticle_00085989

『ガルテンラウベ』*Die Gartenlaube*
－大衆化する活字メディアとその政治性

竹田　和子

はじめに　－家庭雑誌とは何か

18 世紀に啓蒙主義のもと市民階級において成長した雑誌文化は、19 世紀に入るとさらに大きな発展を遂げることになった。その中でもこの論文で取り上げる『ガルテンラウベ』*Die Gartenlaube* に代表される家庭雑誌は 19 世紀後半の社会を象徴するジャンルといえるものである。「皆のための雑誌」をモットーとした家庭雑誌は、教養的にも経済的にも出版刊行物に触れる機会のなかった幅広い層を読者として獲得し、広く流通した。

家庭雑誌の前身と考えられるタイプの雑誌はいくつかあるが、その代表的なものとしては、18 世紀の道徳週刊誌と『プフェニヒ・マガツィーン』*Pfennig Magazin* が挙げられる。前者は理性と宗教を調和させて自覚的市民へと啓蒙することを目指し発行された雑誌である。架空の人物が読者に親密に呼びかけるという形式を持ち、次第に実用的知識の紹介や読み物などの娯楽的要素が加えられていった。後者は 1833 年にライプツィヒで発行された低価格の雑誌で、「あらゆる人」を読者対象とし、知識紹介と娯楽を基本的構成要素にしていた。政治と宗教に触れることはなく、多数の挿絵が掲載されていた。家庭雑誌はこれらをモデルに、検閲制度の厳しかった復古時代に広がった、内容が容易で一見非政治的な娯楽誌やカレンダーなどからも影響を受けつつ発展した。[1] その主要購読者は、市民階級、特にこれまで書物にあまり縁のなかった小市民層の家族だった。年齢、性別、教養レベルも様々な集団を満足させるために、掲載記事の内容は非常に多様で、イラストが多く用いられた。

奉公人も含めた家族内の個々の成員がそれぞれの役割に応じて一家の生産と消費活動を行っていたかつての「全き家」は、18 世紀に入ると消費活動が中心の場となり始めた。もちろん食料や生活用品を手に入れるための家事労働は今日のそれとは違い、まだ生産活

『ガルテンラウベ』からの引用と挿絵は、Die Gartenlaube. Illustriertes Familienblatt. Hrsg.von Ernst Keil und Nachfolger. Leipzig, später Berlin, 1853-1938, 1938-1944 を Wikisource から引用し（https://de.wikisource.org/wiki/Die_Gartenlaube）（2017 年 4 月 23 日取得）、引用箇所の後ろに発行年、号、ページ数を（　）内に記した。さらにオリジナルを Wikimedia Commons　(https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Gartenlaube) (2017 年 4 月 23 日取得)のスキャン画像で確認した。

[1]　家庭雑誌の前身については、Vgl. Dieter Barth: Zeitschrift für Alle. Das Familienblatt im 19. Jahrhundert. Ein sozialhistorischer Beitrag zur Massenpresse in Deutschland. Diss. Münster (Arbeiten aus dem Institut für Publizistik der Universität Münster) 1974, S. 35-51.

動の要素が強かったが、住居と職場の分離により、公的空間である職場に対して、家庭は私的で親密な情緒的空間と捉えられ、夫婦や親子の愛情によって結びついた家族という新しいイメージが登場した。[2]一家がそろってテーブルを囲み、朗読に耳を傾ける様子はこのような私的空間としての家庭を象徴する記号となった。1848 年に 3 月革命が失敗に終わると市民階級は自信を喪失し、政治や社会から目を背けて、家庭や親しい友人と平和で安全な空間に心の避難場所を求める傾向を強くしたが、「家族」をコンセプトとした家庭雑誌はまさにその傾向に適応していた。

ところで、流通手段が十分に発達していなかった 19 世紀中頃は、アクチュアリティが重視された新聞の広がりが都市部に留まっていたのに対して、もともとアクチュアリティがそれほど重要ではなかった雑誌が全国に広がった。日刊紙が届かない地方では家庭雑誌は人々が手にする唯一の定期刊行物ですらあった。つまり、家庭雑誌は、身分、職業、性別、年齢、教養レベル、地理的境界を越えて広がったマスメディアとなったのである。これまでの定期刊行物とは比べものにならない広がりを持った家庭雑誌という現象は、早い時期から注目されてきた。例えばドイツの雑誌について通史的研究を行ったヨアヒム・キルヒナーJoachim Kirchner は娯楽雑誌の一種として家庭雑誌を挙げて、『ガルテンラウベ』をそのプロトタイプとしている。[3]

---

[2] 姫岡とし子「啓蒙の世紀」、若尾祐司・井上茂子編著『近代ドイツの歴史―18 世紀から現代まで』（ミネルヴァ書房）2005 年所収、41 頁。川越修・姫岡とし子・原田一美・若原憲和編著『近代を生きる女たち　19 世紀ドイツ社会史を読む』（未来社）1991 年、60 頁以下参照。Vgl. Werner Faulstich: Medienwandel im Industrie- und Massenzeitalter (1830-1890). Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2004, S. 63.

[3] Joachim Kirchner: Das Deutsche Zeitschriftenwesen. Teil II Vom Wiener Kongress bis zum Ausgange des 19. Jahrhunderts. Wiesbaden (Otto Harrassowitz) 1962, S. 225f.
『ガルテンラウベ』について言及した研究者は少なくない。例えば、ディーター・バルト Dieter Barth の家庭雑誌についての詳しい研究がある。Barth (1974), a.a.O. また Dieter Barth: Das Familienblatt – ein Phänomen der Unterhaltungspresse des 19. Jahrhunderts. Beispiele zur Gründungs- und Verlagsgeschichte. Separatabdruck aus “Archiv für Geschichte des Buchwesens.“ Bd. XV. Frankfurt. a.M. (Buchhändler-Vereinigung GmbH) 1975. また、Jürgen Wilke: Grundzüge der Medien- und Kommunikationsgeschichte. Köln, Weimar, Wien (Böhlau Verlag) UTB 3166. 2008, 2. durchgesehene und ergänzte Aufl. S. 240f. Werner Faulstich, a.a.O., S. 65-71. Andreas Graf: Familien- und Unterhaltungs-zeitschriften. In: Georg Jäger (Hrsg.): Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert. Bd.1: Das Kaiserreich 1871-1918, Teil 2. Frankfurt a.M. (MVB Marketing- und Verlagsservice des Buchhandels GmbH). 2003, S. 427-429 などでも『ガルテンラウベ』に言及しているが、しかしバルト同様、発行部数や人気作家 E.マルリット E.Marlitt (E.マルリットは筆名。本名フリーデリーケ・ヘンリエッテ・クリスティアーネ・オイゲーニエ・ヨーン Friederike Henriette Christiane Eugenie John 1825-1887)の小説についての記述はあるが、彼らも個々の記事を具体的に扱ってはいない。記事を紹介したものとしては、Magdalene Zimmermann: Die Gartenlaube als Dokument ihrer Zeit. München (Ernst Heimeran Verlag) dtv 435. 1967、小説を扱ったものとしては Heide Radeck: Zur Geschichte von Roman und Erzählung in der “Gartenlaube” (1853-1914). Heroismus und Idylle als Instrument nationaler Ideologie. Diss. Erlangen-Nürnberg 1967 がある。

広い流通地域と読者層を持つこれらの雑誌を読むことにより、全国規模で同じ情報が共有され、共通の感情が広がるようになった。家庭雑誌が成長した時期はまさにドイツ統一に向う戦争が行われ、一つの国家として発展を始めた時代だった。これまで想像の産物でしかなかった「ドイツ国民」としてのアイデンティティが実際に形成される際に、家庭雑誌は大きな役割を果たしたのである。雑誌を作っていた知識層は、「国民国家」という自分たちの理想を、雑誌を通して「集合的意識」(das kollektive Bewusstsein)[4]としてより広い層に行き渡らせようとした。マルクス・コッホ Marcus Koch は、マスメディアは現実を記述しそれを伝達する中で、自ら現実を構築することを指摘し[5]、『ガルテンラウベ』が国民アイデンティティをどのように醸成していったのかを分析している。

一方、読者の側も雑誌から与えられる情報をただ受動的に受け取るだけではなく、次第に自らの好みや願望を表明し始め、雑誌も無数の読者達の感情を無視することはできなくなっていった。読者と雑誌は互いに影響を与え合うようになったが、その読者層は複雑な内容を批判的に理解する力をまだ持っていなかった。家庭雑誌は、読者に批判的読書習慣を持たせないまま、牧歌的世界、高揚する愛国的世界観など読者が望む居心地の良い仮想世界へ彼らを逃避させたという負の側面も持っていたのである。読者と家庭雑誌の関係の功罪をこの論文で明らかにしていきたい。

1　『ガルテンラウベ』の発展と読者との関係

『ガルテンラウベ』は 1853 年、ライプツィヒの出版人エルンスト・カイル Ernst Keil (1816-1878) により創刊された。青年ドイツ派の影響を受けていた彼は 3 月前期からその自由主義的志向のため当局からたびたび弾圧を受けていたが、とうとう 1852 年 4 月に逮捕されてしまった。彼は監獄で、1848 年の革命後、市民階級が萎縮していくことに危機感を抱き、読者を「楽しませ、楽しませつつ啓蒙する」(unterhalten und unterhaltend belehren, 1853 H. 1, S. 1)ような新たな雑誌を創刊することを決意する。

1930 年代に家庭雑誌の研究を行ったエーファ・A・キルシュシュタイン Eva A. Kirschstein は、4 万部を超える雑誌は 5 誌しかなかったとしているが[6]、その中で『ガルテンラウベ』は他の雑誌の追随を許さない部数を誇っていた。1853 年に 5000 部でスタートし、1860 年には 86.000 部、1865 年に 150.000 部、1871 年に 310.000 部と爆発的に発

---

[4] Marcus Koch: Nationale Identetät im Prozess nationalstaatlicher Orientierung. Dargestellt am Beispiel Deutschlands durch die Analyse der Familienzeitschrift *Die Gartenlaube* von 1853-1890. Frankfurt a.M., Berlin, Bern, Bruxelles, New York, Oxford, Wien (Peter Lang) 2003, S. 11.

[5] Vgl. Koch, a.a.O., S. 115

[6] Zit. nach Faulstich, a.a.O., S. 66.

行部数を伸ばし、1875 年に最高の発行部数 382.000 部を記録、その後徐々に部数を減らしていったが、1885 年でも 270.000 部、1895 年も 275.000 部を保ち、20 世紀に入ってようやく 100.000 部となった。『ガルテンラウベ』に次いで購読者の多かった、1858 年創刊の『陸と海を越えて』*Über Land und Meer* は 1861 年に 10.000 部、1865 年に 52.000 部、1870 年に 170.000 部、1876 年に 120.000 部の売り上げ記録を残している。リベラルな『ガルテンラウベ』に対抗する宗教的家庭雑誌として創刊された[7]『我が家』*Daheim* は創刊年の 1864 年に 24.000 部で、翌年の 1865 年に 32.000 部、1866 年に 33.000 部、1873 年に 44.000 部の 4 年分の記録のみ残っている。[8] 当時の雑誌は必ずしも毎年のように正確な売上高を発表していたわけではなかったが、ライバル誌と比較してみると、『ガルテンラウベ』の発行部数がいかに多かったかが分かる。しかも 1 冊の雑誌を読んだのは 1 家族だけとは限らない。例えば 1928 年創刊 75 周年記念号には、7 家族で回し読みをしていたという読者からの恐らく 1880 年代の回想が寄せられた。

> 私はまだはっきりと知識に飢えた数人の職工たち（ベーメン・チルニッツ）の重要会議を覚えています。その中には私の父もいて、共同で有名な『ガルテンラウベ』を定期購読しようという決議がうちの居間でなされたのです。その際、（1874 年生まれの）私に、書面による注文書を 2 時間離れた町の行商人の所まで持って行き、その際毎回冊子を受け取る任務が割り当てられました。その冊子が 7 人の共同定期購読者の家族を回ると、私はそれを集めて取っておくことができました。[9]

このように 1 冊の雑誌の背後に何人の読者がいたのか、今日では推測することすらできないが、記録として残っている数値より遙かに多くの読者がいたことは確かで、国民の 60－70%にまで行き渡っていたとさえ考えられている。[10]

家庭雑誌全般に言えることだが、読者との親密な関係は『ガルテンラウベ』の特徴の一つだった。読者には du や ihr で呼びかけ、また wir、unser を多用して、読者と雑誌の一体感を醸成していた。さらに詩や小説、あるいはクイズなどを募集して誌面作りへの参加が呼びかけられ、自分の作品が誌面を飾るかもしれないという期待に多くの投稿が寄せられた。そして「小さな郵便ポスト」(Kleiner Briefkasten、1855 年までは Briefkasten)という見出しの読者からの投稿欄が設けられ、投稿者の名前と都市名がイニシャルで示されて

---

[7] Vgl. Barth, a.a.O., S. 345.
[8] Vgl. ebd. S. 437. Tabelle 3.
[9] Jubiläums-Gartenlaube S. 48, zit. nach Graf, a.a.O., S. 419.
[10] Vgl. Rudolf Helmstetter: Die Geburt des Realismus aus dem Dunst des Familienblattes. Fontane und die öffentlichkeitsgeschichtlichen Rahmenbedingungen des Poetischen Realismus. München (Wilhelm Fink Verlag) 1997, S. 59.

いた。そこに掲載されていたのは投稿自体ではなく、それに対する編集部、または記事の執筆者からの返答だったが、これにより、書いた本人には編集部と対話ができたという感覚が得られたはずで、雑誌と読者が「我々」という一体感で結びつけられることにつながった。投稿欄は、1855 年から 1885 年までは年間 52 号の発行に対して半数に設けられていたが[11]、量と頻度は時代が下るにつれて増え、雑誌の所有者が 1885 年にアドルフ・クレーナーに移ってからは、毎号のように掲載されるようになった。例えば 1888 年は年間 44 号に投稿欄がある。もっとも特にカイルの時代には、作品を掲載してもらおうと投稿してきた読者に対して、「お送り頂いた≪ジャネット≫の原稿は使えませんので、くずかご行きになりました」(1871 年 H. 34, S. 576)、「受け取りましたが、使えません」(1875 年 H. 27, S. 464)、「適当ではありません。原稿はご自由になさってください」(1878 年 H. 12, S. 206) などかなり辛辣なコメントもあった。それでも読者が離れていくことはなかったのである。

そして投稿者はドイツだけではなく、ドイツ人の海外移民や海外進出に伴い、シカゴ、カリフォルニア、フィレンツェ、バレンシア、モスクワ、ウラジオストクなど、世界の各地に広がっている。海外に移民した同胞にドイツの文化や言語を伝え、母国とのつながりを保てるようにとの意図もあったのである。[12] また海外移住後、連絡の取れなくなった身内の捜索を呼びかける「行方不明者リスト」がしばしば掲載されたが、これは当時の通信事情を考えると、移住者とドイツの親族の結び付きを保つのに非常に役立った。例えば「母の涙を乾かせ！」(Trockne die Träne einer Mutter, 1866 年 H. 29, S. 464) と言う見出しを付けて、南北戦争中のアメリカ北軍にいた息子がパトロール中に消息を絶ったとの母親からの捜索依頼が掲載されたが、同年 39 号で無事発見との知らせと並び、捜索に協力したアメリカ在住の読者達への感謝、さらにワシントンの代理店から消息が確認できた人物に依頼の載った号を送ったことや、協力者の一人がかつて植字工見習いとして『ガルテンラウベ』第 1 号の発行に関わっていたなどの情報も添えられた(S. 626)。それにより雑誌と協力者、さらに記事を読んだ読者との間の一体感はさらに強まったのである。

一方、1868 年第 39 号で女性解放運動に関して、男性がいかに女性を保護しているかを述べた上で「女性がこれら全てを放棄し、男性の愛と保護から歩み出して、完全な自立という彼女たちには不自然な地位と取り替えようとするなら、そのような地位の役目を果たすのだとか、そして特に貫徹できるのだなどという怪しいケースなら、彼女たちは自分たちの運を試すがよい―しかしその結果は自らが招いたものになる。≪女性を敬え≫というシラーの言葉はもはや彼女たちにはふさわしくないし、彼女たちはそうなると得るものよ

---

[11] Vgl. Barth, a.a.O., S. 195.

[12] Vgl. ebd., S. 284.

り失うものの方が多いのではないかと案じている」（S. 623）という記事に対しては、批判が多く寄せられたようで、同年 45 号には同じ執筆者が、「『ガルテンラウベ』第 39 号の女性解放運動についての記事は、ご婦人方の陣営を怒らせてしまったようです」、「あの記事は[…]政治に口を出し、選挙権や被選挙権を欲し、今、あらゆる文化国民の社会で女性が当然置かれている状況を全てひっくり返すような女性に向けたものです」（S. 720）と弁解する記事を新たに載せた。読者の意見が記事の執筆者に影響を与えた例と言えるだろう。読者の意見が強まったのは、この雑誌だけではない。テオドール・フォンターネ Theodor Fontane (1819-1898)もある手紙で『ヴェスターマンの月刊誌』*Westermanns Monatshefte* が「読者の好みと声に必要以上にびくびくして従っている」[13]と述べている。雑誌と読者の間には互いに影響を与え合う相互関係が成り立つようになっていたのである。

家庭雑誌は 1890 年代には実質的にその役割を終え、衰退していく。理由としては「皆のための雑誌」を目指し、内容が非常に多様だったため、次第にそこからテーマが細分化されて新たなジャンルの雑誌が生まれたこと、社会のスピードが上がり、読者がよりアクチュアルな記事を求めるようになったため、日刊紙との競争に敗れたこと、ライフスタイルの変化や写真がメインのグラビア誌の登場、さらに明るい電灯の発明が読書を家族団らんではなく、個別に楽しむ娯楽に変えたこと、さらに 20 世紀に入ると映画などの新たな娯楽が登場したことなどが挙げられる。つまり読書共同体としての家族の機能は終わりを迎えたのである。[14]

３　『ガルテンラウベ』の自由主義

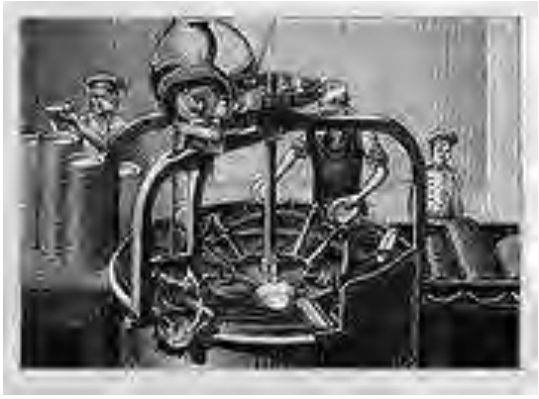
エルンスト・カイルは『ガルテンラウベ』発行にあたって決めた綱領に従い、次のような構成で雑誌を作った。[15]　１．小説・読み物(長編・短編を含めて年間約 94 作品)、２．外国の町や民族の紹介、３．歴史や同時代の出来事、４．伝記、５．技術・自然科学・通俗医学、６．文化芸術、７．社会的記事（寄付の呼びかけ、法律相談、家事の助言、求人・職探しなど)、８．娯楽的なもの（謎かけ、手品、クロスワードなど)、９．広告。旅行作家による外国の紹介は、旅行の余裕のない読者層に旅行気分を味合わせ、好奇心を満たす一方、それは「我々」と「彼ら」の対比にもつながった。1870 年代以降、ドイツの英雄や国民的行事を扱った愛国的な記事が増加したが、これらの文章を掲載することは国民への

13　Zit. nach Helmstetter, a.a.O., S. 42.
14　Vgl. Barth, a.a.O., S. 25f.
15　カイルは雑誌に、要約すると以下のような内容を掲載しようと考えていた。１．詩、２．短編小説、３．ドイツ内外の諸民族や文化、４．自然、５．人体についての知識、６．誌面に隙間があればちょっとした読み物。　Vgl. Fayçal Hamouda (Hrsg.): Der Leipziger Verleger Ernst Keil und seine „Gartenlaube“. Leipzig (Edition Marlitt) 2005, S. 4f.

奉仕と理解されていた。歴史についての論文や伝記は、高度な教養を持っているわけではない読者に合わせて学術的なものではなく、エピソードの紹介であり、親しみを感じられるように著名人の個人的、家庭的側面が描かれた。医学に関する記事は医学者が執筆し、保健衛生の観念を伝えた。このジャンルの雑誌がまるで百科事典のように世界全般の知識を与えようとしていたことがわかるだろう。そして『ガルテンラウベ』以降に発行された主な家庭雑誌は、この構成をほぼ踏襲していた。[16]

また、特に科学技術や自然科学についての記事は、ドイツ国内に限らず、世界のあらゆる最先端の技術が紹介された。例えば、電球、蓄音機、映写機をはじめとするエジソンの発明、多くの女性読者のためにフィラデルフィア万博に出品されたシンガー社のミシン(1876 年 H. 32, S. 542-544)や刺繍装置付きのミシンの紹介(1887 年 H. 22, S. 461)、コーヒーメーカーの開発(1884 年 H. 1, S. 20) から、飛行船(1884 年 H. 41, S. 683)や潜水艦(1885 年 H. 50, S. 832f.)の改良についての記事、さらには記者が同乗し、まるで実況中継をしているかのような、着陸時の事故の挿絵付きの気球飛行(1862 年 H. 37, S. 585-588)の報告、また 1883 年のロベルト・コッホによるコレラ菌の発見(1884 年 H. 26, S. 433) の紹介など記事は多岐にわたる。1886 年の都市鉄道開発についての記事では、ジーメンスがベルリンで世界初の高架鉄道を作ったが、複々線の大規模工事だったため交通量の多い地区から離れたところに線路が敷設され、不便だったことに触れ、アメリカ・ボストンの新しい高架鉄道計画を紹介、これはモノレールなので、線路を作るのに少ないスペースで済むことが指摘されている。これはマイグズ式高架鉄道のことで、1886 年にマサチューセッツ州で試験走行された。(1886 年 H. 36, S. 637) また、1885 年にパリのレストランに導入された食洗機について以下のような記事が掲載された。(図 1 も参照)

作業者によって機械に挟み込まれた汚れた食器はすぐに三つ叉のグリップの端につかまれて熱湯に浸される。油脂分が溶けるように、しばらくその中につけられてしっかりと揺すられる。それから皿はひとりでに、エネルギッシュに洗ってくれるブラシの下に行き、それから絶え間なく新しくされる冷たい水中に入り、全ての汚れが完全に取り除かれる。同じ作業者が最後に左手で皿



(図 1) 食洗機
(1885 年 H. 25, S. 415)

[16] Vgl. Barth, a.a.O., S. 182f.

をつかみ、右に見える水切り装置に挟む。

この機械は 1 日に 4000 枚の皿を洗い、皿は常にきれいな水で洗浄され、既に使用されたすすぎの水に決して触れることがないという大きな長所がある。また、たいていの女中と違い、何も壊すことがないのである。(1885 年 H. 25, S. 485)

1884 年からは技術紹介の記事は「近代の進歩と発明」(Fortschritte und Erfindungen der Neuzeit)というシリーズになった。この時代は、あらゆる分野で新発見、新技術の開発が行われ、そのたびに生活が豊かで快適になっていくことが実感できたはずである。人々は驚嘆と喜びを持って進歩を受け入れていた。それがドイツのものかどうかは大きな問題にはならなかったのである。これらの記事には自由主義的市民の楽観的進歩信仰と同時に、この進歩に背を向ける人々を「我々」と区別する意識がはっきりと現われている。

『ガルテンラウベ』の基本的価値は、進歩主義と並び寛容の精神にも置かれていた。理性と宗教を切り離して考えることが求められ、人間の自然な感情や進歩を拒否する宗教的不寛容は厳しく批判された。カイルは 1866 年第 42 号に「信心深い女性への手紙」(Brief an eine Gläubige, S. 655-657)という読み物を書いた。それはある女性に対する絶縁状なのだが、その理由が 3 つ挙げられている。第 1 は彼女が普段から「不信心者」と見なしている兄が子供を亡くしたとき、「不信心の罰だ」と言い放ったこと、第 2 にバーデンの進歩的な聖職者達に対して「銃剣で追い散らしてやる」と口汚く罵ったこと、第 3 に貧しい女性が夜なべ仕事で作ったものを買ってくれるよう頼んだのに対して、その女性が教会に行かないからと言って追い払い、その女性が日々の仕事に追われて教会に行く時間も余力もないという事情に一切配慮しなかったことである。さらにその内容をより強く読者にすり込むかのように、翌年連載がスタートした『ガルテンラウベ』の代表的作家 E. マルリットの『老嬢の秘密』*Das Geheimnis der alten Mamsell* (1867)で、この『信心深い女性への手紙』と酷似した女性達が描かれている。[17] さらに 1873 年に連載した『荒野のプリンセス』*Das Heideprinzeßchen* ではユダヤ人の祖母を持つ主人公を中心にユダヤ人も隣人として受け入れるべきだという寛容の精神がテーマとなり、祖母を排除しようとしたキリスト教徒(プロテスタント)が批判されている。[18] 不寛容に対する批判は宗派を問わず行われていたのである。

---

[17] 拙論「『ガルテンラウベ』における E. マルリットの"Das Geheimnis der alten Mamsell" —1860 年代の家庭雑誌と連載小説—」大阪音楽大学研究紀要第 51 号、2013 年、24-37 頁、特に 32-35 頁参照。

[18] 拙論（研究ノート）「E．マルリットにおける作品テーマについての考察–『帝国伯爵令嬢ギーゼラ』（1869 年）から『商業顧問官の家』（1876 年）まで–」大阪音楽大学研究紀要第 53 号、48-61 頁、特に 52-57 頁参照。

4　国民国家への熱望

『ガルテンラウベ』は一見、政治から目を背けた、家庭的でのどかな雑誌に見える。自由主義思想のため逮捕までされた編集長カイルは自身の体験から、雑誌を存続させるために政治色を出さない必要性を学んだのだろう。しかしこの雑誌の記事執筆者の中には、例えばヨドクス・ドナトゥス・フベルトゥス・テメ Jodocus Donatus Hubertus Temme (1798-1881) やヨハネス・シェル Johannes Scherr (1817-1886)、マックス・リング Max Ring(1817-1901) のように3月革命前後に当局から弾圧を受けた人物はカイルの他にもいた。自由への要求をあからさまに唱えることはなくなったが、勤勉、秩序、質素倹約といった市民階級の価値観ははっきりと主張されていた。

フランス革命が勃発したとき、フランス人が人民主権を実現したことに、ドイツの市民達は感激した。しかしまもなくナポレオンにライン左岸を奪われ、神聖ローマ帝国が解体、約 40 の領邦に再編された上、直接的、間接的にその支配を受けることになると、ドイツの市民層は失望した。そしてナポレオンへの抵抗運動は「ドイツ最初の国民運動」[19]となった。解放戦争では女性も含めてあらゆる人々が戦争に関わった。しかしウィーン会議によって「取り戻された」秩序の結果は、解放戦争で「祖国」のために一体となって戦ったこのような人々にとって満足できるものではなかった。市民たちは解放戦争から国民的国家が生まれることを望んでいたのだが、神聖ローマ帝国があった地域に作られたドイツ連邦は、連邦議会はあったものの、結局はそれぞれの領邦君主の政治的主権が尊重される国家連合だった。そして人々の不満は 1819 年のカールスバート決議などにより押さえつけられていく。

しかし彼らは様々な協会を作り、そこでの催しの中でドイツ統一、自由、平等、憲法制定を求めるようになった。早いものでは 1814 年、ライプツィヒの諸国民の戦いの 1 周年記念日に催された国民祝祭、1817 年のヴァルトブルク祭などがあるが、1820 年代後半になると、これらの祝典は全国規模で行われる「公衆の祭典」[20]に発展した。ハンバッハ祭(1832 年)、グーテンベルク祭(1837 年、1840 年)、シラー記念祭(1839 年)、デューラー像(1840 年)、モーツァルト記念碑(1842 年)、ボニファティウス像(1842 年)、バッハ記念碑(1843 年)、ゲーテ記念碑(1844 年)の序幕式など枚挙に暇がない。さらに 1845 年以降毎年ドイツ合唱祭が行われるようになった。ドイツ最初の合唱組織はナポレオン占領時代の 1809 年にベルリンで結成されていたが、その状況からも分かるとおり、始めから強固な愛国主義を唱えていた。「ともに歌う者は、ある意味で、ともに生きる者であったが、それは

---

[19]　オットー・ダン著、末川清他訳『ドイツ国民とナショナリズム　1770―1990』（名古屋大学出版会）1999 年、45 頁。
[20]　ダン、前掲書、68 頁。

また国民解放闘争の情熱に生きる者」[21] だったのである。

ドイツ文化を代表する人物、聖人や英雄を記念する祝祭それ自体は、取り締まりの対象となるような自由主義的、革命的運動には見えない。しかし民族共通の英雄を称えることで、ドイツ統一と「国民」の連帯への要求を表現することができ、数万人規模の祭典の中でさらに自由や人権を求める声が上がっても、もはや誰も中止させることはできなかっただろう。こうして社会の緊張感は高まっていき、1848 年の革命を迎えることになった。様々な領邦で出版の自由が認められ、フランクフルト国民議会が開かれ、国民国家創設のための憲法を制定する議論が行われることになった。その革命が結局失敗に終わり、反動的政策が強まると、市民層はもはや政治に関わろうとしなくなった。非政治的な『ガルテンラウベ』の誌面は当時の時代状況を反映するものである。そしてその意味では、この雑誌は決して非イデオロギー的ではない。50 年代末に、出版の自由に対する緩和的措置が取られるようになると、「非政治的衣装をまとった戦闘的・傾向的雑誌という正体」[22]を現すようになる。彼らがまず求めたのは祖国統一だった。3 月前期に市民階級が求めた「自由と統一」という問題に関してまず「統一」を選んだのである。

1867 年に北ドイツ連邦議会が開かれた際、『ガルテンラウベ』は 5 回にわたって記事を掲載した。その記事は次のような言葉で始まっている。

> フランクフルトからベルリンへ、パウルス教会からプロイセン議会へは大きな一歩だった。誰もがこの大きな一歩をともに踏み出すことに乗り気だったとか、あるいは内心こだわりがなかったという訳ではない。私はそれを分かり、感じ、理解している。それでもこれは大きな一歩なのだ。―前に進もう。[...]
>
> しかしこれは月の耀く文芸の魔法の国から、冷静な現実の真昼のように明るい国への移行なのだ。[...]
>
> それ故ここベルリンでの冷静で真剣な現実は、当時のフランクフルトでのあらゆる詩情やロマンよりも、結局我々の目的を達成するのに適していたのだろう。(1867 年 H. 14, S. 217)

以後、『ガルテンラウベ』ははっきりとドイツ統一を求める国民主義を打ち出していく。もっとも愛国的記述は 60 年代にいきなり始まったわけではなく、3 月前期の市民階級の自由主義的運動の中に包摂されていた。そして『ガルテンラウベ』が他の家庭雑誌と比べて

---

[21] ジョージ・L・モッセ著、佐藤卓巳、佐藤八寿子訳『大衆の国民化』（柏書房）1995 年、第 2 刷 146 頁。

[22] Barth (1975), a.a.O., S. 206.

特に保守的だったというわけではなく、その基本的立場はあくまで啓蒙的、進歩主義的世界観にあった。それはまさに、3 月革命に参加し、60 年代にビスマルクとの協力関係を持つことになった国民自由主義者の態度と同じだった。そして 80 年代ごろから強まる反ユダヤ主義的傾向はそれほど強くはない。

1860 年代にはドイツの国家統一につながる 3 つの戦争が続いた。64 年の対デンマーク戦争、66 年の普墺戦争、そして 70 年の普仏戦争である。戦争に際して『ガルテンラウベ』は戦地からの挿絵を交えた報告、過去の国民的英雄紹介、戦意を鼓舞、あるいは戦没者を悼む詩を何度も掲載した。例えば 1870 年 7 月 19 日開戦の普仏戦争についてどのような記述がなされたのか、いくつかの例を挙げたい。『ガルテンラウベ』は従軍記者の他挿絵画家も派遣し、臨場感のある記事を載せる工夫をした。逆に戦地では軍事郵便を利用して発行された雑誌を戦地に送り、兵士達を定期購読に誘った。戦争について初めての記事が載ったのは第 32 号だが、第 34 号には次のような読者へのメッセージが掲載された。

> 今号からようやく我々の従軍記者からの直接の報告ができるようになりました。我々は、毎号印刷を 3 回行うにもかかわらず、日刊紙より少なくとも 3 週間、そして他の全ての週刊誌より 8 日遅れてしまいますが、我々の読者の皆さんはこの遅れの原因をご存じでしょうし、我々の記事をよく選択し、芸術的装飾によって、特に戦後のため、後の世代と歴史記述のためにも真実と価値のあることだけを我々の雑誌に記録することにより、この不都合を埋め合わせようとすることもおわかりでしょう。(S. 1)

1870 年第 32 号から連載された「ラインを巡る先の戦い」(Der letzte Krieg um den Rhein)ではまず兵士が戦地に向かう直前のライプツィヒの様子が描かれた。そこでは出征前に結婚式を済ませようというカップルが宗派の違いを問題とせず、近くにある教会で結婚式を挙げたり、駐屯地では乗馬用の高級な馬と農耕馬が「身分の差」を超えて、並んで軍務に当たる様子が描かれたりと若干のユーモアを交えて、国中が一団となって敵に立ち向かったことが示される。

> この一つの町だけでも一つの感情の中で喜びあふれた全ドイツ国民を我々に見せてくれる！国民自由主義者、進歩主義者、保守主義者はどこにいるのだろう。(S. 510)
> 全ドイツ人の一体感が呼び起こされた。反動圧力がそれを再び抑圧することはできなかった。(S. 523)

などの記述では、一人一人の人間は、「ドイツの兵士達」、「男達」のように、ドイツという

全体の中に完全に溶け込んでいる。個人が注目されるのは、祖国のために特に優れた功績を上げた場合だけである。[23] また、フランス軍の外国人部隊についての記事では、文明国家の「我々」と野蛮な「彼ら」が決して相容れることのないものとして対比されているが、そこには多様な人種がいるフランスに対する恐怖と嫌悪感が表われており、そしてそれを利用しようというナポレオンⅢ世の卑劣さが強調されている。別の号に掲載された挿絵にも、文明国ドイツに対するフランス軍の捕虜達の異質性が強調されている。（図 2 参照）

彼[ナポレオンⅢ世] のコルシカの血には、彼に対する反乱に加わったカビール人と彼らの黒い女達の精妙な残虐さが感銘を与えたのかもしれなかった。哀れなフランス人捕虜の耳を切り落としたり、(鼓手を除いて)彼らの親指を切り取ったり、手や足の爪を摘み取って、それから彼らを灼熱の太陽の下で木にくくりつけ、彼らにそのほかにもっとぞっとする拷問の苦しみを与える残虐さである。彼[ナポレオンⅢ世]はそれにより、これらの野蛮人の恐ろしさを文明に対して利用することを思いついたようである。
（1870 年 H. 33, S. 518）

（図 2）フランス人捕虜の移送
(A.シャール画、1870 年 H. 37, S. 597)

戦争が終わると、勝利とドイツ統一を記念して様々な記念碑が建てられた。その中でリューデスハイム郊外のニーダーヴァルト記念碑については戦後すぐに記念碑建立計画が紹介され、1877 年の定礎式（H. 44, S. 743-746、図３参照）、1883 年の完成式典についての記事(H. 38, S. 616-619、H. 39, S. 635-638、図 4 参照)が掲載されるなど大きく扱われた。読者に計画実現のための寄付が呼びかけられ、国外のドイツ系の人々からも多くの寄付が寄せられたこと、最終的にはドイツ皇帝の力添えが大きかったことなどが詳しく紹介されるとともに、式典や記念碑の彫刻の細かい説明がなされた。他の記念碑、例えばデトモルトのヘルマン記念碑(1875 年)などでも同様の記述がある。ニーダーヴァルト記念碑では、

[23] Vgl. Marcus Koch, a.a.O., S. 141f.

（図 3）ニーダーヴァルト記念碑定礎式
（1877 年 H. 44, S. 744）

（図 4）ニーダーヴァルト記念碑
（1877 年 H. 39, S. 636）

記事の最後に、

> 我々は戦いの民ではなく、裏の意図や征服欲なく我々の統一を喜ぶ平和の民でいたい。しかしもし外国の思い上がりが堂々たる流れ、我々のラインを再び脅かすようなことがあれば、この記念碑が真剣に、「今や本当に一つになったドイツ帝国の建設」を忘れるなと警告してくれるだろう。(1883 年 H. 39, S. 638)

という記述がある。翌号に掲載された「ライン河畔のゲルマニア」(Germania am Rhein) という詩には

> 平和の天使に向けて―
> 血塗られた戦いの中で
> 我々は祝福と勝利を求めない！
> 功名心に籠絡されて
> 血眼で獲物を探しはしない
> まるで我が家で
> 敬虔なシュロがうなずくように喜ぶのだ！
>
> しかし敵が厚かましく思い上がって
> 戦争を望むなら、
> さやの中で安らっている
> 剣はさらに鋭く研がれ
> さらに手は重い一撃のために

戦に鍛えられている！―
我々のドイツの祖国のためには
どんな犠牲も大きすぎることはない！(H. 39, S. 628)

というエーミール・リッタースハウス Emil Rittershaus(1834-1897)の詩が掲載されている。「我々は平和を望むが、戦は厭わない」という記述が繰り返され、それは読者にすり込まれていくことになる。このように祖国統一に関して、国民の一体感、共同体への貢献、犠牲を厭わない勇気の賞賛と哀悼、「我々」と「彼ら」の峻別が一貫して表われているのである。

５　内なる帝国建設

ようやくドイツ帝国が建設された時、外面的な統一は完了したが、内なる統一を果たすため、今度はドイツ内部の「敵」との戦いが始まった。それは文化闘争を背景にしたカトリック教徒と、社会主義的に組織化された労働者である。この章では、それぞれの「敵」を『ガルテンラウベ』がどのように考えていたかを述べていきたい。

５－１　カトリック批判

『ガルテンラウベ』は発行地がライプツィヒだったため、宗教的にはプロテスタントに属していたが､啓蒙主義の流れを汲み､一貫して理性と宗教は両立できると主張しており、寛容の精神を重視し、宗派を問わず人間性より宗教的形式を重んじる考え方やドグマ主義を批判していた。従って先に述べた通り、批判はもともとカトリックにもプロテスタントにも向けられていた。

しかし文化闘争が始まったとき、その批判の矛先はカトリックの教皇至上主義やイエズス会に向けられ、1873 年第 31 号には元イエズス会士の体験記が掲載される。ただし批判されているのは、やはり教義そのものではない。例えば、この人物の経験では、両親への愛は罪深いものだとして嘲笑され､「個々人の国民感情は全て、自分があらゆる国民の間に散らばっている唯一の国家[ローマのこと]の一員だと感じるためには、完全に止めなければならない、[...] 特別な友情（amicitia Particulars）は堅く禁じられたもので、多くの罪の源と見なされる。神の他に誰も愛してはならないのだから、それはそれ自体が既に神には不快なことだ。さらに親しい友人同士は簡単に自分たちの困難について意見交換し、なぜ友情は堕落をもたらすのかと教団に反抗的な精神を強めることになるかもしれない」(S. 501）ということを理由に、家族、祖国そして友人をつなぐあらゆる絆は断たれなければならないとされていた。また「ヒエラルキーの権威ある言葉への理性と意思の絶対的服

従と隷属」（S. 501）が唯一の美徳だと言うように、自分の理性と感情を縛り、教団に絶対服従しなければならず、また様々な聖人を敬うための行事があり、まるでキリストより聖人達の方が大事にされているように見えることが述べられ、さらに清貧を説きながら贅沢な暮らしをしていることなども批判の対象となっている。

> 清貧とは、団員が所有しない―あるいは何かに対して自由な使用権を持っていないと理解することができる。けれどもこれは現実の貧しさというよりはむしろ依存、新しい形の服従なのである。なぜなら修道院での生活は全く悪いものではなく、実際は多くの市民や貴族の家庭よりも良い暮らしだからだ。(1873 年 H. 33, S. 532)

理性や進歩に背を向け、自然な愛情を抑圧する態度は『ガルテンラウベ』にとっては受け入れがたいことで、何より祖国に集う国民の一体感に染まらずローマに帰属意識を持つ「彼ら」は帝国の内なる敵だったのである。それは 80 年代に入ってからも変わらなかった。

５－２　社会主義者

ビスマルクによる文化闘争は望んだ成果を上げられることなく、1878 年に終わりを迎えるが、代わって「祖国の敵」として登場したのは社会主義運動だった。『ガルテンラウベ』の主な購読者だった中･下層市民にとって、1870 年頃にはまだ労働者は取るに足らない存在だったが、1875 年に社会主義労働者党が結成され、1878 年 5 月と 6 月に 2 回にわたってヴィルヘルム 1 世狙撃事件が起きると「社会民主主義の公安を害する恐れのある動きに対する法律（いわゆる社会主義者鎮圧法）」が作られた。『ガルテンラウベ』は同年 25 号に「社会民主主義と学校」(Die Sozialdemokratie und die Schule)という記事で早急に社会主義労働運動に対応しなくてはないと訴えた。「このままではいけない、何かしなくてはならない！」という劇的な文句で始まったこの記事は次のように続く。

> 我々の祖国の全ての場所、地域で、様々な党派と階級で、しばらく前からこの緊急通報は今日の支配的な見出しとなっていた。その叫びは一連の保守主義者と自由主義者の間で、そしていわゆる社会民主主義が我々の存在、我々の未来の幸福を脅かすという共通の危険のせいでとうとう同様に太平の夢を破られ、動揺しているいわゆる鈍重な大部分の平和的市民達からも、ますます確実にますます緊急に、そして不安に満ちて響いている。[...]危険はそこにあるのだ。(S. 408)

しかしこのような危機感に満ちた筆者が問題解決のために打ち出した方法とは、国民経

済を学校の学習対象にすることだったのである。学校で労働者達に、財産や、価値、購入という概念をきちんと理解させれば、「自分の雇用者の支払い能力の裏に世界市場の支払い能力があるという意識が生まれないだろうか。そして自分が賃金引き上げに関して何を要求し、追求することが可能で許されるのか、何が不可能で許されないのかについて、多かれ少なかれ明確な理解、あるいは少なくともそれを意識させることにはならないだろうか。倹約と法的安定性が資本形成の 2 つの本質的要因だと言うことを認識すれば、一方では資本と≪守銭奴階級≫について全く別の見方が、他方では自らの倹約に関してよく考えてみることにはならないだろうか。」(S. 412) まるで労働者に倹約と賃金が払われる仕組みを教えれば全てが解決するといわんばかりの論調には、筆者が問題の本質を見ていないという印象を禁じ得ない。そして、読者投稿欄にはこの記事が好評だったとの編集部からのコメントがつけられているのである。(H. 28, S. 472)

おわりに

ビスマルクの飴と鞭の政策により、それほど大きな労働運動は起きなかったこともあり、80 年代に『ガルテンラウベ』で労働問題が大きく扱われることはなかった。1878 年に編集長エルンスト・カイルが死亡し、この雑誌は 1883 年にシュトゥットガルトのアドルフ・クレーナーAdolf Kröner(1836-1911) に売却された。理想家カイルに対してクレーナーは実業家だった。コッタ社を始めいくつもの出版社を買収して巨大出版社を作り、ドイツ書籍業組合の理事長にもなった人物である。彼の下で『ガルテンラウベ』は「近代的で時代に即した出版の装い」[24]を得ることになった。より多くの、より美しい挿絵が掲載され、ヴィルヘルミーネ・ハイムブルク Wilhelmine Heimburg や E.ヴェルナーE. Werner[25]、イーダ・ボイ＝エート Ida Boy-Ed ら人気女性作家やテオドール・フォンターネ、パウル・ハイゼ Paul Heyse、フリードリヒ・シュピールハーゲン Friedrich Spielhagen らの人気作家を獲得する。女性作家の割合はカイルの時代には 20%以下だったが、1881 年から 1902 年の間に 50%に上昇し、より多くの女性読者獲得につながった。しかし 80 年代以降の自然主義作家に注意が払われることはなかった。

科学技術の発展を伝える記事に読者は感嘆していたが、工業化が進むにつれて市民階級は分裂し、ブルジョアは富をつかむ一方、下層市民は増加する労働者に飲み込まれつつあった。しかし先の社会主義労働運動についての記事のように、『ガルテンラウベ』が時代の問題を直視することはなかった。この雑誌を作ったカイルら 3 月革命期の自由主義市民た

---

24 Barth, a.a.O., S. 331.

25 本名エリーザベト・ビュルステンビンダーElisabeth Bürstenbinder (1838-1918)、E. ヴェルナーは筆名である。

ちは、19 世紀も中ごろになると、既にエリート層となり、より下の階層に対して、既得権を守ろうという意識が働くようになっていた。ドイツが統一し、立憲国家が成立した時、48 年革命の理想の多くが実現した。彼らは自分たちがこの国を作り、支えていると認識していたが、1878 年以降ビスマルクが保守党と協力関係を結ぶようになると、市民層は帝国の主たる担い手とは言えなくなってしまった。しかしそのような状況下でもこの雑誌の多くの記事や小説作品は読者を、ただ現実から「のどかな牧歌的世界」、「平和な家庭」、あるいは「科学技術の発展した豊かな世界」、「祖国への熱狂」という仮想世界へ逃避させただけだった。「我々」と「彼ら」という分かりやすい図式に慣れた読者は容易に仮想敵を作り出し、「我々」という一体感に浸っていたのである。

『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte* ―女性による女性のための雑誌

桑原　ヒサ子

はじめに

啓蒙主義時代の道徳週刊誌に触発され、18 世紀後半に女性によって女性雑誌が刊行されるようになった。それから第二次世界大戦後の 1950 年代までのほぼ 200 年間の女性・家庭雑誌を辿る中で、ここでは 20 世紀前半を代表する女性雑誌として、ナチス政権期に発行部数 140 万部で女性雑誌市場第 1 位を誇った[1]『ナチ女性展望』(1932 年 7 月 1 日号～1944/45 年号）[2]を取り上げる。

1931 年、ナチ党指導部はすべての親ナチ女性団体を解散させ、「ナチ女性団」NS Frauenschaft に統合させた。ナチ党は 1919 年の結成以来、男の結社を自認し、女性党員は党指導部から除外されていたため、女性の活動は彼女たちに任されていた。その中から、地方でも全国レベルでも行動力のある女性指導者たちが登場した。ナチ党が女性を無視したことが、かえって女性の自立を助長する結果となった。しかし、組織間の対立がエスカレートし混乱を招いたため、ナチ指導部は対処を迫られたのである。

『ナチ女性展望』は、ナチ女性団設立翌年の 1932 年 7 月に女性団の機関誌として創刊され、1934 年 1 月からは「党公認の唯一の女性雑誌」となる。(図 1) 翌月には、ナチ女性団全国指導者のポストを巡る争いに終止符が打たれ、ゲルトルート・ショルツ=クリンク Gertrud Scholtz=Klink(図 2)がナチ女性団の全国指導者に就任し、11 月にはヒトラーAdolf Hitler から全国女性指導者 Reichsfrauenführerin の肩書きを許される。これにより彼女は

1　しかし、女性雑誌市場を独占することはできなかった。2 大出版社であるドイツ出版社（旧ウルシュタイン社）とユニヴァーサル出版社の出版する女性雑誌の発行部数は 1938 年末に 230 万部を数えていた。ただし、各誌の発行部数は平均 5 万部程度であった。

2　雑誌の号数の付け方が特殊なので、簡単に説明しておこう。創刊号が発行された 1932 年 7 月から翌年 6 月までの 1 年間を「初年度」と呼ぶ。したがって、廃刊になった 1944/45 年号は「第 13 年度」になる。表紙には発行年月が記載され、第 12 年度 7 号には「1944 年 3 月」とあるが、8 号から西暦のみとなる。しかし内容から何月号かは分かる。最終号の第 13 年度 4 号には「1944/45 年」と記載され、その前号の 3 号は「1944 年」とだけあるが、記事からクリスマス号であることが分かる。最終号は年越しを意識した表記となったと考えられる。

発行頻度も大抵は表紙に明記されている。「14 日に 1 冊」のペースで発行され、第 8 年度 18 号（1940 年 3 月第 2 号）から「月 2 冊」、第 10 年度 16 号（1942 年 3 月）から「3 週間に 1 冊」、第 11 年度 15 号（1943 年 5 月）から「月 1 冊」となる。

頁数については、創刊号の 28 頁から第 2 年度 5 号（1933 年 9 月第 1 号）で 32 頁に増頁。第 8 年度 6 号（1939 年 9 月第 2 号）で 28 頁に減少。戦時統制措置として用紙節約のために新聞は 12 頁、グラフ雑誌は 28 頁に制限された。しかし、翌 10 月第 2 号で 20 頁に、第 12 年度 1 号（1943 年 9 月第 1 号）からは 20 頁と 16 頁が交互になる。1943 年 1 月にスターリングラード戦でドイツ軍が降伏し、敗戦への決定的転機となった時期である。第 12 年度 12 号（1944 年 8 月）で 12 頁に減少。廃刊の 1944/45 年号は 4 頁という薄さになる。

ナチ女性団のみならず、国内すべての女性組織を統轄する権限を握ることになった。

『ナチ女性展望』を出版したのは、ショルツ=クリンクに統率される全国女性指導部 Reichsfrauenführung（図 3）の第 4 部門「新聞・雑誌・プロパガンダ」だった。ここで働く女性たちは、女性カメラマンや映画製作者を雇い、日刊新聞の編集者とコンタクトを取りつつ、『ナチ女性展望』のほかにも何種類かの女性雑誌を刊行し、女性問題をテーマとする自主制作の映画の上映会や展覧会を開催した。『ナチ女性展望』は、女性の編集・発行による、つまり女性による女性のための雑誌として読者対象だった中産階級の女性に多大な影響を及ぼすことになった。

図 1　第 3 年度 15 号（1935 年 1 月第 1 号）創刊号から第 4 年度 20 号（1936 年 3 月）までは、ベージュの表紙にデザイン化された *NS Frauen Warte* が濃茶色で描かれている。その下に Die einzige parteiamtliche Frauenzeitschrift とある。

ナチ党の政権掌握後に、ナチ女性団に与えられた課題は、1933 年 3 月から 4 月にかけて行われた強制的同質化によりナチ化を受け入れた多数の非ナチ女性団体を統合したドイツ女性事業団 Deutsches Frauenwerk の取り込みだった。ショルツ=クリンクは、彼女の前任者が非ナチ女性団体を妥協なく従属させようとして失敗した経験をふまえて、個々の女性団体を党の方針に服従させる一方で、その活動において比較的高い独自性を約束した。こうして彼女は難なくドイツ女性事業団の取り込みに成功する。各団体の指導者ポストにはナチ女性団員が就いたが、どの女性団体も活動の継続を望んでいたのであり、エリート集団であるナチ女性団とその下に組織されたドイツ女性事業団は一体で活動し、『ナチ女性展望』はその報告の場となった。1939 年時点でナチ女性団には 200 万人、ドイツ女性事業団には 400 万人の団員が所属していた。[3]

図 2　全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ=クリンク
第 9 年度 12 号（1940 年 12 月第 2 号）の折り込み写真。ヒトラーの専属カメラマン、ハインリヒ・ホフマン撮影

[3]　そのほか、ドイツ労働戦線（DAF）女性局の 500 万人の女性労働者と、10 万人以上の女性教師の合計約 1200 万人の女性たちがショルツ=クリンクの監督下にあった。クローディア・クーンズ『父の国の母たち』（上・下）時事通信社、1990 年、（上）286 頁。

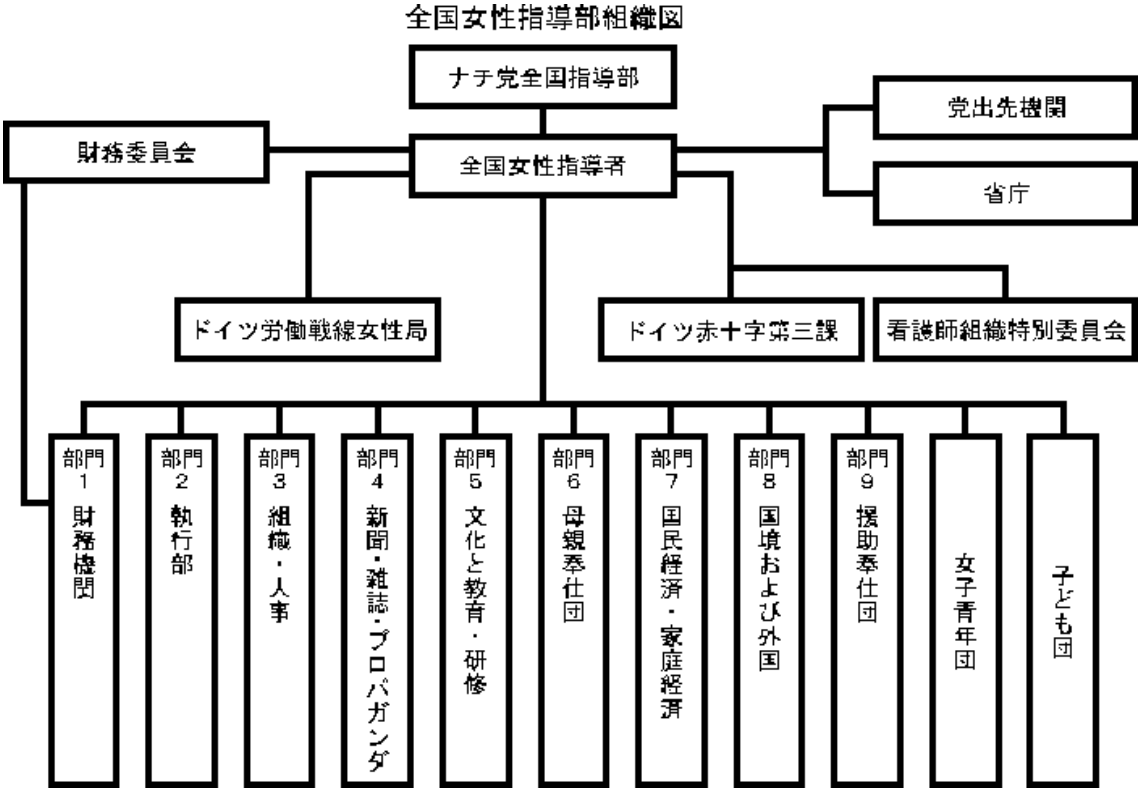


図 3　第 7 年度 16 号（1939 年 2 月第 1 号）490-491 頁[4]

本論においては、まず女性雑誌の流れを 19 世紀後半以降に訪れる大衆メディア時代を中心にまとめ、『ナチ女性展望』が女性雑誌としてどのような特徴を持っていたのか確認する。その上で、その特徴がナチス政権期に具体的に果たした役割を明らかにし、最後に、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の中産階級の女性たちの社会進出とその限界を 19 世紀末に起こったブルジョア・フェニズム運動との関係から考察する。

1. 『ナチ女性展望』までの女性雑誌の変遷[5]

(1) 18 世紀啓蒙主義時代から 19 世紀の革命期の女性出版者たち

女性雑誌とは女性を読者対象とし、女性の利益となる内容を提供する定期刊行物であると規定すると、その出版は「道徳週刊誌」まで遡れる。イギリスの雑誌を手本とした道徳週刊誌は啓蒙思想を拡大し、その価値観の世論形成を目的としていた。読者対象は幅広い教養市民層、そして女性だった。市民階級の比較的上位の女性は教養があり徳が高く、自分の頭で考えることが望まれた。道徳週刊誌は、市民階級の識字率を上げ、さらには女性を読むことから投書欄で自己表現することへ導いていった。

4　筆者による和訳版。なお、ページ数は号ごとでなく、年度ごとに通して表示されている。
5　このテーマに関しては、拙論「女性雑誌出版史と『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte*」『敬和学園大学研究紀要』第 26 号、2017 年、23～43 頁参照。

18 世紀後半になると雑誌に投稿し、雑誌を出版する女性たちが登場する。しかし、女性の仕事は家事と家庭に限定されるべきという確固とした社会通念があったため、当時の性別役割分業観からの逸脱を恐れ、女性出版者たちは男性を装ったり、女性であることは公表しても実名は伏せて出版した。実名で雑誌を発行した最初の女性はゾフィー・フォン・ラ・ロッシュ Sophie von La Roche だった。とはいえ彼女も、同じく実名を公表したマリアンネ・エールマン Marianne Ehrmann も文筆活動で成功してから雑誌出版に携わっており、初期の小説は匿名で出版していたのである。[6]

18 世紀後半の女性雑誌の教育の目的であった「『教養ある』主婦であり妻」という女性像は、確かにそれまでにない新しいものだったが、この時代、女性が私的領域に留まって権利も自立もなく父や夫に従う存在であることには変わりがなかった。啓蒙的・教訓的内容の女性雑誌は次第に人気を失っていき、19 世紀半ばに再び注目を集めることになる女性雑誌は、教化を目的とするのではない、政治的女性雑誌だった。

1830 年のパリ革命により、ドイツにも伝播した革命の理想は女性にも影響を及ぼした。女性たちは自分たちが置かれた差別的社会状況を認識し、1840 年代に至る「三月前期」、とりわけ 1848 年、1849 年の革命期に、新聞・雑誌を通して女性にも市民権と義務を与えるよう要求した。しかし、1849 年 5 月のドレースデン蜂起の失敗後、反動の時代が訪れる。

革命期に、マティルデ・フランツィスカ・アネケ Mathilde Franziska Anneke の『女性新聞』*Frauen-Zeitung*（1848 年 9 月 27 日から 3 号）、ルイーゼ・アストン Louise Aston の『義勇兵　芸術と社会生活のために』*Der Freischärler. Für Kunst und soziales Leben*（1848 年 11 月 1 日～12 月 6 日の 7 号）、ルイーゼ・ディトマル Louise Dittmar の『社会改革』*Soziale Reform*（1849 年に数号）、そしてルイーゼ・オットー=ペータース Louise Otto=Peters の『女性新聞』*Frauen-Zeitung*（1849 年 4 月 27 日～1852 年 6 月 27 日）の 4 紙が発行された。

女性のために社会活動を推し進めることが女性出版者たちの信念だったが、この時期にとりわけ女性が新聞・雑誌を発行することは極めて勇気のいることだった。ディトマルについては廃刊理由は不明だが、アネケとアストンの新聞が短命に終わったのは検閲のせいだった。オットー=ペータースも、1851 年 3 月にザクセンで女性が新聞・雑誌の編集者になることを禁じる新たな新聞法が発効される前に、新聞法の緩いプロイセンのゲーラに移って出版を続けたが、やがて廃刊に追い込まれている。[7]

---

[6] Brunold-Knop, Stefanie: Der Frauenjournalismus-Teil 1: Schreibende Frauen im 18. Jh. In: Geschichte-lernen.net/frauenjournalismus-18.jahrhunderthtml.(7. 3. 2017)

[7] Brunold-Knop, Stefanie: Frauenjounalismus, Teil 2-Politischer Frauenjounalismus im 19. Jahrhundert. In: Geschichte-lernen.net/frauenjournalismus-19.jahrhunderthtml. (7. 3. 2017); B.-K., S.: Emanzipation im 19. Jh.-Louise Otto-Peters und ihre “Frauen Zeitung” In: Geschichte-lernen.net/frauen-zeitung-von-louise-otto-peters. (7. 3. 2017)

この頃の女性運動は一つにまとまっていたわけではなかった。アネケはアストンを擁護した少数派だったが、オットー=ペータースは、女性を男性のカリカチュアに貶めたと、アストンを激しく批判した。多くの啓蒙された女性たちがアストンを敵視したのは、彼女の奔放な生活態度ではなく、宗教が女性を厳しく束縛しているとの主張だった。彼女たちはビーダーマイヤー期の女性をその居場所である台所から連れ出したいとは思っていたが、献身、犠牲そして愛といった女性に対する宗教的要求を問題にするつもりはなかったのである。

(2) 19 世紀後半から 20 世紀初頭の女性団体・政党の機関誌

ルイーゼ・オットー=ペータースは 1865 年、教員で女子教育の発展に尽したアウグステ・シュミット Auguste Schmidt とライプチヒ女性教育協会を設立し、同年に地方の女性教育協会の中央組織として「全国ドイツ女性協会」Allgemeiner Deutscher Frauenverein (=ADF) を発足させた。ADF はドイツ初の女性運動の全国組織である。彼女は 30 年間代表を務め、シュミットと共に機関誌『新しい道』*Neue Bahnen* (1866 年～1920 年) の編集にも携わった。

ADF に続いて全国レベルの女性組織が誕生し始め、出版の責務を感じた勇気ある個々の女性出版者に代わって、女性運動の全国組織が機関誌を発行する時代となった。それぞれの機関誌の主要テーマは女性の教育の権利だったが、この時期も女性の本来の職務は主婦であり母であるという主張は一度として問題視されなかった。

自立した政治活動誌や政党機関誌は、1848 年の革命から帝国樹立までの様々な段階を経て確立していくが、社会主義者鎮圧法 (1878 年～1890 年) の廃止後は自由に展開できるようになった。ADF は 1890 年に会員が急増し、新しい女性団体の誕生もあって、1894 年 3 月に新たな上部中央組織として「ドイツ女性団体連合」Bund Deutscher Frauenvereine (=BDF) が誕生する。1890 年代には BDF のブルジョア穏健派の機関誌『女性』*Die Frau* (1893 年～1944 年) [8]のほかにも労働者階級、社会民主主義、急進的なもの、プロテスタント、カトリック、ユダヤ主義等、様々な女性運動組織の機関誌が発行され、政治色も濃くなってゆく。すなわち、20 世紀初頭に至る女性運動・組織は実に多様であって、一つにまとまることは考えられなかった。

BDF は女性の教育、より良い労働条件、社会参加を勧め、後には選挙権獲得のような政治的権利も要求していく。しかし、全ての団体をまとめるためには、それぞれの団体活動には

---

[8] 創刊には、教育学者で女権拡張論者のヘレーネ・ランゲが尽力した。『女性』は女性運動の伝達のほか家庭雑誌の手法を用いて、大衆文学、家事や躾などの日常記事を掲載して、女性運動の目標に向けて女性たちを獲得しようとした。BDF の機関誌としては、1933 年にナチスによる強制的同質化を迫られ解散するまで発行されたが、その後は 1944 年まで、BDF の会長も務めたゲルトルート・ボイマーによって刊行された。

口を挟まず、上部組織として穏健路線を取らざるを得なかった。初代会長アウグステ・シュミットは設立集会で、政治的傾向を持ち込まなければ、女性労働者団体も歓迎すると述べた。この留保付き発言の背景には、政治的団体での女性の活動を禁止する 1908 年まで有効だった結社法があったからだが、BDF の会員だったミンナ・カウアーMinna Cauer [9]は女性社会民主主義者の排除に抗議し、ドイツ初のラディカル・フェミニズム雑誌『女性運動』*Frauenbewegung*（1895 年～1919 年）を出版した。

一方、クララ・ツェトキン Clara Zetkin を筆頭に BDF から排除された女性たちは、ブルジョア女性運動は自分たちの階級内での改革しか考えていないと、ブルジョア女性との協働を拒否した。1878 年からドイツ社会主義労働党（1890 年からドイツ社会民主党=SPD）党員となったツェトキンは、初の社会主義女性雑誌である社会民主党機関誌『平等』*Die Gleichheit*（1892 年～1923 年）の編集を SPD が分裂する 1917 年まで引き受けた。1919 年に共産党が誕生すると、彼女は 1920 年～1933 年まで共産党議員としてドイツ帝国議会に所属している。

BDF に話を戻そう。BDF は第一次世界大戦時、反愛国的姿勢が罰せられる中で反戦を訴えたカウアーやツェトキンたちとは異なり、大多数の女性たちがそうであったように積極的に戦争に協力した。第 3 代会長（1910 年～1919 年）となったゲルトルート・ボイマーGertrud Bäumer は組織の発言権を強化するために会員数の増加を図り、保守的団体の取り込みを優先した。BDF は右傾化する。多くの会員は狭義での女性運動には数えられず、第一義的には慈善活動に取り組んでいた。彼女が会員獲得に注力したのは、女性参政権を手に入れるためには女性も挙って国家に貢献しなければならないと考えたからだった。戦争はその意味で、チャンスだった。彼女は「女性国民奉仕団」Nationaler Frauendienst を結成し、食料供給、工場での経済活動において女性の自主的戦時動員を行った。しかし、皇帝から選挙権は与えられず、女性が初めて選挙権を手にするのは革命による敗戦の後のことだった。ボイマーは 1919 年にフリードリヒ・ノイマン Friedrich Neumann 等とドイツ民主党を結成し、1920 年～1932 年まで国会議員を務めた。

ボイマーは会長職を退いてからも副会長として大きな影響力を及ぼし続けたが、戦後の政治的混乱と経済的困窮の中でやがてナチ党が台頭してくる 30 年代初頭には、20 万人という BDF で最大の会員を擁する「全国ドイツ主婦連盟」Reichsverband Deutscher Hausfrauen-vereine 始め、保守的団体は次々とナチ党を支持して BDF を退会していった。つまり、BDF は強制的同質化を迫られて解散の道を選択したと言うより、組織としてすでに内部崩壊していたのである。

---

[9] カウアーは 1902 年にドイツ帝国初の「女性投票権ドイツ連盟」の設立者の一人となり、結社法撤廃後は、女性参政権を獲得すべく全国で講演活動を展開した。

(3) 大衆ジャーナリズムの時代と商業女性雑誌

1880年代に始まるメディアの大変遷は、雑誌数の増加、新聞・雑誌のヴォリュームの増大、広告掲載による低価格化、読者数の上昇と多様化によってもたらされた。幅広い女性読者を対象に情報を掲載するグラビア女性雑誌というタイプが生まれたのも世紀転換期のことだった。グラビア女性雑誌の発展は、高価なファッション雑誌と、1870年以降に登場する実用的な主婦向けの雑誌との合体から始まった。例えば、『主婦の雑誌』*Das Blatt der Hausfrau*（1886年～1944年、1949年～1954年）がそれで、視覚的要素が増加していくと同時に、家事、躾、大衆小説やファッションと並んで、女性教育や就労の問題も継続的に掲載されたことが特徴だった。主婦向け雑誌は、貴族や教養市民の女性読者以外に、幅広い市民層の女性に広がっていった。

こうした女性雑誌市場の拡大を背景に、アウグスト・シェルルAugust Scherl、レオポルト・ウルシュタインLeopold Ullstein、ルードルフ・モッセRudolf Mosseなど新聞・雑誌コンツェルンが誕生し、大衆ジャーナリズムの時代が到来する。1914年の女性雑誌は215種類で、文章主体の雑誌の方がまだ多く、出版部数も200～300部、まれに2000～3000部といったところだった。その一方で、商業雑誌は数万～10万部を超えるものもあり、女性雑誌市場で圧倒的な存在感を示していた。[10]

1853年に発刊された家庭雑誌『ガルテンラウベ』*Die Gartenlaube*（1853年～1944年、1974年～1978年、1982年～1984年）を1904年に引き継いだアウグスト・シェルル社は、女性向け付録として、幅広い中産階級の女性を対象として『女性の世界』*Die Welt der Frau*（1904年～1920年、1920年～1944年）を発行し、1920年からは女性向けページとして本体に組み込んだ。『ガルテンラウベ』がテクストと切り離して図版を印刷した一方、『女性の世界』は数々の写真がテクストと一体となった現代的なレイアウトであった。多様な文化、社会、娯楽が女性の視点で伝達されたこと、ファッションや家事のテーマが広げられたことも新しい特徴だった。[11]

ウルシュタイン社から出版された『淑女』*Die Dame*（1911年～1943年）は上流階級の女性向け週刊誌だった。付録の文学マガジンにブレヒトBertolt Brecht、トゥホルスキーKurt Tucholsky、ツックマイヤーCarl Zuckmayer、シュニッツラーArthur Schnitzlerの作品を掲載したのは、20年代に編集を担当した女権拡張論者のバルバラ・フォン・トレスコーBarbara von Treskow[12]だった。彼女はユダヤ人のファッション専門店の広告や有名

---

[10] Duttenhöfer, Barbara: Das Geschlecht der Öffentlichkeit. Deutsche und russische Frauenzeitschriften und ihr Publikum im frühen 20. Jahrhundert. Universitätsverlag des Saarlandes, 2013, S.57 u. 70.

[11] Ebd, S.75.

[12] フォン・トレスコーについては、“Familienverband der Familie v. Treskow” http://www.treskowpage.com/04_personen/04_personen_18.html (05. 04. 2017)

女性ダンサーのヌード写真を掲載し、1929 年には女性選挙権世界連盟ベルリン会議を詳細に報告した。ウルシュタイン社からは、『淑女』や『主婦の雑誌』のほか、同じくフォン・トレスコーが編集長を務めた発行部数 10 万部の『新しいファション世界』*Neue Modewelt*（1932 年～1943 年）など売れ筋女性雑誌が刊行されていた。

2. 官製女性雑誌『ナチ女性展望』の発行

ナチスが政権を掌握すると、ジャーナリズムに対する統制と弾圧の嵐が吹き荒れた。共産党や社会民主党の新聞・雑誌は非合法化されたが、そもそもその前に両党を始め他党も解散させられたため、党の機関誌としての女性新聞・雑誌も発禁となった。強制的同質化によりナチ化を受け入れなければ、いかなる新聞・雑誌も存続は不可能だった。モッセ社やウルシュタイン社のようなユダヤ・コンツェルンはナチスによって解体され、安価で強制買収されアーリア化された。

しかし、女性雑誌に関する限り、ナチ当局は従来の編集方針に介入しなかった。20 年代～30 年代の基調が続いており、誌上で家庭や職業生活における女性解放論が取り上げられることはほとんどなく、政治上の問題にならなかったからである。しかし、第二次世界大戦の開戦と同時に宣伝省に「雑誌ニュース部」とそれを補完する「週間ニュース部」が創設されると、女性雑誌の編集内容も細部にわたり統制を受けた。銃後の女性を安心させる前線報告、男手を失った職場や農村への戦時動員、物不足を乗り切る知恵や父（夫）が出征した時の心構えなどだった。戦況が厳しくなる 1943 年にまだ存続していた女性雑誌は、国民の抵抗の意志、反ユダヤ・反ボルシェヴィズムの記事を強制された。ナチス政権期の女性・家庭・モード雑誌数は、1939 年末に 1932 年の 234 誌とほぼ同数であった。[13]

『ナチ女性展望』は機関誌であるばかりでなく、19 世紀末から広がりを見せ始めた商業女性雑誌の特徴も兼ね備えていた。料理、ファッション、庭や住居の手入れ、連載小説や詩、書籍や映画の紹介など実用的娯楽的記事や広告という構成要素は一般の女性雑誌と変わりがなかった。ここでは、まず機関誌としての側面からナチ女性団の自己理解を明らかにし、次に当時の読者にとっての実用的記事の意味について考えたい。

(1) 国民社会主義労働者党女性部としてのナチ女性団の機関誌

1933 年 7 月にナチ党の一党独裁が完成した時には、他党は存在していないことから、『ナチ女性展望』はナチス政権期の唯一の女性向け政党機関誌であった。そのことがよく分かるのが、第一に表紙である。男性編集者によるこの時期のほとんどの商業女性雑誌の表紙

---

[13] ノルベルト・フライ/ヨハネス・シュミッツ（五十嵐智友訳）『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』朝日新聞社、1996 年、108 頁。

が、若く健康で美しい女性たちの写真で飾られていたのに対し、『ナチ女性展望』では男性が登場する表紙の数が目立つ。『ナチ女性展望』を発行した全国女性指導部の「新聞・雑誌・プロパガンダ」部門（図 3 参照）は、女性世界だけに埋没するのではなく、女性もまた民族共同体の半分を支える存在であることを意識し、共同体のために犠牲的精神をもって闘う男性を描くことによって、男性との連帯意識を高め、女性も自らの役割の中で男性とともに闘おうとする積極的な姿勢を伝えようとしたと考えられる。

図 4 第 8 年度 14 号(1940 年 1 月第 2 号)

その表紙には当時のジェンダー理解が明瞭に表れている。表紙に写真や絵が掲載されるのは第 4 年度 21 号（1936 年 4 月）からだが、それ以前にも部分的にイラストや写真を使用したものも含めると、戦前は 92 枚、開戦から廃刊までは 98 枚で合計 190 枚となる。男性表象と女性表象の割合は、全体の期間では男性が 22.1%、女性が 29.5%（戦前が 18.5%と 26%、開戦後が 26.5%と 32.7%）となる。男性の場合、戦前は兵士、ナチ指導者、農民、騎士、ヒトラー・ユーゲント、歴史的人物、父親と、さまざまな役割に分散しているが、開戦後には父親の表象は消え、兵士が 61.5%と飛びぬけている。「男性＝民族共同体のために闘う兵士」との理解が明瞭である。（図 4）一方、女性の場合は、ナチ指導部が女性の役割を、子供を産み育てる母親と規定していたので、戦前は「母の日」の号を中心に母親像が 54.2%を占める。（図 5）ところが開戦後は、母親像は、農婦、民族衣装の地方出身者、戦時奉仕・動員、女子青年団（ヒトラー・ユーゲント）と横並びになる。戦時中は男性に兵士としての役目が求められる一方で、女性は家庭の外でも銃後を支えることが徹底して求められたからである。

第二の特徴として、巻頭を飾る特集記事が挙げられる。戦没将兵慰霊の日、復活祭、ヒトラーの誕生日、母の日、「ドイツ芸術の家」におけるドイツ大美

図 5　第 8 年度 22 号（1940 年 5 月第 2 号）

母と娘は民族衣装を着用し、土着の伝統・文化の継承役として描かれている。絵画では美化されるのが一般的だが、家族全員が金髪・碧眼というアーリア人種の特徴を備えている。左手前の机の手紙は、戦場にいる父の不在を暗示している。

術展、党大会、収穫祭、クリスマスなど暦上固定されている行事のほか、時事問題やイデオロギー的テーマが取り上げられた。そのほか、ナチ女性団、ドイツ女性事業団の社会福祉活動の詳細な報告や方針が随時掲載された。

しかし、党公認の女性雑誌だからといって、党の女性イデオロギーに盲目的に従ったわけではない。1933 年に権力を掌握するとナチ指導部は、反動的政策を繰り出す。上級官吏職の女性 74 人全員が職を失い、その他の自治体で 1 万 9 千人の女性官吏が、家族による扶養が可能な場合という条件付きで全員解雇された。女性教師も 15%削減され、法律分野での女性就業は 3%と少なかったが、絶えず嫌がらせを受け、1936 年以降はナチ党員の女性であっても判事や検事の職に就くことはできなくなった。[14]女性の大学進学も全学生の 10%という入学制限が定められた。

こうした専門職にかかわる締め出しに加え、男性失業者を減少させるために、1933 年 6 月の「失業減少法」により労働市場における女性差別は制度化された。充分な収入のある男性の妻あるいは娘は全員職場から解雇された。また失業減少法に組み入れられた「結婚資金貸付制度」は、男性工場労働者の月収の 4〜5 倍の最大限 1000 マルクを無利子で貸し付ける制度だったが、受給条件は妻の退職だった。子ども 1 人産む毎に 4 分の 1 の額の返済が免除されたので、4 人の子どもを産めば、返済義務はなくなった。

女性指導者の中からは、「新国家が女性を必要としないと分かっていたら、ヒトラーのために運動することなど絶対になかったでしょう」[15]という声が上がった。ナチ女性たちは、ナチ党を支えたそれまでの努力が報われ、国家の支援を受けて自分たちが思い描いていた活動が可能になると期待していたのだった。第 4 年度 23 号（1936 年 5 月第 1 号）の記事「救援事業『母と子』の 2 年」でも、党の女性差別的政策が批判的に回顧されている。

ナチ指導部とナチ女性団の和解は、1934 年 9 月の党大会でヒトラーが初めて女性会議で行った演説に象徴された。権力掌握後の出来事を振り返ってみると、組閣したとはいえ、国会議事堂放火事件が起こり、3 月には総選挙があった。その後、全権委任法を通過させ一党独裁を達成し、強制的同質化を軌道にのせたものの、国防軍、経済界、官僚といった伝統的支配層と手を結ぶために、レーム Ernst Röhm 以下、突撃隊員 85 名を粛清し（1934 年 6 月 30 日）、さらに党内でヒトラーと覇を競ったグレゴール・シュトラッサーGregor Strasser や前首相シュライヒャーKurt von Schleicher など有力者をも殺害する。これにより、ヒトラーは指導力を増し、政権を安定させることに成功する。そして 1934 年 8 月、ヒンデンブルク Paul von Hindenburg 大統領が死去すると、大統領も兼任する。これでヒトラーは完全に権力を握ったことになる。そう考えれば、首相就任からの 1 年半余りの期

14　クーンズ、（上）235-236 頁。

15　同上、227 頁。

間は、闘争期の延長ともいえる政情不安定な時期だったのである。この時期を乗り切り、「一つの民族」、「民族共同体」というイデオロギーに基づく国造りを今や推し進めていくためには、民族共同体の半分を構成する女性たちの協力は欠かせなかった。ヒトラーの演説を見てみよう。

> 男性の世界は国家であり、男性の世界は闘うことであり、共同体のために尽力することであると言えるなら、女性の世界はもっと小さな世界だと言えるかもしれない。なぜなら、女性の世界は夫であり、家族であり、子どもたちであり、家だからである。もしその小さな世界を受け持とうとする者がいなければ、いかにして大きな世界は存続しえるだろうか。(…) この二つの世界はそれゆえ決して妨げ合うことはない。それらは相互に補完し、男性と女性が対になるように、それらもまた対になるからである。
>
> 女性が男性の世界、男性の主たる領域に侵入するのを私たちは正しいこととは思わない。この二つの世界が分かれていることを私たちは自然だと感じる。(…)
>
> 男性が自分の民族の闘いの中で犠牲を払う一方、女性は家庭においてこの民族の維持のための闘いで犠牲を払う。(…) 女性が産む子どもの一人一人が、民族の存亡を賭けた女性の闘いなのである。自然と神の摂理が男女に与えた使命をそれぞれが果たしていれば、両性は互いに評価し尊敬し合わなければならない。[16]

ヴァイマル共和国における憲法上の男女平等、女性の高等教育の機会や女性参政権の獲得という流れから見れば、極めて反動的である。しかし、ヒトラーの演説に見られる家父長的ジェンダー認識は、1920 年代の一握りの女性たちを興奮させた「新しい女性」という自由よりは家父長制を歓迎し、これまでの教育と経験を通じて身につけた母親としての役割の認知を求める大多数の女性、そして大多数の男性の心情を背景としていた。1932 年にナチ化を受け入れた会員数 20 万人を擁する全国ドイツ主婦連盟は、家政以外のすべての仕事からの解放を要求していたのである。そして当時ドイツだけでなく、ヨーロッパの国々で出生率の低下が問題化していたため、子どもを産むことは、民族の維持という点で重要な意味を持っていた。それもナチ党の権力掌握後は、ドイツの血を守り、遺伝病のない次世代を生み出すことにイデオロギー上の至上性が与えられると、「母であること」、「母性」は崇拝の対象にまで祭り上げられた。これにより、ショルツ=クリンクとナチ女性団にとって「母性」は、彼女たちの活動と権限拡大の強力な切り札となったのである。

1935 年 3 月にナチ女性団が党の構成組織に格上げされると、女性組織も大管区 (34 の

---

[16] *NS Frauen Warte*. 2. Septemberheft 1934 (3. Jg. H. 7), 'Die Rede des Führers auf dem Frauenkongreß in Nürnberg am 8. September 1934'

大管区は 1941 年から 43 に増加)、管区、支部、細胞、班（40～50 世帯）の階層構造に倣って巨大ネットワークを築き、円滑な活動を展開できるようになった。1939 年時点でナチ女性団・ドイツ女性事業団に所属する女性のうち 100 万人以上が階層構造の組織の中で何らかの役職に就いていた。一方、ショルツ=クリンク指揮下の全国女性指導部は、1934 年にナチ国民福祉団の建物の一角で仕事を始めたが、全国女性指導者の権限拡大、すなわちナチ女性団とドイツ女性事業団の活動領域の拡大により、1936 年 6 月にベルリンの総統本部へ引っ越し、100 室を超えるオフィスを使って業務を果たした。全国女性指導部は、協会でも団体でもなく、また党の委員会でもなく、官庁だったのである。

(2) 商業女性雑誌の特徴を兼ね備えたグラビア雑誌としての機能

『ナチ女性展望』のグラビアと活字の割合はほぼ半々だった。編集部は、他の雑誌との競合に打ち勝つために、1933 年 9 月 1 日号から 2 号に 1 回、誌上で紹介される流行服の型紙を付録にした。商業雑誌は『ナチ女性展望』より高価だったうえ、型紙は別料金で購入しなければならなかった。この号からページ数も増やしているが、それもファッションや料理など実用ページで、合計すると雑誌全体の 15%～20%に達した。購読者は、官製雑誌の特集記事よりも、ファッションのページや型紙、実用的な情報が目当てだったと考えていいだろう。この戦略により、1934 年 2 月の出版部数 25 万部から 6 月には 50 万部に伸び、1939 年には 140 万部に達し、57 万 5 千部で第 2 位の『主婦の雑誌』を押さえて、断然トップとなった。

ファッションや料理のページは、グルメや最新モードを楽しむ現代の女性雑誌とは異なり、あくまで生きるために不可欠な情報源だった。経済状況に応じてナチ政権期は 3 期に分けることができるだろう。第 1 期は世界恐慌後の困窮生活から 1936 年にようやく生活の改善が見られる期間、第 2 期は 1936 年から第二次世界大戦開戦までの生活にゆとりが感じられた期間、そして第 3 期が戦中の期間である。つまり、生活にゆとりを感じられた期間はほんのわずかだったのである。

ショルツ=クリンクは第 4 年度 16 号（1936 年 1 月第 2 号）の年頭の挨拶で、失業問題は完全に解消されたわけではないが、国民が自信を取り戻せたことに対して総統に感謝の念を述べている。失業者の推移を見ると、1932 年初頭は 620 万人で、就労者の 3 人に 1 人が失業中という最悪の値だった。その後、権力掌握時は 600 万人、34 年 330 万人、35 年 290 万人、36 年は 250 万人となった。さらに 37 年には 180 万人、38 年 100 万人、39 年は 30 万 2 千人に減少する。[17]ヒトラーは数年で失業を解消するという選挙公約を果たしたこと

17　マシュー・セリグマン、ジョン・ダヴィソン、ジョン・マクドナルド（松尾恭子訳）『写真で見るヒトラー政権下の人々の日常』原書房、2010 年、202-205 頁。

になる。1936 年の党大会で、自給自足経済を目指すヒトラーは「四か年計画」を発表し、東部に生存権を求める軍拡路線に舵をきる。完全雇用の見通しが立ち、労働力不足を補うために工場や事務所に女性を送り込むようショルツ=クリンクは指示される。こうして、女性の居場所は家であるとの公的女性イデオロギーは事実上崩れていく。

1938 年には 2 人に 1 人は預金通帳を所持していた。「私は憧れの自転車、後にはローラースケート靴やスケート靴をプレゼントしてもらった」、「2 年生からアンカー先生の所でピアノのレッスンを受けました」と戦後、子ども時代を振り返るインタビューが残っている。家事を軽減する器具も手に入るようになった。「私たちは『贅沢』品も持っていました。ジーメンス社の掃除機、冷蔵庫、ガス瞬間湯沸かし器などです。」[18] 保証された収入と安定した景気がつくり出した生活だった。

この第 2 期には、さすがに節約を内容とする実用ページはほとんどない。しかし、第 1 期と第 3 期のファッションや料理など実用ページを占める節約記事は酷似している。既製服は高価だったので、自分で縫うほかない。付録の型紙はそのためである。特に戦中である第 3 期は節約が徹底された。洋服ダンスに眠っている服をリフォームし、場合によっては 2 種類の生地を組み合わせて新しい服を作り出すことが推奨された。記事の見出しに踊るキーワード は「手作り」、「リフォーム」、「2 種類の布から」(図 6)、「繕う」、「残り布を使って」、「古い物（手持ちの物）から新しい物が生まれる」、「生地を大切に裁つ」、「実用的」、「ほどいた毛糸で編む」である。手作りは洋服や下着だけでなく、フェルト帽から室内履き、傷んだ手袋、靴、ベルトなどの革製品から子ども靴を作ることまで及んだ。

食生活についても、食材は自分の菜園で作ること、腐らせない工夫や長期保存の実践、自然の恵みの活用、肉を諦め野菜だけ、あるいは魚中心のメニュー、肉や油脂を節約する煮込み鍋料理といった第 1 期で鍛えた技量が、「安上がり」で「美味しく」て「健康にいい」というモットーの下で第 3 期に徹底的に試されることになった。

図 6 「2 種類の布を組み合わせて」 第 11 年度 13 号（1943 年 3 月）180 頁。敗戦色濃厚な時期にも読者にファッショナブルなグラビアを提供する。

[18] 1938 年の豊かさを示す引用は、Kasberger, Erich: *Heldinnen waren wir keine. Frauenalltag in der NS-Zeit*. München, 2001, S.25-26.

戦中の女性たちを支えるために全国女性指導部がどんな知恵を与えたのか具体的に見てみると、そうした記事からは当時の生活の様子が浮き彫りになってくる。[19]

開戦時に経済統制[20]が発動されると、家庭が得る割当量は文字通りこれまでの半分になった。食糧切符を切らずに食料を得たければ、自宅の庭を菜園に変えるか、菜園を借りるほかなかった。翌年の春には菜園を勧める記事が 3 号続く。第 8 年度 20 号（1940 年 4 月第 2 号）の「菜園の三圃式輪作」では、ドイツ全土を食のために活用すべく、初心者でもトマトやほうれん草から始めるよう激励している。土地を 3 分割して毎年植える場所をローテーションすること、収穫したら即、次の苗を植え、結実の連続を図る。コールラビ、セロリ、キャベツが小さい時は、苗の間にサラダ菜や玉葱を育てる。イチゴの間にはサラダ菜、コールラビ、豆類を、人参の間にはラディッシュを、という具合に徹底して効率的な菜園運営を指示した。垣根には実益を兼ねたベリー類、カシス、木イチゴ、ラズベリーが推奨された。冬に収穫できる野菜も重要で、特にチコリは根がコーヒーの代用品、葉は冬野菜あるいはウサギの餌にもなった。

家庭菜園作りは、収穫期に果物や野菜を保存する必要性と結びついていた。特に煮詰めてガラス瓶に保存することは、自分で収穫する場合だけでなく、安価で出回る旬の時期に果物や野菜を購入して品薄の冬への備えとなった。誌上では、果物と野菜の処理の仕方、果物の場合は砂糖量、深い瓶と浅い瓶ごとの煮沸時間、お湯の温度が記載され、失敗がないよう「煮詰め一覧表」を掲載した。（図 7）しかし第 10 年度 16 号（1942 年 3 月）の「砂糖の貯蓄のことも考えていますか？」では、料理のたびに少しずつ砂糖を節約して、保存の時期のために空の瓶に貯めておくアイデアが紹介されている。砂糖の入手が困難になっていることが分かる。実際、翌年度 3 号（1942 年 8 月）には「砂糖を使わない天然果汁、瓶詰め果物、果物ムース、ジャム」の記事が掲載されている。手に入れるのが難しかったのは砂糖だけではな

図 7 「家政指導者の誇り」

第 9 年度 14 号（1941 年 1 月第 2 号）228 頁。果物と野菜の煮詰め保存ビンが、家政指導者の指導通りに完璧なまでに食料庫に並ぶ。

[19] 拙論「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載されたファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし」『敬和学園大学研究紀要』第 21 号、2012 年、145～168 頁参照。

[20] 食料品と生活必需品の配給切符は開戦の事態に備えて 1937 年には印刷され、石鹸や石炭の配給切符と一緒に開戦直前の 1939 年 8 月 27 日に支給された。衣料切符は少し遅れて 11 月 14 日に導入されている。

い。この年になると、保存用の瓶や蓋の不足に関する苦情が広範囲に聞かれるようになった。[21]

第一次世界大戦期には臭いがあって評判の悪かった乾燥野菜も改良が進み、食糧切符で配給されることになり（第 9 年度 15 号、1941 年 2 月第 1 号）、1943 年 6 月（第 11 年度 16 号）には、乾燥野菜はビタミン豊富で洗う必要がなく、素早く料理でき、不要な部分がなく、その上、安価であると合理的理由が挙げられている。生野菜・果物の貯蔵記事では、食生活を支えたジャガイモが群を抜いている。第 10 年度 9 号（1941 年 11 月第 1 号）以降、毎年ジャガイモの収穫期や貯蔵時期にジャガイモの貯蔵方法についての記事が懇切丁寧に何回も掲載された。

野生の食物も注目された。第 8 年度 3 号（1939 年 8 月第 1 号）から第 11 年度 5 号（1942 年 9 月）まで毎年季節になると 2 号に分けて野生の食物の特集記事がカラー写真付きで掲載された。野生の野菜や果物、野草は栄養の幅を広げミネラルを摂取でき、免疫力を上げ、その上「ただ」であるという利点を列挙し、国民経済的意味の大きさを強調している。特に好まれたのはスモモ、ナナカマドやニワトコの実、ブルーベリー、クランベリー、木イチゴ、セイヨウノコギリ草、タンポポで、必ずレシピも紹介された。

食材の不足から戦時下ではさまざまな代用品が使われた。肉の代用品としては挽き割り麦、オート・フレーク、茸が一般的で、コーヒーは麦芽やチコリの根で代用された。ケーキに入れるアーモンドやナッツの代わりはカボチャやヒマワリの種、パン・ケーキの卵の節約には茹でジャガイモをすり下ろして使った。栄養があって満腹感を感じさせる肉に代わる食材は、レシピに特集として繰り返し取り上げられた。魚（ニシン、ヒラメ）、皮つき茹でジャガイモ、コールラビ、カボチャ、豆類、茸、キャベツ、カブ、ルバーブ、ライ麦、全麦パンなどである。（図 8）

図 8　第 9 年度 16 号（1941 年 2 月第 2 号）268-269 頁。左上から、「子どもたちのためにコールラビのムースに干しブドウを飾る」、「お客様がある時は、コールラビをくり抜いて使う」、「美味しいコールラビは皮つき茹でジャガイモに合う」
右上から、「ソーセージ入りジャガイモは満腹感を与え、美味しい」、「オート・フレーク料理は両面をこんがり焼く」、「茸を詰めたスフレは肉料理の代わりになる」

[21] Kasberger, S. 181.

皮つき茹でジャガイモは徹底されるべき項目の一つだった。生のまま剝くと全体の 15%が失われ、皮つきだとビタミン C やミネラルの含有量も多い。剝く時間が節約できる。煮るより蒸す方がなおいい。皮を剝いて水に浸けておくとビタミン C が流れ出すなど、合理的な理由を挙げて皮つき茹でジャガイモの徹底を図った。（第 8 年度 15 号、1940 年 2 月第 1 号）レシピ紹介のキャッチフレーズは「安くて」、「美味しく」、「健康にいい」である。女性も戦時動員されるようになると、「手早く作れる」も重要な要素となった。残り物を何でも使える煮込み鍋料理は「煮込み鍋の日曜日」という合言葉を復活させた。

3. ナチ女性団、ドイツ女性事業団の活動と社会進出

誌上で伝えられる情報やアイデアは、当然のことながらそれだけでは不十分だった。女性たちを支えるためにナチ女性団とドイツ女性事業団はさまざまな活動を展開した。ショルツ=クリンクの就任前からナチ女性団が積極的に行ったのは冬期救援事業だった。寄付金や物品を集めて生活が苦しい人々を援助するもので、農村援助と同様、全国女性指導部の「援助奉仕団」が担当した。1934 年 5 月の母の日に全国女性指導部最大部門となる「母親奉仕団」が設立されると、ナチ国民福祉団と連携して貧しい子だくさん家庭に救援小包を送り、洗濯物や繕い物を回収し仕上がりを戻す支援をし、疲れた母親を一時的に休養させるプログラムも実施した。

全国母親奉仕団を通じてナチ女性団は次々に実践的女性教育を実施した。乳児死亡率の高さや家族内の病気の頻出は、育児、栄養の摂取、健康や住居の衛生状態に関する知識の欠如だと考えられていた。最も重要な活動は、母親学校の開校と運営、母親講習の開催だった。母親学校・母親講習（図 9）の目的は、子どもの世話と教育の経験が豊かで、家政の仕事をこなし、身体的精神的に有能な母親の育成だった。母親学校は都市部で開校されたが、開校が難しい農村部では巡回母親講習会が開かれた。講習会のテーマは、①家政（料理、栄養、家計、家事、菜園）、②裁縫、③健康管理、④体操、⑤子どもの教育と文化生活、⑥国民社会主義の思想、に大別され、各講習は 1 週間に実習 2 時間と理論 1 時間の 6 週間構成で、参加費は 2 マルクだった。講習は午前・午後・夕方のコースが設けられ、時間帯を選べた。子どもと一緒に参加して「保育」も利用できた。中核講習以外にも補助講座が色々あり、人気は両親そろって参加できるおもちゃの改良・製作を学ぶ工作講座だった。

母親講習会参加者のデータを見ると、1939 年までに 170 万人が約 10 万の講習会のどれかに出席しており、1944 年までにその数は 500 万人に達している。また、25,000 か所の母親相談所も開所され、緊急の相談に助言や情報、援助を与えた。この相談所の利用者は 1 千万人以上に及んだ。母親学校は 1937 年時点ですでに 200 校あり、数千人の女性教員の職を提

図 9　全国母親奉仕団の乳児講習　　料理講習

第 6 年度 23 号（1938 年 5 月）726 頁　　第 6 年度 6 号（1937 年 9 月）166 頁

供することになった。その後も 800 校が予定された。[22]こうして母親・主婦の仕事は専門化され、その意義は社会的に高められた。

第 8 年度 19 号（1940 年 4 月第 1 号）の記事「家政相談所」は、就労する主婦の二重負担を軽減するために無料で家政に関する助言や情報を得られる家政相談所が大都市、中都市で開設され始めたことを伝えている。食糧配給量で健康を損ねないか、肉を使わないレシピを知りたい、石鹸の節約方法、家計のやりくりについての質問が寄せられた。相談所では、制限された生活条件の中で節約の工夫を伝える無料ないし安価な小冊子や書籍を手に入れることができた。例えば 1940 年には「食料切符と正しい栄養」（1 年間分の週レシピを掲載し、金額、食糧切符で手に入る食材料、栄養価が明示されていた）のほか菜園の作り方、節約暖房、家計簿についての冊子が印刷された。『ナチ女性展望』は料理や家庭の実用頁で、上記の書籍や冊子の内容を転載して、読者にこうした情報源に目を向けさせた。

ショルツ=クリンクはドイツ労働戦線 Deutsche Arbeitsfront の女性局（図 3）を通して 500 万人の女性労働者を監督することができた。「四か年計画」が発表された翌年の 1937 年の党大会で、全国女性指導部とドイツ労働戦線女性局は就労をテーマとして展覧会を開催し、女性を重労働から解放し、有給休暇を取るための職場交代、企業内福祉活動、職業上の専門知識・技術を得るための職業研修、母親休養、家庭内問題の解決など就労女性支援を宣言した。[23]女性労働者の搾取を防ぐ活動は、1942 年 5 月 17 日の「就労する母親保護法」

---

[22] Vgl. *NS Frauen Warte.* 2. Maiheft 1934 (2. Jg. H. 23), ‘Reichseinheitliche Richtlinien des Mütterdienstes im Deutschen Frauenwerk zur Durchführung der Mütterschulung’; 2. Juliheft 1934 (3. Jg. H. 2), ‘Mütterschule der NS-Frauenschaft Breslau=Stadt’; 2. Novemberheft 1934 (3. Jg. H. 11), ‘Ein Werk von Frauen für Frauen. Organisation und Arbeitsweise einer großstädtischen Mütterschule’; Februarheft 1937 (5. Jg. H. 18), ‘Das Werk der Frau’

[23] *NS Frauen Warte,* 2. Septemberheft 1936 (6. Jg. H. 6), ‘Einsatz der Frau in der Nation. Ausstellung der Reichsfrauenführung während des Parteitages in Nürnberg im Landgewerbemuseum’

（母性保護法）[24]に結実した。この法律は産前・産後 6 週間の産休のほか授乳時間や授乳部屋の設置だけでなく、14 歳以下の子どもを育てる母親にも適用され、残業、夜間勤務、祝日勤務の禁止のほか、企業に託児所を設置する義務を規定した。この法律は、当時世界で最も進歩的な母性保護法であると称賛された。

しかし戦況が悪化する中、民族共同体への奉仕のあり方に厳然と階級差が存在することは、1943 年 1 月 30 日にゲッベルス Joseph Geobbels が総力戦を念頭に総動員態勢宣言を行ったことで顕在化した。出征した男性に代わって、すでに低賃金・長時間労働を行ってきた労働者階級や下層中間層の女性たちは、上流・中産階級の女性たちがさまざまな理由をつけて労働奉仕を回避する姿を見て、不公平な現実に強い不平・不満を露わにした。国民の生活と民意を把握するために作成されたナチ党親衛隊保安部の「秘密報告書」は、1943 年 11 月に党官房に宛てて、女性動員の不公平から国民が国家と党に対して懐疑的になっており、このままでは信頼を失うだろうと警告している。[25]（図 10）ナチ指導部は国家統合の危機に直面した。

図 10

左「労働者夫妻エントさんの 9 人の息子たちは現在みな戦場にいる。（…）夫人は総統からドイツ母親名誉十字章を授与された」第 8 年度 22 号（1940 年 5 月第 2 号）435 頁。右「自分の子を体験する」第 3 年度 9 号（1934 年 10 月第 2 号）273 頁。

子どもの数も階級によって差があった。農家や労働者階級は例外なく子だくさんだったが、『ナチ女性展望』は読者である中産階級の女性に子どもを持つ喜びを繰り返し伝えなければならなかった。

おわりに

女性による女性のための雑誌『ナチ女性展望』は、創刊から窮乏期の家庭および職場における女性を支援し、戦時下では銃後を維持するために生活に密着した助言を提供し続けた。主に料理やファッション、家政にかかわる実用ページの記事は、ナチ女性団とドイツ女性事

---

24 Vgl. *NS Frauen Warte*. Juli 1942 (11. Jg. H. 1), ‘Das neue Mutterschutzgesetz’

25 矢野久『ナチス・ドイツの外国人強制労働の社会史』現代書館、2004 年、51～53 頁。

業団が運営する母親講習会・相談所、家政講習会・相談所、さまざまな救援事業と連動し補完された。こうした社会福祉活動は、ショルツ=クリンクの指揮下にあった全国女性指導部によって指導・展開されていた。全国女性指導部には選抜されたナチ女性団員が勤務し、全国に張り巡らされた女性組織には総勢 600 万人のナチ女性団員、ドイツ女性事業団員のうち 100 万人以上が何らかの役職に就いていた。

ナチ女性たちは決して、女性イデオロギーが示す家庭に閉じこもっていようとは思わなかった。1936 年の年頭に全国女性指導者が、「民族の母」という意識をもって公益に尽くすよう語る[26]と、これをうけて、全国女性指導部も良妻賢母だけでは不十分であり、「民族の母」としての意識をもってドイツ女性事業団は社会活動を展開すべしと鼓舞している。[27]ここには、子どもを産み国民社会主義思想に基づいて育て、家庭を守るという公的女性イデオロギーから、家庭という「小さな世界」に限定されず、社会そのものを「家庭」とみなして、その母たる行動を取るべきであるという拡大解釈が生じている。この「民族の母」というスローガンは女性たちが家から社会に出て行く口実となった。

この「精神的母性」という考え方は、ブルジョア女性運動に通じる。第一次世界大戦中、女性たちは「女性国民奉仕団」を結成し、精神的母親であるという原則によって国家に奉仕した。戦後も女性の社会参加はこの母親精神に根ざしていた。ヴァイマル時代の女性たちは男性とのいかなる摩擦も避けるため、精神的母性に基づいた女性の「特別な役割」として家族、家政、教育、慈善、福祉を女性の領域と指定し、女性の政治の「非政治的」形を作り出した。社会の領域分離はすでにヴィルヘルム時代には市民的国民国家にとって体質的なものと見なされていたので、特に問題もなく女性の自立した活動領域は了解された。

ショルツ=クリンクは、この伝統を引き継いだと言えよう。母親であることが、ナチ時代において人口と人種政策上、ヴァイマル時代よりずっと大きな政治的意味を持った分、母性はさらに強力な切り札となった。その意味で、中央官庁の一部として機能した全国女性指導部とその活動は、ブルジョア女性運動のヴィジョンが実現した姿と言っていいだろう。しかし、その女性解放は、男性が支配する政治・経済の世界を最初から諦め、階級的にも限定された女性の領域の中だけの自由だったのである。

（謝辞）本研究は JSPS 科研費 JP15K01929 の助成を受けたものである。

---

[26] Vgl. *NS Frauen Warte*. 2. Januarheft 1936 (4. Jg. H. 16), ‘Deutsch sein - heißt stark sein’

[27] Vgl. *NS Frauen Warte*. 3. Juliheft 1936 (5. Jg. H. 3), ‘Wehrhaftes Frauentum’

フォーラムとしての家庭欄－東ドイツの人気週刊誌『ヴォッヘンポスト』*Wochenpost* にみる女性像の変遷

重野　純子

1．はじめに

敗戦直後のドイツで復興の基礎を築いたのは女性たちであった。すでに戦時中、戦場に行った夫や父親の代わりに社会と家庭を支えた彼女たちは、瓦礫と化した町の再興のために働き、「瓦礫の女たち（Trümmerfrauen）」と呼ばれた。

1949 年のドイツ連邦共和国（以下、西ドイツ）とドイツ民主共和国（以下、東ドイツ）の成立直後から 50 年代以降を通して、両ドイツでは占領国の影響のもと、それぞれの社会の要請を受けて全く異なる女性像が形成されていった。本稿の研究対象である東ドイツの女性は、生活基盤の復興後も、男性とともに労働を介した建国への参加を求められたが、彼女たちのために働きやすい環境整備が進められたことにより、80 年代末の同国では、教育期間中の者[1]も含めると女性の就業率は 90%に達した。

こうした成果を指して、シュテファン・ヴォレ（Stefan Wolle 1950－）は「男女同権は社会主義の断固たる目標のひとつで、東ドイツが他のどの国と比較してもこれほど成功したと言えるものはないように見える[2]」と述べている。同国における男女同権が国家運営に利用されたことに対する皮肉を含む表現である。

建国期の東ドイツでは国も人も新しい社会での生き方を模索し、メディアに情報と議論の場を求めた。本稿では東ドイツで高い人気を誇った週刊誌『ヴォッヘンポスト』*Wochenpost* の 50 年代（1953 年 1 号－1959 年 52 号）の誌面を検討していくが、主な研究対象とするのは女性向けの記事が掲載された家庭欄と、日常生活における疑問や悩みが掲載された投書欄である。本稿では特に女性に焦点を当て、議論を提起・展開した記事や投書を検討する中で、彼女たちを取り巻いていた環境とその影響を追っていきたい。

2．東ドイツにおける女性

2－1．法における男女同権

東ドイツは 1949 年 10 月 7 日の建国と同時に施行された憲法の 7 条において男女同権を宣言し、18 条では、女性は「市民と生産者としての課題」を「女性と母親としての義務」

---

[1] 大学生や職業教育中の者のこと。

[2] Wolle, Stefan: Die heile Welt der Diktatur. Alltag und Herrschaft in der DDR 1971-1989, Berlin 1998, S. 285.

と調和させるための法的保護を受けるとしている。この憲法における男女同権の実現への姿勢をより明確に示したのが、翌年に施行された「母子の保護および女性の権利に関する法（Gesetz über den Mutter- und Kinderschutz und die Rechte der Frau）」である。

同法の第 1 章「母子への国家支援」では、子だくさん家庭の環境改善と子育てへの国の支援を謳い、第 2 章「婚姻と家族」では、結婚が女性の権利を制限することはないとしたうえで、夫婦に家事や子育てについてお互いの意見を尊重し合うことを求めている。これに続く第 3 章「生産における女性と仕事の援助」では、女性も慣習や伝統に縛られることなく知識と能力に応じたあらゆる分野の職業に就くべきだとし、さらに労働法において規定された同一労働同一賃金の原則が女性にも適用されることを明記している。当時の首相グローテヴォール(Otto Grotewohl 1894－1964)は演説[3]の中で、この法律を憲法 7 条にある男女の同権を実現するための前提としたうえで、国家は戦争による損害を克服するために女性を社会生活に組み入れ、働く女性が資格や教育によって高い地位に就くことを実現するためにあらゆる措置を講ずるとし、さらにこれらの実現には女性の家事からの解放が重要だとも述べている。

2－2. 労働力としての女性

同演説の最後でグローテヴォールは、男女同権の実現において女性の生産への参加が決定的に重要であり、女性の経済的な自立のみが彼女たちの政治的な自由や平等な社会参加を実現するとしている。以上の発言に見られるように東ドイツでは立法者が「働くこと＝男女同権」という論理を用いて、女性に家庭の外で働く必要性と市民としての責任を認識させたことに注目したい。また、家事による女性への負担の軽減の必要性が立法者によって認識されていたことは明らかだが、その実現には夫である男性の意識改革が不可欠であったことは言うまでもない。

1949 年の東ドイツでは西側へと逃亡する市民が後を絶たず、また戦争によって男性の労働力不足が深刻であり、男性の人口に比べて女性のそれが約 210 万人、割合にすると 25%も多かった[4]。しかし伝統的に繊維産業やサービス業、また他の業種でも補助的労働に従事してきた女性たちには、国家再建のための基幹産業である建設業や重工業を担うための技術や専門知識が不足していた。「男の仕事」というイメージが根強かったこれらの職業分野にも女性の労働力を活用することが国家の急務であった。

---

[3] 臨時人民議会（1950 年 9 月 27 日開催）における演説。

[4] Vgl. BMAS, Statistische Übersichten (DDR), Tab. 0.1.1.1.; Obertreis, Gesine: Familienpolitik in der DDR 1945-1980, Wiesbaden 1985, S. 49.

3. 『ヴォッヘンポスト』[5]

本論の研究対象である『ヴォッヘンポスト』は第 1 号が 1953 年 12 月 22 日に発行された。スタート当時 50 万部であった発行部数は 1973 年には 120 万部を超え[6]、東ドイツでは第 2 位の発行部数を誇る人気週刊誌に成長している[7]。この発行部数は SED（Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党）の機関誌『ノイエス・ドイチュラント』*Neues Deutschland* のそれよりも多く、発売日にはキオスクの前に長蛇の列ができた[8]。『ヴォッヘンポスト』が 1972 年に行った調査によると、読者の年齢層の中心は 15－49 歳、男女比は女性が 51%、男性が 49%だった。

同誌は国内外の政治、経済、社会、または最新の科学技術に関する記事やコラム、文芸作品や最新の映画・演劇作品、またはその関係者を紹介する文化面、国内外の各地の文化や伝統を紹介するルポルタージュや紀行文、投書欄、機知に富むイラストや写真または小噺で人気を集めた娯楽面、子供のための歌や短い読み物または漫画を掲載した子供欄のほか、スポーツ欄、園芸欄、個人広告[9]、そして本論で検討する家庭欄をコンテンツとすることで、女性や子供も楽しむことのできる「家庭誌（Familienblatt）」として定着した。この読者層の幅広さは、それまでの東ドイツのメディアでは新しく、前述の女性や職業に対するイメージの払しょくを試みる際、職業を持つことを求められた女性だけでなく、家事や教育への参加を求められた男性に働きかける意味においても有効だったと言える。長年、同誌の副編集長を務めたクラウス・ポルケーン（Klaus Polkehn 1931－2008）は、その編集モットーを「楽しませながら啓蒙し、啓蒙しながら楽しませる（„Unterhaltend belehren －belehrend unterhalten“[10]）」こととし、『ヴォッヘンポスト』は単なる娯楽誌でもなく、非政治的でもなかったとしている。

---

[5] 『ヴォッヘンポスト』を発行したベルリン出版（Berliner Verlag）は当時 SED の管轄下にあり、すでに複数の新聞を発行していた。『ヴォッヘンポスト』のフォーマットはいわゆるタブロイド紙に非常に近く、それゆえ『ツァイト』*Zeit* のような「週刊紙」として捉えることも可能だが、最近の研究では雑誌として取り扱われており、本稿においても「週刊誌」として扱うこととする。

[6] 1 号を 3 人が読むという統計があるため、実際の読者は 400 万人に近かったとの意見もある（vgl. Polkehn, Klaus: Das war die Wochenpost. Geschichte und Geschichten einer Zeitung, Berlin 1997, S. 110.）

[7] 最も発行部数が多かったのは 140 万部を発行したテレビ情報誌『*FFdabei*』だった。

[8] 販売価格は東ドイツ時代には創刊以来の 30 プフェニヒのままだったが、それは同誌が生活必需品に分類されたことから値上げされなかったためだという証言もある（Polkehn, S. 112）。また定期購読も可能だった。

[9] 物の売買、職探しや不動産情報、文通相手や結婚相手を求める声が 1 頁分ほどの誌面に掲載された。（Vgl. Polkehn, a.a.O., S. 240ff.）

[10] Vgl. Polkehn, a.a.O., S. 228.

3－1. 『ヴォッヘンポスト』創刊の背景

『ヴォッヘンポスト』が創刊された 1953 年、ソ連による厳しい賠償にあえぎながら建国を急いだ東ドイツでは、日用品を生産する軽工業よりも重工業を優先したことから、物不足が蔓延し、市民の間に不満が広まっていた。加えて政府が発表した「新路線（Neuer Kurs）」では、それまでの強硬路線が修正されたにもかかわらず、その後さらに労働者に対するノルマが引き上げられた。こうした状況のなか、市民の期待に応えない政府への不満が爆発した 1953 年 6 月 17 日の労働者・市民の蜂起[11]以降、政府は一般市民の日常生活への配慮も政治の大きな課題の一つと認識するに至り、メディアに関しては娯楽誌の発行にも積極的になった。ここから、この年のクリスマスに創刊された『ヴォッヘンポスト』は別名「6 月 17 日生まれの新聞の子（Das Zeitungs-Kind des 17. Juni）」と呼ばれている。

初代編集長となったルディ・ヴェッツェル（Rudi Wetzel 1909－1992）は、暴動以前の 1953 年春に元ソ連大使ヴラジミール・セミョーノフ（Wladimir Semjonow 1911－1992）から、そして蜂起後の 9 月にはソ連との太いパイプを持つ SED 幹部のフレート・エルスナー（Fred Oelßner 1903－1977）[12]から、戦前の人気週刊誌『グリューネポスト』*Grüne Post* [13]を手本とした家庭雑誌の創刊を促されているが、その提案内容がほぼ同じであったことから、『ヴォッヘンポスト』の創刊の背景には、蜂起前から不安の拡大を恐れたソ連指導部からの働き掛けがあったとも推測されている[14]。

3－2. 家庭欄について

前述のエルスナーは、蜂起後の 8 月に行われたメディア関連の審議会で、「新聞が家庭に届き、父親がそれを読み終えたあと、母親にはそれは包装紙としての価値しかない。なぜなら彼女に面白いものはそこには何もないからだ[15]」と当時の日刊紙には女性の興味を引

---

[11] その規模は大きく、約 250 の都市で自由選挙や物価の引き下げを求めるストライキやデモが行われた。8,000 から 10,000 人が逮捕され、少なくとも 50 人が命を落としたとされる。

[12] エルスナーは戦時中、モスクワでの重要な会議では通訳としても活躍したため、モスクワやそこから派遣された政治家とのつながりも強かった。ソ連大使の新雑誌の構想が彼の手に渡った経緯もこれと関連付ける事ができよう。またエルスナーは当時プロパガンダ部門を統括しつつ、雑誌『アインハイト』*Einheit* の編集長として雑誌運営にも携わっていた。(Vgl. Müller-Enbergs/ Hoffman/ Wielgohs(Hg.)：Wer war wer in der DDR?, Berlin 2004, S. 3242-3243.)

[13] 1927 年にウルシュタイン出版社から創刊された週刊誌『グリューネポスト』は「都市と地方のための日曜紙」というサブタイトルを持ち、創刊からまもなく発行部数が 100 万部に達した国民誌だった。

[14] Vgl. Polkehn, a.a.O., S. 12ff.

[15] Kühn, Nina: „Erzähl mir, Sibylle, erzähl...“. Eine sozialistische Frauenzeitschrift mit internationalem Flair. In: Barck/ Langermann/ Lokatis: Zwischen "Mosaik" und "Einheit". Zeitschriften in der DDR, Berlin 1999, S. 138.

く記事がないことを指摘し、女性が政治的関心を持つきっかけとなる誌面作りの必要性を訴えていた。こうした発言からも、創刊当時は女性欄として設定されていた家庭欄は、女性に有益な情報を与えると同時に、政治的関心を持たせるという機能を果たすことも期待されていたことが推測される。

また、家庭欄の見開きページは創刊号から巻末に位置し、2 号から„Was SIE interessiert und auch IHN nicht kalt lässt“と題されている。このタイトルは、代名詞を大文字で表記することで、「あなた（彼女）の興味を引き、彼（男性）の心も動かすこと」と読み取れるように工夫し、同欄が主に女性に語りかけながら、男性にも配慮していることを示している。

3－3．東ドイツにおける投書

東ドイツの新聞雑誌には、読者から寄せられた投書に対しては一定期間中にそれに返事を出すか、該当する部署や省庁などにその意見を伝える義務があったため、読者にとってメディアは民意を伝えるための「民主主義の代理・代用品（Demokratieersatz）」、または不満を一時的にでも解消することのできる「はけ口」としても機能していたとされている[16]。政府も新聞雑誌に寄せられた声は民意を知る上での重要な手段としてとらえていた[17]。

後述するように『ヴォッヘンポスト』の家庭欄では、女性の需要に十分に応えていない商品やサービスについて批判的にリポートし、読者からの反響だけでなく、担当省庁や責任者から寄せられた報告などを掲載して改善を促している。ここから読者にとって『ヴォッヘンポスト』は苦情の窓口であっただけでなく、場合によってはかなりの実行力を発揮する機関であったと言えるが、こうした積極性も同誌を人気誌にした一因だと思われる。

同誌の投書欄は、「親愛なるヴォッヘンポストさんへ（Liebe Wochenpost）」と題され、1958 年 13 号までは毎号 1 頁が割かれていたが、同年 14 号からは従来のスペースが二分され、半頁分は家庭欄に組み込まれた[18]。家庭欄に移動したものは 1958 年の 40 号からは、それまでに反響の大きかった記事や投書に対する読者の様々な声を掲載した「賛成と反対（Für und Wider）」と題されるコーナーに変わり、多種多様な問題について読者同士が

---

[16] Vgl. Polkhen, a.a.O., S. 211.

[17] 1978 年に政府が世論調査のための研究所を設立するまでは、メディアに寄せられた投書が世論を知る上での重要な情報源だった。各編集部は、毎月、投書に関するレポートを提出することが義務付けられていた。（Vgl. Polkehn, a.a.O., S. 240ff.）また、東ドイツにおいて投書がシュタージ（Staatssicherheitsdienst、国家公安局）の情報源として機能していた可能性も指摘されている。（Vgl. Bos, Ellen: Leserbriefe in Tageszeitungen der DDR. Zur „ Massen Verbundenheit“ der Presse 1949-1989, Opladen 1992, S. 12f.; Holzweißig, Gunter: Massenmedien der DDR, Berlin 1983, S. 81ff.）

[18] 毎号、合計 10～15 通ほどの投書が掲載された。

意見を交わし合うフォーラムとしての機能を強くしている。

創刊号の投書欄では、同欄が読者間の橋渡しとして悲しみや喜びを分かち合う一助になることを宣言していた。翌 1954 年 6 号からは、ザビーネやゲオルクと名乗る人物が相談者や読者に語りかける形で一部の相談や意見の紹介や議論の総括をしている。これらの人物が実在するかは不明だが、彼らの登場は悩みを打ち明けたり、日ごろの不満を吐露しやすくしたりし、特に家庭で孤立していた主婦には友人に手紙を書くような感覚で相談を寄せることができる雰囲気を誌面にもたらしている。

同欄に寄せられた投書の内容は多岐にわたったが、特に多かったのが商店における質の低い商品やサービスへの不満で、これらへの不満を集めた「希望カード（Wunschzettel）」というコーナーが同欄内に設けられていたほどだ。東ドイツでは不足物資を入手する際に、勤務時間中の買い出しや、なじみの店主や売り子との秘密裡のやり取り[19]などが横行していたが、買い物に行列はつきもので、行列がなければ欲しいものがないことも日常であった。行列に並んだ末に態度の悪い売り子に腹を立てる必要のないスーパーマーケットの登場は、『ヴォッヘンポスト』でも大いに歓迎されている[20]。

投書欄では、この他にもこれまで経験したことのない社会主義社会に対する疑問や不安が相談として寄せられ、それらについて他の読者との意見交換が行われた。このようにして同欄は家庭欄と同様に活発な議論の場、フォーラムとして発展していくが、投書の選択に際して、政府などの意向が反映されていたかは不明である。しかし、同欄で取り上げられた投書における悩みや意見が、これから見ていくように、当時の東ドイツにおける社会問題を色濃く反映していることから、読者にそれらに対する問題意識を喚起することが掲載の際に意図されていたことが窺われる。東ドイツの日刊紙における投書に関する研究では、編集部員や依頼された人物による投書が掲載されていたことが確認されているが、同時に自発的に書かれたものも多かったとされている[21]ことから、掲載された投書には一定の民意が反映されていると考えることができよう。

4. 家庭欄および投書欄の観察

4－1. 創刊時の家庭欄

創刊号で最も大きく誌面が割かれた特集記事は「あらゆる女性は美しくありたい」[22]と

---

[19] Vgl. Merkel, Ina: Utopie und Bedürfnis. Die Geschichte der Konsumkultur in der DDR, Köln, Weimar, Wien 1999; Kaminsky, Annette: Wohlstand, Schönheit, Glück. Kleine Konsumgeschichte der DDR, München 2001.

[20] „Husch Husch ins Körbchen“（1956 年 15 号）

[21] Vgl. Bos, a.a.O., S. 81.

[22] „Jede Frau will gut aussehen“（1953 年 1 号）この記事の冒頭では、美しさを求める女性の願望は資本主義社会の堕落した願望とは無縁であると前置きしたうえで、本来の美しい外見へ

題されている。同記事はまず化粧品の質やパッケージが消費者の需要に応えていない現状を批判的に描写し、これらが企業努力や原料の輸入によって改善される見込みであると報じている。さらに記事の結びでは、生産者だけでなく小売り企業に対しても、批判を真摯に受けとめ、生活の質の向上に貢献することを求めている。

また、創刊当時は毎号のように掲載されたファッション記事では、衣服は主にイラストで紹介されており、ブランド名や値段といった購買のための情報はない。これは既製服が質、量ともに欠けていたことに起因している。1956 年に創刊されたファッション雑誌『ジビレ』*Sibylle*[23]の編集員は、掲載された衣服の入手先を尋ねる読者に対して、写真やイラストを参考にして古い衣服を仕立て直したり、手に入った生地で自分で作るよう言うしかなかったと回顧している[24]が、ここからも明らかなように当時の主婦にとっては、料理や掃除に加えて、ストッキングの補修から衣服を自分で作るなどの裁縫も家事に含まれていた。家庭欄では、こうした消費環境の悪さを、既製服の質とデザインを取り上げたルポルタージュ[25]などで積極的に取り上げ、続報や読者の声を掲載して改善を迫っていく。

家庭欄では家事に関する情報も多く掲載された。なかでも創刊時には毎号のように登場した「賢い主婦（Kluge Hausfrau）」と題されたコーナーでは、家事（料理、掃除、洗濯など）に役立つヒントが並んでいるが、このように「主婦（Hausfrau[26]）」という単語をタイトルや文中で呼称や主語として用いる例は非常に多かった[27]。また家庭欄では旬の食材を使ったレシピのほか、家事に関する制度や新製品を紹介・提案[28]する際には、働く女

の欲求は、心身の調和へのそれであると説いている。そして男性と同等に働く我が国の女性には美しさへの権利と義務があり、それは工場で重労働に従事する女性にも当てはまるとも述べられている。

[23] 1956 年に創刊。それ以前の東ドイツには、世界の最新のファッション情報を扱う一般読者向けの雑誌がなかった。『ヴォッヘンポスト』は 1954 年からその状況を批判的に報じ、『ジビレ』が創刊されるまで何度も関係機関に働きかける記事や読者からの要望を掲載した。なお『ジビレ』については以下で詳しく論じた。重野純子『東独の婦人雑誌"Sibylle"研究 ： 東ドイツの「終わりの始まり」を 1950 年代から 1980 年代初頭の"Sibylle"の変化に探る』（博士論文、2007 年中央大学）。

[24] Vgl. Melis, Dorothea (Hg.): SIBYLLE. Modefotografie aus drei Jahrzehnten DDR, Berlin 1998, S. 51.

[25] 44 号では、既製服産業の問題の徹底的な追求が行われ、売れ残った生産余剰品が新製品の買い入れの障害となっていることや、消費者の好みを理解しない国営小売店のバイヤーによって最新のトレンドを取り入れたデザインが拒絶されていることが明らかにされた。同記事は却下されたデザインを掲載し、読者にその意見を寄せるよう求めている。49 号には、読者からの反響とともに、関係者からのバイヤーの教育を含めた改善策の報告、翌年の 2 号では批判を受けた支店の自己批判も掲載されている。

[26] „Hausfrau“という単語は専業主婦だけではなく、家事を切り盛りする女性一般を指す際にも使われるが、特に専業主婦を指す際には„nur Hausfrau“と表記されている。

[27] 例えば„Was der Hausfrau nützlich wäre（主婦に役立つもの）“（1954 年 40、41、43、46、49 号）という「主婦」という単語を用いたコーナーも確認される。

[28] 年金生活者による家事の補助を提案する記事や、調理しやすい加工食品や冷凍野菜の紹介、

性の負担の軽減を強調する例が多数見られた。

既に述べたように、女性の就業には夫の家事への参加が課題だったが、創刊当時の家庭欄では、家で威張り散らし、家事を全くしない男性を描写した読み物を掲載し、これに刺激を受けた読者からの声を集めて紹介している。例えば、共稼ぎの妻が家事や子供の世話で疲れ果てているかたわらで、趣味に没頭する夫の姿が描かれた短編[29]に対する反響では、夫には居心地のよい家庭を求める権利があるとする意見も見られたが、これに対して編集部は、驚くほど多くの男性から作品に登場する夫を批判する投書が寄せられたと同時に、夫の家事への不参加を嘆く女性からの声も多かったと書き添えている。この他にも、夫を「暴君（Pascha）」という単語を用いて描写した例[30]も見られるが、この単語は党の思想教育に貢献した DFD（Demokratische Frauenbund Deutschlands、ドイツ民主婦人連盟[31]）の機関誌『フラウ・フォン・ホイテ』*Frau von Heute*[32]において 1956 年に「アンチ・パシャ・キャンペーン（Anti-Pascha-Kampagne）」と銘打って行われた、職場や家庭における男性の横暴な態度を批判し、改善を求めた運動においても使われている[33]。

さらに家庭欄では初期から、様々な分野で働く女性の仕事内容や生活ぶりなどを紹介する記事も掲載している。例えば、ポツダムの路面電車で車掌や運転手として働く女性を取り上げた記事[34]では、乗務員の 3 分の 2 が女性であるにもかかわらず、責任あるポストの女性が少なく、さらに女性には過酷な労働環境の改善もまだ積極的に進められていないことを指摘し、これに対してこの企業の女性に、団結して職場での権利を主張するよう呼びかけている。以前は「男の仕事」と考えられていた女性の車掌業務が同記事で取り上げられたことは、前述の職業に対するイメージが変わりつつある例の一つが読者に示されたと言えるが、職場の物理的変化だけでなく、意識の変化もまだ十分とは言えない状況が記事から伝わってくる。

また 1955 年の投書欄には、女性の同僚への言葉や接触による「セクハラ」に関する相

さらに家事を助ける商品の開発販売を企業に促す記事も見られた。

[29] „Samstag bei Familie Schulz“（1954 年 5 号、これに対する反響は 9 号に掲載）

[30] „Pascha“（1954 年 14 号、反響 20 号）

[31] DFD は女性の思想教育と社会参加の促進を課題としていた。DFD は SED の従順な下部組織であったことから、党に対する発言権はほとんどなく、女性の政界や社会における地位向上への貢献度は低かったと評価されている。（Vgl. Eppelmann/ Möller/ Nooke/ Wilms(Hrg.): Lexikon des DDR-Sozialismus, Paderborn; München, Wien, Zürich 1997, S. 206f.）

[32] 『フラウ・フォン・ホイテ』は 1946 年に創刊され、1948 年からは DFD の機関誌として隔週に発行された。社会主義教育に関連する記事だけでなく、ファッションや家事についての情報も掲載していたが、1962 年に『フュア・ディッヒ』*Für Dich* という週刊誌が DFD の機関誌として新たに創刊されたため、廃刊された。

[33] Vgl. Merkel, Ina: Leitbilder und Lebensweisen von Frauen in Deustchland. In: Kaelble/ Kocka/ Zwahr: Sozialgeschichte der DDR, Stuttgart 1994, S. 368.

[34] „Frauen meistern die Kurbel“（1954 年 9 号）

談[35]も取り上げられており、投書欄ではこうした女性の社会進出に伴う問題を取り上げることで、読者への注意喚起を行う傾向が確認される。

4－2．投書欄における主婦の様子

1954 年 11 号の投稿欄では、働く女性を支援するための様々な助言や提言が掲載されている[36]。ある男性読者からの投書は、女性には仕事の終わった晩に「2 番目の労働時間」が始まるとし、男女平等や国家建設の促進のために家事のオートメーション化の推進や、半日または週 36 時間労働制度の導入を提唱している。この読者の声は仕事と家事の両立の難しさが男性によっても認識されていることを示しているが、あくまで女性を家事の担い手としている印象は否めない。このテーマに関するその他の投稿では、国内外で行われている家事の負担を軽減するためのサービスの紹介や、保育所に預けることのできない病気の子供のための制度を求める声が確認された。

また、創刊時の投書欄に登場する専業主婦の多くは、社会だけでなく家庭においても孤立した存在として助言を求めている。例えば同僚間の交流の妨げになるとして、夫の職場のパーティーに妻が招待されないことへの不満を訴える投書[37]では「多くの既婚女性も働きたいのはやまやまですが、働くことができません。(…)家の主人(der Herr des Hauses)が帰ってくると、彼は休むことしか望んでいません。ですから〈専業主婦（“nur Hausfrau“）〉は気分転換や息抜き、そして共生をあきらめなければならないのです」と専業主婦の家庭における孤独が訴えられている。これに対し同年の 21 号には、「職場のパーティーは同僚同士が親交を深めるためのものだという意見を私も同僚から聞きますが、私は妻や夫もそれぞれの職場のパーティーに行くべきだと考えます。（…）一緒に楽しい時間を過ごせばいくつかの家庭でのいざこざは起きずに済むでしょう」といった一般市民からの声に加えて FDGB[38]の女性部門の代表者からの意見が掲載されている。これは企業が女性をパーティーに招待することは女性を労働の場になじませ、生産労働と国の経済への理解を深めるためのいい機会だとの考えを示し、さらに妻もパーティーに参加すれば夫も社交のために貴重な自由時間を犠牲にしていることがわかるはずだ、と相談者に夫への理解を促している。

さらに 1955 年 2 号に載った小さい子供たちと毎晩遅く帰る夫を待つ専業主婦からの相

---

[35] „Muss ich stillhalten？“（1955 年 5 号、反響 11 号）
[36] „Wie helfen wir unserer Frau Eva?“ （1954 年 11 号）
[37] „Bei Alkohol und Tanzmusik“（1954 年 14 号、反響 21 号）
[38] Freier Deutscher Gewerkschaftsbund（自由ドイツ労働総同盟）東ドイツのほとんどの労働者が属した最大の労働者組合にして最大の大衆組織。1987 年の段階では組合員の半数以上が女性だった。

談は「息子は父親に会わずに寝る時には悲しんで泣くこともあります」と子供の様子を伝え、さらに「私たちはまだ若いので一緒に映画を観に行きたいのですが、いつそれができるでしょうか？いつも一人で行けというのでしょうか。私たちの結婚生活には共生というものがありません。私は養われるためではなく、幸せな家庭を持つために結婚したのです」と訴えている。これに対する投書[39]には「この問題について勇気をもって意見を述べる女性が現れ、あなた、親愛なる『ヴォッヘンポスト』さんがこれを掲載してくれたことをとてもうれしく思います」と相談者への共感を示す意見がある一方で、夫が仕事だけでなく、資格取得の準備や党活動などにも追われていることを理解して支えることを求め、「あなたの夫の仕事にもっと敬意を払うべきだ」、「好ましい主婦（Hausmütterchen）であるだけでなく、理解ある同志でもあるべきです」と主張する声も見られた。どちらの相談においても家庭で孤立する専業主婦が『ヴォッヘンポスト』に助言や励ましを求めて投書しているが、これらに対して寄せられた投書では、同情的な意見に並んで夫やその仕事への理解、さらには主婦自身も外で働くことを促す意見が見られた。

女性の就業率を上げる際に、最初のターゲットとなったのは独身女性や戦争未亡人、そしてシングルマザーといった生活費を自ら稼がねばならない女性たちだったが、後述するように、専業主婦たちにも次第に「働くこと＝男女同権」の論理が使われるようになる。しかし、当時の状況下で主婦も働くことを求められたことを考えると、家事や子育ての分担や負担を軽くするための環境整備や夫の意識改革が急務であったことは明らかだった。

1955 年の投書欄では、家事だけでなく、家計や飲食店などでの支払いを男女間や夫婦間で平等に負担し合うべきか[40]についての議論なども行われ、日常生活における男女同権について考えることが促されている。

「クリスマス号[41]で、あなたは人々の橋渡しとなって、私たちを心から助けてくれると約束してくれました。私はそれに勇気づけられて自分では解決できない悩みをあなたに打ち明けます」という吐露からはじまる、創刊から間もない 1954 年 4 号に掲載された投書[42]では、ある専業主婦が、夫の職場での浮気への疑いを打ち明けている。この 4 年間、夫に従順に尽くしてきたため、夫婦喧嘩はこれまで一度もなかったという彼女に対して、回答者のザビーネは 10 号で読者から寄せられた投書から 3 通を紹介している。これらの投書では、浮気相手として疑われる同僚女性が身だしなみに気をつかい、自立し、また幅広い関心を示すことで、単調な結婚生活に飽き足らなさを覚えている夫に刺激を与えている可能性が示唆され、働く女性のような身だしなみや視野の広さを身につけるためにも、相談者

[39] „Wann kommt Vati?“（1955 年 2 号、反響 8 号、15 号）
[40] 1955 年 2 号（レストランでの支払い）、1955 年 5 号（家計の分担、反響 10 号）など。
[41] 1953 年 12 月 22 日に発行された創刊号のこと。
[42] „Die Sorgen der Frau Liselotte“（1954 年 4 号、反響 10 号）

も職業を持ち、夫との絆を深めることや、部屋の模様替えなどで夫の気を引くことなどが提案されている。特にザビーネは、働くことを勧める投稿を紹介する際に編集部を代表して「私たちはまったく彼女の言うとおりだと思います」という言葉を添えることで、相談者に就職を促している。

これに加えて、翌年 1955 年の家庭欄に掲載された女性裁判官による離婚に関するレポート[43]の中でも、夫の職場での浮気が取り上げられている。筆者の裁判官はさらに当時の離婚の原因として夫の浮気や暴力、アルコール中毒などを挙げつつ、仕事を持つ女性よりも専業主婦の家庭に離婚が多いという傾向を指摘している。以上のように浮気に関する相談や記事でも、夫を批判しつつも、専業主婦に働くことを勧める傾向が確認された。

また、「男性も皿を洗えるか？」と題された伝記集からの抜粋[44]では、共働きの妻への気遣いのない夫だけでなく、新製品を次々と買い揃える共働き家庭の様子や、仕事帰りの女性のために商品が満載された買い物かごの並ぶ商店を苦々しく眺める専業主婦たちの姿も描写されている。そのうちの一人は「まるで私たち主婦が働いていないかのよう」とつぶやき、彼女の持つ疎外感を表している。この描写に続いて語り手は、東ドイツで家事や子育ては男性の労働と同等に家庭を支えるものだと前置きしつつ、生活水準の向上のために女性の就業の必要性を説き、何重もの負担の下で働く女性への理解を促している。しかし、この抜粋で描かれた専業主婦の言動には、当時の東ドイツで彼女たちが感じていた居心地の悪さが表れており、じわじわと専業主婦の居場所がなくなっていく様子が窺われる。

4－3．家庭にあらわれた変化と残る課題

1957 年に入ると、家事や教育に参加する夫の姿が散見されるようになった。例えば当時の東ドイツで開店が進められていたスーパーマーケットで初めて買い物をする夫の姿をレポートした記事[45]では、その便利さや商品の豊富さに舞い上がり、必要以上に買い込む様子が描かれている。また、同年 12 号では夫の子育てへの参加を促す記事、13 号ではまだ子供と上手に交流できない父親の失敗談などが見られる[46]。これらでは夫はまだ家庭の仕事に不慣れな存在として登場しているが、同年の 40 号には日常的に夫が家事を一緒にこなす様子を写真とともにレポートする記事も見られ、これには「今日は彼が料理します」と

---

[43] „Die Ehe ist keine Straßenbahn“（1955 年 38 号、反響 43、45、48 号）

[44] „Kann ein Mann auch Geschirr waschen?（1956 年 25 号）、Ruth Seydewitz（1905-1989）の女性の伝記集„Wo das Leben ist“からの抜粋。

[45] „Wenn man Männer einkaufen schickt…“（1957 年 1 号）

[46] „Der Vater und das Kind“（1957 年 12 号）、„Die Pädagogik und der Knetgummihund“（13 号）

題された男性に向けて書かれたレシピ集が添えられている[47]。この記事は家事の分担に関する読者間の議論を呼び、夫婦で家事を分担しているという声も見られたが、「夫は家事を手伝ってくれます、私がテーブルを拳で叩けば」と家事を女性の仕事だと考えている男性がまだ多く存在することを指摘する声や、「私は娘と同じように息子にも家事をするよう教育しています」と次世代の家事への意識改革に取り組む母親の声も見られた。以上のようにこの時期の誌面では男性の家事への増加を示す記事が観察される一方で、読者からの投書には、これが十分に進んでいない状況が反映されている。同年の最終号の家庭欄に掲載されたグローテヴォールの演説[48]の抜粋の中では、男女同権を誤解し、あらゆる負担を女性に課しても構わないと考えている男性が批判されており、憲法 7 条の実現にはまだ課題が多く残っていることが政府によっても認識されていたことが窺われる。

4－4. 女性就業促進へのあらたな取り組み

建国以来、東ドイツでは徐々に女性の就業率が上昇していったが、1956 年から伸び悩みを見せている。こうした状況下、政府は後述する 1959 年に新たに始められる予定の 7 ケ年計画のために新たな労働力の獲得に乗り出したが、その際ターゲットとなったのは、結婚を機に仕事を辞めていた専業主婦だった。1958 年の家庭欄では引き続き男性の家事への参加を促す記事が確認される一方で、働く女性の抱える問題や資格取得に苦労する様子、または職場へ復帰する姿をレポートする記事が目立った。

5 号の家庭欄に掲載された記事[49]は、まず仕事と家庭の両立に悩む女性と彼女たちへの行政による支援を紹介する一方、結婚後に仕事を辞めて専業主婦になる一部の女性の「仕事のモラル」が必ずしも最上のものではないとして、会話や議論を通して「時代遅れ」の考え方を克服するべきだと論じている。同記事は当時の労働者の 43.6%が女性であり、1950 年に 14%だった既婚女性の就業率が 1956 年には 18.3%に上昇していることを「いいスタート」としながらも、まだ課題は山積しているとの認識を示している。

その一方で、26 号に掲載された記事[50]では、労働者の 88%が女性だという衣料産業の企業が取材されているが、ここでは家庭を持つ女性の資格取得の厳しさに焦点が当てられている。この企業では 8 人のうち 7 人が女性の「マイスター」だが、実際には働きながら資格取得を目指している最中であり、これを断念してしまう女性も多いという。その原因として記事では彼女たちには職場のシフトの後、家事という「第 2 のシフト」、その後には資格取得の準備という「第 3 のシフト」が待っていることが挙げられている。同記事では

[47] „Beruf-Hausarbeit-Kinder“、„Heute kocht er“（1957 年 40 号）
[48] DFD の第 6 回連邦議会（1957 年 12 月 10 日開催）における演説。
[49] „Na ja, Frauen… Frauenprobleme auch Betriebsprobleme“（1958 年 7 号）
[50] „Frau Meister－keine leichte Sache“（1958 年 26 号）

さらに、彼女たちが受験する資格試験の範囲には技術的な知識だけでなく、経済学や社会主義思想に関するそれも含まれているが、家庭を持つ女性には寄宿舎つきの予備校で学ぶことは難しいという現状がレポートされている。その解決策として同記事は、1．企業が出資する労働者の居住地域内の保育所の開設、2．洗濯の設備または施設の用意、3．子供の学校給食の改善、4．子供の宿題や自習を助ける学童保育の教師の確保、5．通信制の資格準備の講座の開設、という同企業の女性委員会がまとめた働く主婦のための 5 点の改善案を紹介している。この改善案から想像される当時の働く女性にのしかかっていた負担は、家事（ここでは洗濯[51]）の自動化が進んだ現在と比べるとはるかに重く、現在の日本では塾通いが当たり前になった子供の教育に関しても、宿題や予習復習の面倒も母親の「第 2 のシフト」に含まれていたことがわかる。

この他にも、同年の家庭欄では結婚・出産を経て、経済的理由ではなく、家庭に閉じこもりたくないという理由で職場に復帰する主婦や、夜間シフトがない職場に行くために教育を受け直す例、またパートとして工場で補助労働を始める主婦も紹介されている[52]が、彼女たちが理想的な人物像ではなく、身近な女性として登場し、働くことが日常的なものとして描写されていることが特徴的だった。

この翌年、女性の就業率は上昇したが、職場に復帰する女性の多くが夜間シフトを嫌い、また、それまでフルタイムで勤務できる女性を求めた企業がパート勤務を労働の入口として容認したため、多くの女性が昇進の望めない売り子や補助的仕事に就くことになり、収入や地位が高い職ほど男性の占める割合が高いという不均衡を生み出した。

4－5．子ども・若者

既に述べたように、働く女性が帰宅後にこなした「第 2 のシフト」には、家事だけでなく、子育ても含まれていた。ここでは、家庭欄や投書欄に掲載された子供や若者に関するトピックを取り上げたい。まず 1957 年 31 号の「日曜日の子供達（Kinder am Sonntag）」と題された記事では、公園やプール、映画館などで親の付き添いなしで遊ぶ子供たちの様子がレポートされ、写真には乳児をベビーカーに乗せて歩き廻る少女や幼い妹や弟の手を引いている少年たちの姿も見え、口々に、親は疲れている、母親に時間がないと記者に話

---

[51] 西ドイツでは 1957 年には自動洗濯機が買えるようになっていたが、当時の東ドイツではまだ手動式の洗濯機さえも不足気味だった。また、クリーニング店は一般家庭の衣料や寝具を十分に扱う余裕はなかった。（Vgl. Kaminsky, Annette: Wohlstand, Schönheit, Glück. Kleine Konsumgeschichte der DDR, München 2001, S. 82.）

[52] 資格についての記事例： „Tausende Männer an der Strippe“（27 号）„Baumwollgewebe-qualifizierte Frauen! Nie wieder Hilfsmeisterin?“（38 号）、職場復帰：“Sie kündigte－und kam wieder“（32 号）、パート勤務：“Tadellos”（42 号）、„Das Fähnlein der 2x7 Aufrechten“（58 号）など。

す子供たちの様子は、共働き家庭の日常の一端を窺わせている。

女性の就業率が高かった東ドイツでは、多くの子供が、0 歳から託児所や保育園に預けられ、その後は 6 歳から 14 歳未満はピオニール団、14 歳から 25 歳までは自由ドイツ青年同盟などの大衆組織に所属することが徐々に定着したために、子供は物心つく前から、そして成人して家庭を持つ年齢になるまで国家による組織的な「保護下」で成長した。これらの大衆組織は、早期から労働モラルを子供に教え込み、勤勉、秩序、規律を尊ぶ人格を形成することを目標としていた。

1958 年には、翌年に新しい教育制度[53]を導入することから、家庭欄や投書欄で新しい制度への疑問や解説、さらに両親の協力と理解を求める声明[54]が見られた。義務教育は 8 年から 10 年へと延び、工場などでの研修も組み込まれることから、投書欄では子供への負担が増えることや、教育費がなかなか軽減しないことを懸念する声も散見された。この教育制度改革により、政府は早期からの職業教育を実現するだけでなく、労働者への強い連帯感を持たせることも意図しており、子供達もいっそう体制側に囲い込まれていった。

その一方で、1957 年の家庭欄では、以前よりも体の成熟に精神のそれが追いついていない若者の結婚と出産に注意を喚起する記事や、親として未熟な若い夫婦によって子供が家や保育所に放置される例が紹介された記事が見られた[55]。これらの記事では、人口増加への貢献を歓迎しつつも、教育を途中で投げ出してしまう一部の若者の無責任さを批判している。

また 1959 年 18 号に掲載された記事[56]では、16 歳の女子生徒と若い女性労働者の間で交わされた理想の結婚像に関する会話が再現されている。生徒たちは結婚相手の髪の色や鼻の高さ、またはファッションセンスなどの外見上の理想について述べ合っているのに対し、若い労働者女性たちは相手の外見よりもよく話し合い、互いに知り合うことの方が共同生活を続ける上では大切だとの考え方を示している。この記事にはその後約 10 か月間、複数号にわたって様々な年齢層の男女から結婚や夫婦のあり方についての意見が寄せられた。その中では、女性は家事や子育てに精を出すべきだという意見も見られたが、「私が結婚

---

[53] allgemeinbildende polytechnische Oberschule（POS、一般教育総合技術学校）

[54] 新制度については、すでに 1956 年から投書欄などで議論されている。導入直前の 1958 年には„Wie sollen unsere Kinder werden?“（13 号）、“Wir brauchen die Eltern”（38 号）、„Jugendgesundheitsschutz und die polytechnische Erziehung“（40 号）などの記事で取り上げられている。

[55] „Begegnung mit einer Fürsorgerin“（1957 年 3 号）には、子供を家に置き去りにして働くシングルマザーが登場する。„Jung gefreit – und bald ein Kind?“（34 号）では、若者の結婚と出産における利点と欠点が統計学や教育学による視点から論じられている。„Junge Eltern - gute Eltern?“（38 号）には、保育所に子育てをまかせっきりにする若い夫婦や、職業教育を結婚を機に放棄する若い女性なども登場する。

[56] „So stelle ich mir die Ehe vor“（1959 年 18 号、反響 25、31、35、36 号）

したら、お互いを尊敬し、夫婦のどちらかが支配することということはしません。（将来の）我が家では男女同権がルールです」といった 16 歳の女子生徒からの意見や、「結婚のことを考える前に、私はまず大学を卒業しなければなりません。幸せになるには仕事が欠かせないので、結婚はまだ私には重要ではありません」という女子大学生からの意見のように、尊敬し合える相手との結婚を望み、それまでは仕事や教育に専念すべきだとする 10 代の若者からの結婚観が示されている。

4－6. 「もう一人子供を」

若者の無計画な結婚・出産が懸念される一方で、東ドイツでは 1958 年まで全体的には出生率が低下傾向にあり、特に 1956 年には新生児が一万人以上減ったことから、女性を労働力として確保すると同時に、彼女たちに出産を促す必要性が生じた。これを反映するように、1957 年末から 1958 年にかけて投書欄では「なぜ子供が一人だけ？[57]」と題して、2 人目以上の子を持とうとしない家庭に関する議論が行われたが、この中では子供を 2 人以上持つことが好ましいとする投書が多く見られた。6 人の子供を育てたという年配の読者は、より豊かな暮らしをするために教育よりも家具や家電、衣服に支出したいという理由で子供を持ちたがらない近所の夫婦を例として挙げ、「多くのお金を持っていながら、このような人々はなんと貧しいことか」と批判している。

同時期にはさらに出産の経済的負担を軽減し、かつ安全な出産環境を整えることで出産への不安を排除することを目指して導入された、補助金や手厚いケアについての詳しい情報が誌面で大きく取り上げられている。この新制度は、一定期間に妊婦や新生児が検診を受けるたびに補助金を支給する[58]ことで、妊婦や乳児の定期的な検診を促している。「もう一人子供を（Noch ein Kind）」と題した 24 号の巻頭の見開き頁に掲載された記事では、まず若い既婚女性に子供を持つ予定や希望、さらに補助金の使い方に関する希望や疑問を尋ねているが、これに対して新しい補助金制度を歓迎する声だけでなく、子育てをしやすい環境整備を求める声や、「私たちは今、テレビのために貯金しているの。もう一人の子供？とんでもない！」と、これ以上子供を持つことを拒絶する声も見られた。同記事では、新制度や進行中の環境整備に関する専門家による解説を掲載して、こうした女性の疑問や不満の解消に努めている。さらに 33 号の「なぜ西ドイツでは多くの母親が死ななければな

[57] „Warum nur ein Kind?“（1957 年 51 号、反響 1958 年 6 号）

[58] 新たな規定によれば、妊娠 4 カ月までに最初の検診に行くと 100 マルク、6-7 カ月までの 2 回目の検診では 50 マルクを支給されたが、これより遅れると減額された。新生児には第 1 子は 250 マルク、第 2 子は 350 マルク、第 3 子 450 マルク、第 4 子 600、それ以上の子供には 750 マルクが支給された。また新生児検診は生まれて 4 カ月間は毎回 50 マルク支給された。

らないのか？[59]」と題された記事では、妊婦や母親への国による援助がレポートされ、これまでの東ドイツ政府による新生児の死亡率低下への取り組みによる成果を報じ、さらに西ドイツのそれと比較することで東ドイツの優位性をアピールしている。

4－7. 消費社会化

1958 年に発表された前述の 7 カ年計画（1959－1965 年）は、1961 年までに西ドイツの生活水準を超えるという非常に野心的なものだったが、これは 1953 年の暴動による混乱を克服し、安定を取り戻した政府が攻勢に出たことを示している。1958 年にようやく生活必需品の配給制度が廃止され、一部の生活必需品[60]を除いた商品価格が上昇したが、その埋め合わせとして給料が上げられ、消費環境も改善したことから西への移住者の数が一時的に減っている[61]。1959 年の 23 号に掲載された、配給制度の廃止から 1 年経った状況を報告する経済記事[62]では、日用品の生産量や収入が上昇していることをグラフで示し、東ドイツ社会が豊かになったという印象をアピールしている。実際に掃除機や洗濯機、車やテレビも普及率を伸ばし始めているが、『ヴォッヘンポスト』は製品の品質向上を目指すキャンペーンを展開し、生産現場からの報告記事や、読者からの品質向上や修理を求める声を掲載[63]して、量から質を求める姿勢への転換を見せている。

こうした動きに対して、東ドイツの消費が敗戦直後の「基本的な欲求を満たすことに必死だった困窮状態」から、1959 年以降は「欲求の満足を取り戻す傾向」へと移行し、これ以降、市民の欲求に変化が表れたとする指摘がある[64]。同国でもそれまで高嶺の花であった冷蔵庫や洗濯機、テレビといった、日本では「三種の神器」と呼ばれたそれらが生活必需品となり、耐久性や機能性だけでなく、商品や商店に美しさが求められるようになった。その後、同国では衣料や食品の高級品店、外貨で国外の商品を入手できる商店や通信販売制度が次々と販売網を広げ、徐々に同国は消費社会化していくが、ここには社会から個人の生活へと市民の関心が移り、未来の労働力となる子供の減少の原因だけでなく国家建設への意欲の低下をも招きかねない問題の萌芽が見られる。

---

[59] „Warum müssen in Westdeutschland so viele Mütter sterben?“（1958 年 33 号）
[60] 例えばパンやバター、ジャガイモなどの値段は値上げされなかった。
[61] Vgl. BMAS, Statistische Übersichten (DDR), Tab. 0.1.1.7.
[62] „Darf's für zwei Groschen mehr sein?“（1959 年 23 号）
[63] 商品の質向上に関する記事は 1959 年 20、22、23、27、34、35、36、38、51、52 号で確認された。
[64] Vgl. Merkel, 2001, a.a.O., S. 310ff.

4－8．50 年代末に表れた変化とその後の東ドイツ

1959 年 48 号では家庭欄の見開きページを使って「あなたは働いていますか？[65]」というベルリン、ドレスデン、カール・マルクス・シュタット（現在のケムニッツ）で 60 人の女性に行った仕事に関する街頭調査の報告記事が掲載された。ここでは仕事や子供の有無、家事との両立、資格取得の希望の有無やその際の障害について尋ねた結果が、回答者の名前、年齢、写真とともに紹介されている。記事では調査結果に添えた文章の中で「正直に言って、この調査結果に私たち自身が驚いています[66]。（…）ちょうど 50%の女性が『あなたは資格の必要な仕事に就く能力があると思いますか』、『そのためにさらに勉強する意志はありますか？』という質問に対してよどみなく『はい』と答え、13%が『もしかしたら』と回答しており、たった 7%が仕事を辞めたいと答えています」と驚きを示している。また誌面で紹介された女性の多くが家事と仕事の両立をうまくこなせているとの回答だった。このアンケート結果からは、女性の職業への意識が高まり、仕事と家事の両立も容易になりつつあるような印象を受ける。しかし、同記事はエンジニアを目指すある女性の夫が資格取得に非協力的であることを例に、男性の意識がまだ十分に変化していないことを指摘している。

その後の男性の意識の変化を家事の分担に関する 1972 年と 1988 年に実施された調査結果を例に比較してみると、10%程度だった男性の家事参加率が 30～50%へ上昇していることが分かる[67]。しかし、女性の 90%近くが教育期間中の者も含めて就業していた 80 年代末に至っても、男性の家事への参加率が十分に高かったとは言えない。なぜなら既に述べたように、家事と仕事を両立するために、女性は補助的な仕事に就かざるをえず、収入や責任の高いポストになるほど女性の就業率が低かった[68]からである。

また 1959 年以降、東ドイツでは離婚率が上がり[69]、シングルマザーも増えた[70]が、これは働く環境が整備されたことにより女性の経済的な自立が実現し、託児所や保育園、また

---

[65] „Sind Sie berufstätig？“（1959 年 48 号、反響 1960 年 5、8、13、19、20 号）

[66] 編集部は働く女性が少ないと見込まれた時間帯（詳細とその時間帯にした理由は不明）に街頭調査を行ったにもかかわらず、予想以上に多くの女性が何らかの職に就いていたことにも驚きを示している。

[67] 家事の分担に関する 1972 年の調査では、家事を夫婦で平等に分け合っているとの回答は 10%ほどだったが、1988 年の別の調査では、買い物や食器の片づけを 50%前後、食事の用意を 35%、掃除を 30%ほどの家庭で夫婦が共同または交代で行うと回答している。（Vgl. Wolle, a.a.O., S. 289ff.）

[68] 1988 年の調査では、女性の半数が 700－1000 マルクの収入グループに属していたのに対し、男性の半数は 900－1500 マルクのグループに属していた。（Vgl. BMAS, a.a.O., Tab. 1.2.3.）

[69] 1953 年に約 3 万件だった離婚数は、1989 年には約 5 万件に増えている。（Vgl. BMAS, a.a.O., Tab. 0.1.2.4.）また東ドイツでは教会の影響力が弱かったため、宗教が離婚の回避の理由にはあまりならなかった。

[70] Vgl. Gunner, a.a.O., S. 28.（Wolle, a.a.O., S. 284 より引用）

は学校のような教育施設、さらに大衆組織が子育てを積極的に請け負ったことから、世話の焼ける夫との離婚や独力での子育ての選択が可能になったことが大きな原因であろう。

おわりに

以上のように本稿では建国期の『ヴォッヘンポスト』における女性像の変遷を追ってきたが、後の東ドイツにおける女性の高い就業率は、男女同権が憲法に定められ、「働くこと＝男女同権」という論理によって、働きやすい、または働かざるを得ない環境が作られたことだけで達成されたのであろうか。前述の家電の購入のために 2 人以上の子供を持ちたがらない女性の意見から推測されるのは、消費社会化する東ドイツの女性たちの中で「働くこと＝男女同権」という論理が、「働くこと＝豊かな（個人）生活」という彼女たちの労働の個人的動機へと徐々に変化していったことである。同国では政府の補助金によって低価格に抑えられていた水道や電気、そしてパンやバターのような生活必需品が浪費されていたという指摘[71]もあるが、これらについて共通して言えるのは、国の発展のために用意された制度や設備が、生活の潤いや自己実現のために利用されるようになり、本来の目的を失ったことである。

とはいえ、再統一後の旧東ドイツでは、多くの女性が仕事と同時に、自負や生きがい、そして彼女たちを支える環境を失った。こうした東ドイツの女性たちが失ったものの中には、「オスタルギー（Ostalgie）」という言葉では片づけることができないものが多くあるのではないだろうか。バブルの崩壊以降、不況にあえぎ、さらに少子化が懸念される現在の日本では、待機児童問題が行政の大きな課題の一つであり、家事が共働きの家庭でも女性の負担となっているという調査結果[72]も見られる。東ドイツ政府による女性に対する強制的な就業促進は否定されるべきだが、これのために用意された制度から我々が学ぶべきことは多いだろう。

『ヴォッヘンポスト』は、労働力確保や出生率上昇に協力した一連の記事によって、国民の動員を有効に行うプロパガンダ機関として、また不満のはけ口やガス抜きの場として機能することで政府に協力したという点は否めない。しかし、1996 年に廃刊[73]されるまで、女性に娯楽と有益な情報、そして読者同士が相談や励まし合う場を提供し、労働や消費の

---

[71] Vgl. Merkel, 2001, a.a.O., S. 45ff.

[72] 生活情報雑誌の調査「オレンジページくらし予報」（2016 年 3 月実施）では、女性の 82%が家事の 8 割を行っていると回答しているが、回答者の 49.1%はパートまはたフルタイムで勤務している。（毎日新聞 2016 年 5 月 17 日朝刊）

[73] 『ヴォッヘンポスト』は 1991 年にグルーナー・ヤール社に売却され、1996 年まで西側から来た編集長のもとで発行が続行されたが、1996 年 12 月 23 日に発行された 1997 年 1 号をもって廃刊された。その後、ガンスケ出版グループが発行する『ディ・ヴォッヘ』*Die Woche* の付録として改めて発行されたが、1997 年 3 月 30 日にこれも終了した。

環境の改善のために働きかけた点で、女性の支えになったことは積極的に評価されるべきだろう。

非政治性の政治性
―戦後西ドイツにおける女性雑誌『コンスタンツェ』*Constanze* の誌面分析

横山　香

はじめに：1950 年代のドイツ連邦共和国

第二次世界大戦の終結後の数年は「零時」（“Stunde Null”）と呼ばれる。瓦礫と化した街で、住居や食料に困窮するなか、人々は新たに生活を、そして国自体を再建せねばならなかった。1947 年に欧州復興計画（マーシャルプラン）が提唱され、1948 年 6 月には通貨改革が実施された。しかしその直後には激しい物価および失業率の上昇に見舞われる。1950 年に勃発した朝鮮戦争も、当初は、とくに鉄鋼と石炭の価格上昇により、経済状況を悪化させただけであった。[1] しかしその後、消費産業の拡大、機械・電気・化学製品等の輸出、あるいは住宅建築政策などが好景気をもたらし、1954 年にドイツ連邦共和国（以下西ドイツ）は、アメリカ、イギリスに続く世界 3 位の産業国へと成長する。[2] この高度経済成長は「経済の奇跡」（“Wirtschaftswunder”）と呼ばれ、国民に経済的な豊かさ（Wohlstand）をもたらすことになる。文化史研究家のヘルマン・グラーザー（Hermann Glaser）は、終戦が「没落、徹底的な壊滅状態、困窮、死を意味すると同時に、新たな希望とチャンスをも意味していた」[3] と述べているが、まさにその復興への希望は、戦後およそ 10 年後には実現したのであった。

これは同時に、本格的な消費社会の到来を意味していた。テレビや冷蔵庫などの家電製品、あるいは家具や車といった耐久消費財から、国内外への休暇旅行といった余暇の過ごし方までもが、一般のサラリーマンや労働者の家庭にも―あらゆる人に等しく、ではないにせよ[4] ―手が届くようになった。社会学者のヘルムート・シェルスキー（Helmut Schelsky）は「平準化された中間階層社会」（“nivellierte Mittelstandsgesellschaft”）というテ

---

[1] Ulrich Herbert: Geschichte Deutschlands im 20. Jahrhundert. München (C. H. Beck) 2014, S. 622.
[2] Ebd., S. 622-623.
[3] Hermann Glaser: Aus den Trümmern zur Post-Moderne. Zur Kulturgeschichte der Bundesrepublik Deutschland. München (Max Hueber Verlag) 1986, S. 10.
[4] 斎藤哲は 1950 年代の「経済の奇跡」が、実際には社会階層による差が存在し、消費水準の向上が逆説的にも消費の犠牲によってなされたという意味で「神話」であったが、その心理的な影響によって「国民的アイデンティティの核」となっていたと指摘している（斎藤哲：家事と消費生活―ヴァイマル時代から「経済の奇跡」まで―［明治大学政治経済研究所『政経論叢』第 71 巻第 1・2 号、2002、1-50 頁］2 頁）。また、「経済の奇跡」が被追放民・移民・難民を含む労働者によるきつく長い労働によって支えられていたという事実を忘れてはならないだろう。

ーゼで、階級差が曖昧になった戦後の高度産業社会を定式化した[5] が、この社会の平準化への大きな推進力のひとつとなったのがマスメディアである。新聞や雑誌などの既存の媒体だけではなく、ラジオ、そして新たにテレビ[6] が登場する。こういったマスメディアは、社会階層や都市と田舎の境界を超えて、あらゆる人の手に即座に行きわたり、人々の生活に浸透するようになる。そしてマスメディアは、たんに情報を与える媒体ではなく、人々が拠りどころとするような価値規範や、あるいはアイデンティティの基盤さえ生み出すようになっていくのである。

１．戦後西ドイツの女性雑誌の出版状況と *Constanze*

このように、戦後の社会の変容にとってマスメディアは大きな役割を果たしていたのだが、とくに女性の文化形成に多大な影響を与えたのは家庭雑誌や女性雑誌であった。

1945 年 12 月には *Frauenwelt: eine Zeitschrift für alle Gebiete des Frauenlebens*[7] がニュルンベルクで、*sie. Die Wochenzeitung für Frauenrecht und Menschenrecht*[8] がベルリンで創刊される。戦後の女性たちは、男性が戦地から戻らないなか、自らの手で生活を再建しなければならなかった。女性たちは経済的にも精神的にも自立し、政治や社会への関わりを持つ（あるいは持たざるをえない）ようになった。このような女性たちが置かれた社会状況や、あるいはドイツ人の民主化・非ナチ化への再教育を旗印とする占領軍の出版認可制度を反映して、終戦直後に発刊された女性雑誌は、女性の自立や権利、とりわけ男女同権の法的保障をめぐる状況や、その他の文化・政治に関する問題を積極的に扱っていたと言われている。[9]

しかしその後には、娯楽的な女性雑誌も次々に創刊あるいは復刊されることになる。そ

---

[5] Helmut Schelsky: Wandlungen der deutschen Familie in der Gegenwart. Darstellung und Deutung einer empirisch-soziologischen Tatbestandsaufnahme. Stuttgart (Ferdinand Enke Verlag) 1960, S. 334. ただしこのような図式的な見方にはさまざまな批判がある。Herbert（a.a.O., S. 689-690）および斎藤（前掲書、23 頁）等を参照。

[6] 戦後のテレビ放送は 1950 年 11 月に NDWR（Nordwestdeutscher Rundfunk）による実験放送が、1954 年 11 月に ARD（Arbeitsgemeinschaft der öffentlich-rechtlichen Rundfunkanstalten der Bundesrepublik Deutschland）による本格的な放送が開始された。ただし遍く普及するのは 1960 年代になってからである。Knut Hickethier (unter Mitarbeit von Peter Hoff): Geschichte des deutschen Fernsehens. Stuttgart, Weimar (J. B. Metzler) 1998, S. 112-113.

[7] 編集者のロジーネ・シュパイヒャー（Rosine Speicher, 1884-1967）は、1921 年にこの雑誌の前身となる *Nürnberger Hausfrauenzeitung* を創刊していたが、戦時中は発刊禁止となっていた。

[8] F.U.K. Publikation から出版された。F.U.K.は出版者である Ruth Andreas-Friedrich (1901-1977), Heinz Ullstein (1893-1973), Helmut Kindler (1912-2008)の頭文字。

[9] Ulla Wischermann: Frauenöffentlichkeiten - Annährungen aus historischer Perspektive. In: Massenmedien und Zeitgeschichte. Hrsg. von Jürgen Wilke. Konstanz (UVK Medien) 1999, S. 351-362, hier S. 356-357, あるいは Annette Kuhn: Die stille Kulturrevolution der Frau. Versuche einer Deutung der Frauenöffentlichkeit. In: Kulturpolitik im besetzten Deutschland 1945-1949. Hrsg. von Gabriele Clemens. Stuttgart (Franz Steiner) 1994, S. 83-101 等を参照。

の前身を 19 世紀末に遡ることができる、戦時中にも広く読まれていた *Das Blatt der Hausfrau*（現在の *Brigitte*）は、1947 年 10 月にウィーンのウルシュタイン（Ullstein & Co., Ges.m.b.H. in Wien）から、1949 年にはベルリンで[10] 復刊された。1948 年に発刊された、モードや映画に関する話題を中心とする *Ihre Freundin*[11]（Neue Verlagsgesellschaft, 現在の *Freundin*）や *Film und Frau*[12]（Jahreszeiten Verlag）、1949 年発刊の *Stimme der Frau*[13]（Jahreszeiten Verlag, 現在の *Für Sie*）のように、名前や出版社は変わっても現在も存在するような息の長い雑誌から、1946 年から 1950 年まで出版されていた *Die Frau*（Drei Kreise Verlag）のような短命の雑誌まで、1949 年 9 月の時点で、ドイツでは 20 種の娯楽的な女性雑誌が占領軍により認可されていた。[14]

本稿で取り上げる *Constanze* は、ジョン・ヤール（John Jahr, 1900-1991）とアクセル・シュプリンガー（Axel Springer, 1912-1985）がハンブルクで設立した Constanze-Verlag が、イギリス占領軍の認可を得て 1948 年 3 月に発刊した女性向けのグラフ誌である。発刊当時は 2 色刷りで 24 ページ、価格は 60 ペニヒ（通貨改革後は 1.20 マルク）で、隔週で販売されていた。1948 年 12 月には約 30 万部、1950 年には約 41 万部[15]、1957 年には約 57 万 5 千部と売り上げを伸ばし、同年の 1 冊あたりの読者数（Zahl der Leser pro Exemplar, LpE）は 15 人弱という調査結果[16] もあった。この雑誌の影響力について、ジャーナリズム研究の第一人者であり、アレンスバッハ世論調査研究所（Institut für Demoskopie Allensbach）創設者のエリザベート・ノエレ＝ノイマン（Elisabeth Noelle-Neumann）は、次のように記して

---

[10] 1949 年 10 月にアメリカ軍の認可を得て、西ベルリンの Verlag des Druckhauses Tempelhof によって復刊された。同出版社は 1952 年にウルシュタイン家に返還され、同年に Ullstein AG が設立された。ベルリン版では、それまでに統合してきた *Wir Frauen*, 後には *Die praktische Frau* という雑誌のタイトルが用いられていた。1952 年 8 月に *Das Blatt der Hausfrau* という名前になり、*Brigitte* はサブタイトルとして付けられていたが、1954 年 4 月からは *Brigitte* のみになる。1956 年のシュプリンガーによる Ullstein AG 株取得にともない、1957 年に *Brigitte* は Constanze-Verlag に譲渡された。同出版社解体後は Gruner + Jahr が *Brigitte* を発行しており、同社は *Brigitte* の創刊を 1954 年 5 月 1 日としている。詳細は Sylvia Lott-Almstadt: *Brigitte*, 1886-1986: die ersten hundert Jahre: Chronik einer Frauen-Zeitschrift. München (Gruner + Jahr) 1986, S. 179 を参照。

[11] 1961 年に *Freundin* と改名するが、1962 年に Burda Verlag に売却された。現在も Freundin Verlag（Hubert Burda Media）より隔週で発刊されている。

[12] 同誌は 1969 年に廃刊となり、*Petra* という 1964 年に Constanze-Verlag より発刊され、Gruner + Jahr が Jahreszeiten Verlag に売却した女性雑誌へと引き継がれることになる。

[13] 1957 年に *Für Sie* と改名。Jahreszeiten Verlag はこの年を *Für Sie* の創刊年としている。

[14] Vgl. Lott-Almstadt, a.a.O., S. 175. 当時の女性雑誌の出版状況については、Sylvia Lott: Die Frauenzeitschriften von Hans Huffzky und John Jahr. Zur Geschichte der deutschen Frauenzeitschrift zwischen 1933 und 1970. Berlin (Wissenschaftsverlag Volker Spiess) 1985, S. 350-400 が詳しい。

[15] IVW による 1950 年下四半期での販売部数は、*Frauenwelt*: 23 000, *Ihre Freundin*: 110 314, *Stimme der Frau*: 105 000, *Film und Frau*: 194 208, *Das Blatt der Hausfrau*: 101 240 となっている。Lott, a.a.O., S. 355.

[16] Lott-Almstadt, a.a.O., S. 184.

いる。

［*Constanze* の影響力についての］研究結果は唖然とするものであった。*Constanze* に傷んだワイシャツの襟の直し方が載っていれば、その号を手に取った 100 万人の女性読者が試したという。ナプキンのたたみ方のアドバイスには 150 万人が従った。病気の子どもの正しい寝かしつけ方は、70 万人の読者たちがやってみた。そして 200 万人近くの読者が *Constanze* に載っていたからといって、数日間、あるいは数週間、1 時間ごとに 5 分間、両足を上げたのだ。[17]

あるいは、*Constanze* が 1969 年に *Brigitte* に統合され実質の廃刊となった[18] とき、*Die Zeit* は、戦後西ドイツの「経済の奇跡」とともに成長した *Constanze* という「少女」は、戦後の陰鬱な日常に色彩を与え、女性たちにおしゃれだけではなく自信を教え、他の女性雑誌にとっての模範となっていたと、多分の皮肉交じりではあるが、記している。[19]

２．女性雑誌への批判

Constanze はこのように、西ドイツの 1950 年代を象徴する大衆文化的な現象であった。その 1950 年代の西ドイツには、女性を「抑圧」するような法律や規範がまだ多く存在していた。男女同権は 1949 年の基本法で定められたものの、民法で定められる婚姻関係においては、夫のみが共同生活の決定権を有し、妻には旧姓を名乗る権利も、就業する権利も与えられていなかった。大議論の末、1958 年にようやく民法での男女同権法（Gesetz über die Gleichberechtigung von Mann und Frau auf dem Gebiet des bürgerlichen Rechts, Gleichberechtigungsgesetz）が施行されることにはなったが、当時の連邦首相コンラート・アデナウアー（Konrad Adenauer, 1876-1967, 在任 1949-1963）のもとで、男女同権や母親の就労に対して公然と異議を唱えるようなフランツ＝ヨーゼフ・ヴュルメリング（Franz-Josef Wuermeling, 1900-1986, CDU）のような政治家が家族省大臣を務めていたことは、この時代の象徴として捉えることができるだろう。[20] 前述の経済発展との関連で言えば、「『経済の奇跡』の

---

[17] Elisabeth Noelle-Neumann: Die Wirkungen der Massenmedien. Bericht über den Stand der empirischen Studien. In: Publizistik: Zeitschrift für die Wissenschaft von Presse, Rundfunk, Film, Rhetorik, Werbung und Meinungsbildung. Jahrgang 5, Heft 6, S. 212-223, hier S. 218-219.
[18] *Brigitte* が Constanze-Verlag から出版されていた経緯については、注 10 参照。
[19] Alexander Rost: Adieu, Constanze. Abschied von einem gefallenen Mädchen, das eine große Dame war. In: *Die Zeit*. 26. 12. 1969.
[20] 男女同権法成立過程を含めた戦後の女性をめぐる政治状況については、桑原ヒサ子：ドイツ人女性の戦後―「零時」からの出発―［敬和学園大学『人文社会科学研究所年報』第 13 号、2015、1-20 頁］参照。

中で人々の関心を消費生活の向上へと誘導しつつ、社会的には、伝統的規律や規範の回復、伝統的な権威主義的家族の再建によって、社会的な安定を維持することが試みられた」[21]。この伝統的で権威主義的な家族における女性の「本来の」役割は、3K、すなわち子ども・台所 ・教会（Kinder, Küche, Kirche）にあるとされたのであった。

マスメディアがこういった女性の役割を固定化し、抑圧的な価値規範を強化しているという批判的論調は、とりわけフェミニズムの視点が社会学やメディア研究に取り入れられるようになった 1960 年代以降、とくに顕著に見られるようになる。なかでも、ファッションや化粧品、愛や結婚、家事や育児に対する助言、あるいはセレブリティと娯楽の情報で溢れかえり、社会政治的なテーマを扱うことがほとんどない女性雑誌は、女性読者から批判能力を奪い、自ら進んで現存の父権的な社会体制を肯定的に再生産するよう彼女たちの意識を操作するものであるとして、しばしば批判の俎上に上げられてきた。[22] 1950 年代を象徴する *Constanze* はことさらこのような批判の対象になってきた。次のようなこの雑誌の説明は、その典型的なものである。

> *Constanze* は最初の数年間は女性たちのためになるよう肩入れしていたし、たとえば男女同権法をめぐる議論では、積極的に関わる立場をとっていた。しかしこの雑誌はもちろん、女性の解放を唱える雑誌ではまったくない。その反対に、女性たちが極めて自立していた戦中・戦後の時代が過ぎた 50 年代の初めに感じられるようになった、女性たちを再び家庭へと戻そうとする試みを促している。かつてと同様に、夫のために快適な家を作り、出世のために夫を支えることが、そこでは何よりも目標とされているのである。[23]

３．*Constanze* 誌面の分析

（１）誌面構成

本題に入る前に、*Constanze* [24] の誌面構成を見ておきたい。出版直後は 24 ページだっ

---

[21] 斎藤哲：第 2 次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開［明治大学政治経済研究所『政経論叢』第 75 巻第 1・2 号、1-49 頁］30 頁。

[22] ドイツにおける女性雑誌研究の結果をまとめたものとして、Christine Feldmann-Neubert: Frauenbild im Wandel 1948-1988. Von der Familienorientierung zur Doppelrolle. Weinheim (Deutscher Studien Verlag) 1991, S. 95-100 を参照。

[23] Jörg Bohn: Constanze. In: Monika Wenzl-Bachmayer (Hrsg.): Feminine Fifties. Die Wirtschaftswunderfrauen, 2010.

なお、この論文は、http://www.wirtschaftswundermuseum.de/constanze-1.html にて閲覧可能である［最終閲覧日 2017 年 4 月 20 日］。

[24] 本稿で一次資料として使用している *Constanze*（Stiftung Archiv der deutschen Frauenbewegung 所蔵）は、1948: März Heft 2 [24], April Heft 3 [24], Juli Heft 9 [24], Oktober Heft 15 [24], Dezember

た誌面は、10 年後の 1958 年では 100 ページを優に超えており、内容も豊富になっているが、フォーマットとしてはおおよそ次のように分類できる。

① 表紙：国内外の女優やモデルが表紙を飾るが、人気のある人物ばかりとは限らず、名前の記載がないこともある（図 1〜3）。

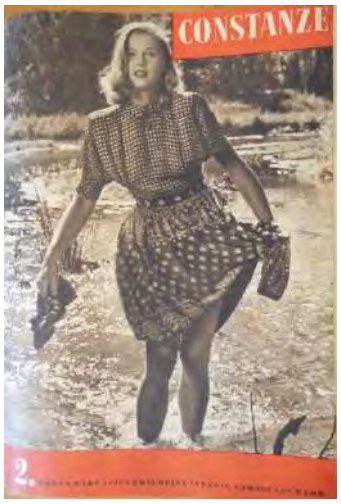


図 1：*Constanze*, 1948, Heft 2 の表紙。モデルは女優の Edith Schneider（結婚後 Schneider-Mosbacher）。

図 2：*Constanze*, 1954, Heft 14 の表紙。モデル女性の名前は記載されていない。

図 3：*Constanze*, 1956, Heft 15 の表紙。モデル女性の名前は記載されていない。

② 特集記事：さまざまなテーマについての特集記事。雑誌の表紙に書かれていることもあり、その号の目玉となっている。たとえば、「夫がいない 1 千万人の女性に聞く：あなたたちはそんなに孤独なのですか？」（1951, Heft 21）、「男たちは誠実でいられるか？」（1953, Heft 23）、「もっと若者向けの映画を！」（1956, Heft 21）など。

③ 一般記事：話題は日常から非日常、一般人から有名人、国内から国外、アクチュアルな出来事から歴史的出来事まで多岐にわたり、また記事の長短もさまざまであるが、写真を中心とする構成が特徴的であり、これが、*Constanze* が「グラフ誌」（“Illustrierte”）と称されていた所以である。記事の具体的な例としては、以下の「（３）記事」を参照。

④ ファッションと美容：同誌にとって重要な部分である。創刊当初はイラストであった

Heft 21 [24]（以上 1948 年発刊分については出版日の記載なし）、1949: 3. Februar Heft 3 [32], 28. April Heft 9 [32], 30. Juli Heft 15 [32], 12. Oktober Heft 21 [32], 1950: 18. Januar Heft 2 [40], 16. August Heft 17 [48], 25. Oktober Heft 22 [64], 1951: 18. Juli Heft 15 [48], 10. Oktober Heft 21 [64], 1952: 10. September Heft 19 [56], 1953: 4. November Heft 23 [96], 1954: 30. Juni Heft 14 [96], 1956: 11. Juli Heft 15 [116], 3. Oktober Heft 21 [148], 1957: 20. März Heft 7 [132], 10. Juli Heft 15 [124], 1958: 30. April Heft 9 [140], 1959: 19. August Heft 17 [108].（[ ] 内の数字は総ページ数。本文には年と号数のみ示す。）

が（図 4）、1949 年にはすでに写真に切り替わり、クリスチャン・ディオールやジバンシーといった国外のブランドや、あるいはベルリンやミュンヘンのオートクチュールの服を着こなすモデルの写真が掲載されている（図 5 右）。当時女性誌では一般的であった服の型紙は、モデルのみが掲載され、読者は別途申し込んで購入する仕組みになっている（図 5 左）。美容については化粧や肌の手入れの方法から痩身まで、さまざまな情報が掲載されている。

図 4：*Constanze*, 1948, Heft2, S.12-13. 創刊当初のモード誌面はまだイラストであった。

図 5：*Constanze*, 1956, Heft 15, S. 76-77. 左頁は型紙用のモデルと注文方法、右頁はジバンシーの夏の最新ドレス。

⑤ 娯楽誌面：連載小説（書下ろしではない場合もある）やクロスワードパズル、映画・ベストセラー本情報、懸賞、風刺漫画など。

⑥ 家事（“Die praktische Constanze”）：料理や掃除などの家事のコツや、住居の設計や家具の設置アドバイスなど。育児についての記事はあまり見られない。

⑦ 定番誌面：読者からの手紙（“Vertraulich! ”, “Die Meinung der Leser”）、悩み相談（“Trost und Rat”）、結婚相

手募集広告（“Treffpunkt”）など。

⑧　広告：おもに女性の購買をターゲットにした広告。

（２）読者層

以下の *Constanze* の読者に関するデータは、ジルヴィア・ロット（Sylvia Lott）が独自に入手した 1949 年時点でのデータ[25] であり、1950 年代にかけて読者層が変化したと思われるが、公表されているデータが他にはないため、参考までに記しておく。

- 購買者の男女比：27%が男性
- 読者の男女比：3 分の 1 が男性
- 女性読者の年齢：30 歳以下 43%、30〜50 歳 43%、50 歳以上 14%
- 女性読者の婚姻状況：既婚 54%、未婚 35%、未亡人 9%、離婚 2%
- 女性読者の就業状況：職業従事 72.1%、専業主婦 27.9%。（「職業従事」のうち「家事もする」と答えた既婚者を足して、出版社側では 62%を「主婦」としている。）
- 女性読者の職種：会社員 56.4%、自営業 14.9%、自由業 9.1%、職業訓練 9.1%、公務員 5.4%、労働者 5.4%［数値は引用のママ］
- 女性読者の学歴：小学校（Volksschule）卒業 31%、中学校卒業資格（Mittlere Reife）51%、高校卒業資格（Abitur）18%
- 読者の居住地：10 万人以上の都市 39%、2-10 万の都市 24%、2 千-2 万の都市 27%、2 万人以下の都市 10%

1950 年代までは一般記事がメインであったのに対し、1950 年代になってからは、ファッションなど明らかに女性向けの情報が増加している。また他の一般雑誌が相次いで発刊されたことなどもあり、これらの点を鑑みれば、その後の購読の男性比はおそらく低下したことが考えられる。さらに婚姻や就業に関する数値も、社会動態の変化や読者の「成長」とともに、おそらく変化していったと考えられる。しかしながら、上記の数値がこの雑誌の読者像を大まかに捉えていると考えれば、専業または職業をもった 30〜50 代の既婚女性[26] や、就職や結婚を考えるような比較的若い年齢層の、学歴が中程度の女性を中心に、この雑誌が読まれていたとみることができるであろう。

---

[25] Lott, a.a.O., S. 495-497. なおこのデータの出典は、Constanze-Verlag に委託されてアレンスバッハ世論調査研究所が実施した広告主向けの調査結果 CONSTANZE. Bericht über eine Leser-Umfrage, 1950 であり、これはロットがノエレ＝ノイマンから個人的に利用させてもらったものである旨が記されている（ebd., S. 411）。

[26] 連邦政治教育センター（Bundeszentrale für politische Bildung）によれば、1950 年の既婚女性における職業従事者の割合は 26%であった。http://www.bpb.de/gesellschaft/gender/frauen-in-deutschland/49397/globalisierung-und-arbeit?p=all［最終閲覧日 2017 年 4 月 22 日］

（3）記事

さて、実際の記事にはどのようなことが書かれていたのだろうか。

たとえば、1948 年 3 月の創刊第 2 号に、まだ戦後の混乱期にあるなかで、がれきのなかで働く女性たちの大きな写真とともに掲載された「われわれの女性たちに脱帽！」（Hut ab vor unseren Frauen! ）[27] という記事がある。このなかで筆者―最後の署名では H. H.となっているので、これは初代編集長のハンス・フフツキー（Hans Huffzky, 1913-1978）[28] が書いたものと思われる―は、読者には「あなたたち女性たち」と二人称で呼びかけ、自分自身を含めたドイツ人男性を「われわれ男たち」と一人称で称しながら、次のように言う。

> われわれ男たちはすっかり打ちのめされている。[…] だからと言って、もしわれわれがそこ［政治］から自発的に退いたとしたら、どうなるだろう？われわれの地位や「ポスト」を引き継いでくれる女性たちが存分にいるとでも？政治なんてまっぴらごめん！とあなたたちが拒絶するのが目に見えるようだ。われわれの職場はガランとしたままだ。だから当分の間、われわれ男たちは困難に耐えて、喘ぎながらでも「職務」をやり通さないといけないのだ。[29]

しかしフフツキーは、女性の政治参画そのものを否定しているわけではない。むしろその反対に、女性は好むと好まざると政治に参画すべきであるし、実際やっていると彼は述べる。もっともそれは、党や組織の一員として議会に入ったり、大臣の椅子の上に座ったりするやり方ではない。女性たちが成長し、権力を持つのは「家、食卓、家族」という場所なのである。[30] このように彼は政治と女性の関係について述べ、理想のドイツ人女性像を次のように示す。

> われわれ男性がドイツ女性といって思い浮かべるのは、黙々と日々の仕事をするその姿だ。料理、洗濯、裁縫、庭仕事、床磨きをし、長蛇の列に並び、物々交換をし、値切り、釘を打ち、薪を割り、繕いものと修繕をし、子どもの世話をし、ウサギに餌をやり、牛乳配達人にセーターを編む…われわれ男たちが困窮した我が家から遠く離れたどこかの職場で、不毛な仕事で 180 マルク稼いでいる間に！[31]

---

[27] *Constanze*, 1948, Heft 2, S. 4-5.
[28] 本名 Johannes Oswald。1938 年にジョン・ヤールがベルリンで発刊した女性雑誌 *Die junge Dame* の編集長となり、戦後は *Constanze*, *Petra*, *Brigitte* といった女性雑誌の編集長を歴任した。
[29] *Constanze*, a.a.O, S. 4.
[30] Ebd.
[31] Ebd., S. 5.

そして、「われわれが脱帽するのは、国王や皇帝でもなく、聖職者や大統領でもなく、あるいはリーダーや所長でもなく、女性たちなのだ」[32] と記事を締めくくる。

女性が政治的になることを奨励しながら、しかしそれは決して政治家になるというようなやり方ではないのだと牽制し、伝統的なドイツ女性像を称揚する。この新しい価値体系を求めつつ、従来の美徳を持ち出す態度に、フフツキー自身のアンビバレントな女性像が現れていると言えるだろう。編集長自身の手によるこの記事から、この雑誌の「女性たちを再び家庭へと戻そうとする試み」を読み取ることは不可能ではない。

もうひとつの例を挙げよう。ヴァルター・フォン・ホランダー（Walther von Hollander, 1892-1973）[33] の「完璧な主婦」（Die perfekte Hausfrau）と題したコラム[34] である。ホランダーは *HÖR ZU!*というラジオ・テレビ番組雑誌で、「イレーネ夫人に聞きましょう」（“Fragen Sie Frau Irene”）という読者の悩み相談欄を担当し、イレーネ夫人として読者の手紙に回答していた人物であり、*Constanze* にもたびたび寄稿していた。

彼は、家事が終わりのない仕事であり、どれだけ完璧にやっても夫や家族から当然と思われ、承認されることがない主婦という職業に一定の理解は示している。しかし主婦が支払いの悪い仕事というのは正しくない、というのも高収入で、きちんと家計費を払うような夫がいれば問題はないはずであり、退屈なのは他の仕事も同じであるとして、合理的に考え、余計なことをせずてきぱきと楽しみながら作業をこなし、家事だけに人生を捧げない、アメリカにはすでに存在するような「完璧な主婦」になればよいのだと述べる。[35]

ホランダーが描く主婦像は、伝統的というよりも、進歩した技術を積極的に用い、それによってできた空き時間を自分のために使う主婦という、よりモダンなイメージであり、ホランダーも指摘しているように、こういった主婦像は、アメリカではすでに 19 世紀末に出現した郊外の中産階級の家庭において見られるようになった。[36] ただしこのような主婦の存在は、家庭に新しい技術を取り入れることができる経済的豊かさと、家計の決定権を妻がある程度持っていることを前提にしている。女性たちが家事から解放されることで

---

[32] Ebd.

[33] 作家、脚本家、コラムニスト。ホランダーについての詳細は Lu Seegers: Fragen Sie Frau Irene: Die Rundfunk- und Familienzeitschrift *HÖR ZU!* als Ratgeber bei Geschlechterproblemen in den fünfziger Jahren. In: Jürgen Wilke, a.a.O., S. 363-377 参照。

[34] *Constanze*, 1956, Heft 21, S. 48.

[35] Ebd.

[36] アメリカの郊外型家庭を研究しているリン・スピーゲル（Lynn Spiegel）は、19 世紀末に郊外に移住した中産階級家庭の主婦たちについて次のように述べる。「彼女たち主婦がより効率的になればなるほど、家事雑用だけの人生から解放され」、「日常の仕事から解放された女性たちは、社交界で過ごしたり、テニスやゴルフや他の娯楽を公的空間で楽しむようになった」（リン・スピーゲル（山口誠訳）：家庭の理想型と家族の娯楽―ヴィクトリア朝時代から放送の娯楽まで［吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』（せりか書房）248-278 頁］258 頁）。

自由を手に入れるという考えは、たしかに進歩的ではあるが、専業主婦という家族制度を自明視しているという意味では伝統的である。ホランダーもフフツキー同様、進歩的でありつつ伝統的であるアンビバレントな女性像（これをルー・ゼーガース（Lu Seegers）はホランダーの「アマルガム（融合）」（“Amalgam”）と名付けている[37]）を持っていたように思われる。彼は主婦が抱える悩みに答える努力はしていても、その悩みを生み出す原因となっている社会体制自体を批判することはない。

以上、フフツキーとホランダーという、*Constanze* にとってなくてはならなかった編集長と寄稿者の記事を紹介したが、興味深いことに、こういった論調の記事は、実際にはあまり見当たらないのである。

実はこの「完璧な主婦」のコラムにも続きがある。マリーア・マルタ・ゲールケ（Maria Martha Gehrke, 1904-1986）という女性ジャーナリストも *Constanze* にはしばしば寄稿しており、この記事のように、ホランダーとは「賛否両論」形式でのコラム欄を担当することがあった。ゲールケは、ホランダーの男性的結婚観に次のように反論する。すなわち、若い男性たちを対象にした最近の調査結果によると、彼らが結婚に求めるものは完璧な家事よりも、妻と子どもたちとの愛情溢れる家族であり、この調査結果が、母親をこき使う専制的な父親と、家計と家事でくたくたになった母親を見て若い男性たちが育った結果導き出されたものであるのなら、それは良い兆候である。[38] そして彼女はコラムの最後をこう締めくくる。

> そうであれば、今日多くの中年女性が抱く失望のリスクは減るかもしれない。その失望とは―私はあらゆる社会階層の女性がこう言っているのを聞くのだが―「まあね、悪い夫でもないし、子どもだってまずまずよ。文句はないわ。でももう一度選択するなら、結婚はしないわね。」[39]

あるいは女性の職業についてはどうであろうか。以下にいくつかの記事を示したい。

図 6 は、女性のタクシー運転手について、1951 年に書かれた記事[40] である。港町でのタクシー運転業務は女性にとって危険であり、女性の仕事ではないとして、彼女を仕事から締め出している地元のタクシー業界に対して彼女が起こした裁判で、男女同権の基本法を支持した判決を区および地方裁判所が下したという話である。

---

[37] Seegers, a.a.O., S. 365.
[38] *Constanze*, a.a.O., S. 48.
[39] Ebd.
[40] *Constanze*, 1951, Heft 21, S. 20.

図 6：“Kein Beruf für eine Frau…” *Constanze*, 1951, Heft 21, S. 20.

彼女の車に無線番号が繋がらないようにしているという男性運転手たちからの嫌がらせを受けても、彼女は笑って仕事に励んでいる。記事に署名はないが、女性の立場で書かれていることは明らかである。

そして図 7 は、1954 年の海外で活躍する女性の添乗員について書かれた記事[41] である。添乗員の仕事に求められるのは、語学力・専門知識・忍耐力であり、彼女らがこういった知識と特性を生かして活躍する様子をレポートしている。女性の方が添乗員に向いている理由としては、旅行者たちが家族のように仲良くなれることを挙げており、読者に向けて、「賢明さと交渉力、そしてとくに人を引き付ける魅力（Charme）」[42] があれば、最高の添乗員になれると書いている。

図 7：Mit Frauen gut gefahren. *Constanze*, 1954, Heft 14, S. 22-23.

[41] *Constanze*, 1954, Heft 14, S. 22-23.
[42] Ebd., S. 23.

この 2 つの記事は、これまで男性の職業・職場と考えられていたところでの女性の活躍をレポートしているが、女性の特性とされている神経の細やかさや魅力が活かせるというような論調になっていることが特徴的である。

女性と職業というテーマ、あるいは働く女性は、しばしば取り上げられている。芸術学校を卒業した女性たちはいまどのような生き方をしているか（1956, Heft 21）という特集記事から、ドイツ在住で主婦であり母でありグライダー操縦者でもあるアメリカ人女性の小さな記事（1958, Heft 9）まで、未婚既婚問わず女性の生き方はこの雑誌の中心的なテーマである。1957 年第 6 号では手工業分野、第 7 号では商工業分野における女性の職業について特集[43] が組まれている。一般的に女性向けとされているものだけではなく、今後女性にもますます開かれることになると考えられる職種の職務内容と、就職のために必要な学歴および職業訓練の年数が書かれている。中心になっているのは中学校卒業資格を前提とした事務系職業であるが、大学卒業資格が必要な専門職や男性の領域とされてきた工業系の職業まで、かなり詳細に紹介されている。実際、この時代には人手不足が顕著となり、女性は重要な労働力となりつつあった。[44] 「合理化・機械化・自動化によって職業そのものが変わることはあるが、女性の職業活動の幅が狭められることはないだろう」という専門家の声[45] も掲載されている。

この記事の読者として想定されているのは未婚の若い女性であり、さらに紹介されている多くの職種は女性向けとされているものである。しかしながら、女性の労働を否定するニュアンスも、あるいは結婚すれば仕事を辞めて家庭に入るべきであるというメッセージも、これらの記事からは少なくとも読み取ることはできない。*Brigitte* を用いて女性の理想像を分析したフェルトマン＝ノイベルト（Christine Feldmann-Neubert）は、1947 年から 1957 年の期間で、女の子たちは職業訓練を受けるべきだとされながら、それは「不慮の場合に備える」ためであり、いわば腰かけ期間の、典型的に女性の補助的職業が紹介されている、という結論を出している。[46] たしかにフェルトマン＝ノイベルトが指摘するように、*Brigitte* 同様 *Constanze* においても、魅力、器用さ、気品、優しさ、母性といった女性らしさ・女性性（Weiblichkeit）と職業が結び付けられているが、それがすなわち就業数年後に結婚すれば家庭へ入るべきというプロパガンダの役割を果たしていると考えることは、少なくとも *Constanze* の記事を見る限りでは無理があるように思われる。

---

[43] *Constanze*, 1957, Heft 7, S. 66, 110-111.

[44] この特集のなかでコメントをしている商工会議所法律顧問は、向こう数年間での職業適齢期人口の減少、労働者の高齢化、男性の徴兵が今後女性の全日雇用数を押し上げていくと予想している。Ebd, S. 110-111.

[45] Ebd., S. 111.

[46] Feldmann-Neubert, a.a.O., S. 138-139.

（4）広告

職業と家庭とを結びつける表現が記事に現れないからといって、女性は適齢期になれば結婚し、専業主婦になろうがなるまいが、家庭を持てば家事や育児は女性の仕事であるという当時一般的だった考え方から、この雑誌が逃れられているわけではない。それが視覚的によりはっきりと読み取れるのが広告である。

洗剤、家電、食品の広告で典型的に描かれるのが、「エプロン姿のショートのパーマヘアの女性」であり、これは専業主婦の記号として機能している（図 8～11）。家具店の広告文では、夫には誰にも邪魔されない仕事部屋があり、妻の「城」（“Reich”）は台所である[47]と、当然のごとく述べられている。フォードの新車の広告では、運転をする男性と助手席に乗る女性の絵が描かれ、広告文では、女性には車の色や形、内装など見た目の美しさを、男性には排気量、燃費、馬力などの性能を訴求している。[48]

図 8：SUWA（洗剤）：Sunlicht GmbH (Unilever) *Constanze*, 1957, Heft 7, S. 12.

図 9：Adler（チーズ）：Bel Deutschland GmbH *Constanze*, 1956, Heft 21, S. 10.

図 10：LUX（食器用洗剤）：Unilever *Constanze*, 1959, Heft 17, S. 53.

図 11：Vampyrette（掃除機）：Allgemeine Elektricitäts-Gesellschaft (AEG) *Constanze*, 1956, Heft 21, S. 83.

異性からの評価を喧伝する広告も多い。生理用品の広告では、「イライラはあなたの魅力を減らします！［…］どんな男性でも、忙しくてくたくたになっている女性よりも、バランスの取れた魅力的な女性を好むものです」[49] と女性読者たちにアドバイスを与える。

---

[47] 家具店 Musterring の広告。*Constanze*, 1956, Heft 15, S. 84.
[48] Ford: TAUNUS 15 M de Luxe の広告。*Constanze*, 1956, Heft 21, S. 74-75.
[49] Tambrands Inc.: TAMPAX の広告。*Constanze*, 1957, Heft 7, S. 10.

ダイエット関連の宣伝もしばしば見かけられるが、後に違法となる危険な成分を用いたダイエット薬の広告では、痩身が身体的な健康だけではなく、精神的な安寧とも結びついていることが謳われている。「[痩せたことは] とても嬉しかったし、気持ちも明るくなりました。夫ともとてもうまくいっているので、なおさらです。」[50] スキンケアクリームの広告は、「吹き出物は夫を遠ざけます。だからあなたはそれに正しく対処しなければなりません！」[51] と女性たちを戒める。男性・恋人・夫から気に入られ、愛され、気持ちを引き留めるために、顔や体や体臭といった身体のあらゆる側面に気を配らなければならないと、これらの広告は喧伝している。

４．非政治性の政治性

これまで見てきたように、記事においては、家族制度やそこでの女性の役割を否定したり覆したりしようとするような論調はなく、職業についてもしばしば女性性と結び付けて描かれていた。また広告においては、男性の視線を内在化させるような広告文が見られた。しかし実際のところ、雑誌全体から見れば、女性を家庭に回帰させようというプロパガンダ的な記事はなく、ステレオタイプの女性像を前面に押し出す広告も、全体的に見ればそれほど多くないのである。この雑誌の大部分を占めるのは、女性たちの人生や運命をめぐる記事、モードとファッションと美容、映画俳優やセレブリティの写真と話題、実用的な家事のヒントと家を居心地の良い（gemütlich/behaglich）場所にするためのアドバイス、悩み相談、国内外の旅情報、かわいい動物の写真、ちょっとした教養を得られるような読み物、連載形式の恋愛および推理小説、美しさと快適さを手に入れるためのさまざまな広告である。

資本主義社会における女性雑誌は、それ自体が商品として、幅広い読者に読まれなければならないという使命を負っている。したがって政治的に偏った論調の記事や、特定の層だけを狙った広告はむしろ逆効果になり得るのである。誌面に溢れるファッショナブルで美しい淑女と若々しく健康的な女の子たち、最新の家電や流行の家具に囲まれた快適な住まい―ここにあるのは心を陰鬱にする灰色の現実ではなく、政治的・社会的問題を一切排除し、経済的豊かさを基盤とした消費からのみ成立する、非政治的な「色彩に溢れた幸せな世界」（“bunte heile Welt”）である。しかし、この非政治的な無害さ（Harmlosigkeit）に政治性がないわけではない。ここで用いている政治性という概念を、私はふたつの側面から捉えたいと思う。ひとつは消費という一見非政治的な行為のうちにある政治性、もうひとつは、この「幸せな世界」こそが社会体制を再生産する根源的な仕組みになっていると

---

[50] Colex Andresen KG: Cocos-Schlankheitsmittel の広告。*Constanze*, 1956, Heft 15, S. 5.
[51] Parfumerie Royale: Valcrema Hautbalsam の広告。*Constanze*, 1956, Heft 21, S. 106.

いう意味での政治性である。

戦後ドイツの女性たちにとっては、生き延びることで精一杯だった時代を経て、家（Heim）こそが自分が安心して存在できる場所となった。それゆえ、家の再建とは同時に主体の回復であったと考えられる。しかしこれは、「経済の奇跡」が起こった西ドイツの場合、何にもまして経済的・物質的な意味を持っていた。すなわち、家の再建＝主体の回復は、実際の程度の差こそあれ、必要なものだけではなく、欲しいものを手に入れるという消費行為によって達成されるようになった。しかし女性、とくに専業主婦による消費は、男性と女性、生産と消費、公的領域と私的領域といった二分化のなかでつねに下位に置かれ、しばしば批判的に捉えられてきた。しかし、たとえばエリカ・カーター（Erica Carter）は、消費が女性たちにとって全面的な従属や抑圧であるとする見方を否定し、それが性別による労働の階層的分断を生み出している一方で、女性に公的主体（public agency）となるためのルートを提供しているとし、消費の多義性を指摘する。[52)]

一方、ミシェル・ド・セルトー（Michel de Certeau）は現代社会における消費を、支配体制につき従いつつそれをまぬがれる、あるいは規律のメカニズムに従いつつそれを反転させる「弱者の戦術」[53)] として捉えている。

> さまざまな集団や個人が、これからも「監視」の編み目のなかにとらわれつづけながら、そこで発揮する創造性、そこここに散らばり、戦術的で、ブリコラージュにたけたその創造性がいったいいかなる隠密形態をとっているのか［…］。消費者たちが発揮するこうした策略と手続きは、ついには反規律（アンチ・ディシプリン）の網の目を形成していく。[54)]

このように考えれば、戦後の女性たちが、保守的な政治家たちの思惑通りに「伝統的な家庭」へと戻っていったという見方にも疑問が湧いてくる。消費する主体となった女性たちは、そういった言説に従いつつ、ひょっとするとその制度を内部から浸蝕していったのではないだろうか？本稿ではこの問いには答えられないが、消費にある政治性という視点は、この時代の歴史を下から見直す契機になり得るかもしれない。

しかしもちろんこのような、いわば「弱者の戦術」でしかない消費する主体のあり方は、その後に続く反抗と解放の時代が望んでいた社会体制それ自体の転覆には、実際のところ、直接には繋がらなかった。物質的な豊かさを得ることによる主体の回復や維持が基盤としているのは、《幸福》を得るための物語である。美しい肌から快適なマイホームまで、自宅

---

52) Erica Carter: How German is She? Postwar West German Reconstruction and the Consuming Woman.Michigan (The University of Michigan Press) 1997, p. 71.
53) ミシェル・ド・セルトー（山田登世子訳）：日常的実践のポイエティーク（国文社）26 頁。
54) 前掲書、18 頁。

での手料理パーティから優しい夫やかわいい子どもたちとともに出かける余暇旅行まで、女性にこういったさまざまなものに憧れをもたせるのは顕示欲やフェティッシュな物欲である、という説明では足りない。こういったすべてのものは、《幸福》の概念と結びついているのである。そしてそれが生み出される場が家庭である。すなわち消費社会においては、あらゆるものを手に入れることができる家庭こそが「幸せな世界」（“heile Welt”）なのである。

この“heile Welt”という概念は、大衆文化においては非常に重要なモチーフである一方で、批評家からはその通俗性や陳腐さを貶す用語として用いられてきた。さらにフェミニズムからも、このような「シンデレラストーリー」が、夫の経済力に依存し、支配的な家父長的家族制度を再生産するよう女性たちの意識を搾取する「ロマンチックラブのイデオロギー」として、繰り返し厳しく批判されてきた。けれども、この概念がどれだけ陳腐で通俗的であっても、そもそもそれを支えているのは「愛」―夫婦愛や家族愛―、「絆」、「温もり」といった、人間にとって「普遍的な善の感情」と思われているものであり、批判する者たちですらこれらを否定するのは難しいであろう。だが、この“heile Welt”が経済的・物質的豊かさを基盤としていることは事実であり、*Constanze* が示しているのは、資本主義と“heile Welt”との幸福な結び付きなのである。そしてその結び付きはこの 21 世紀になって生き延びているどころか、ますます強固になっているように思われる。この資本主義と結び付いた“heile Welt”よりも heil な世界が現れることがない限り、この結び付きが裂かれることはないのかもしれない。

Constanze はたしかに当時の時代を映しており、われわれはそこから 1950 年代の西ドイツに生きていた女性たちの日常を感じ取ることができる。その意味でこの雑誌は時代を映す鏡ということができるだろう。しかし同時にそれは、現代の資本主義社会のプロトタイプともなっているのである。

シンポジウムの質疑応答とその成果

竹田　和子

シンポジウム後の質疑応答は、多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われた。それぞれ独立してなされた個々の質問もシンポジウム全体と関連づけて考えると、そこから雑誌出版史の一端が見えてくる。

まず第 1 の質問は、特に 18 世紀を担当した北原に対するもので、「エールマンは雑誌出版の資金をどのように工面したのか」についてだった。その際、質問者から「自分は 1780 年頃の農民向け雑誌を研究しているが、そこでは最初に定期購読者を募って、その資金で出版していた」という指摘があった。北原からは「エールマンたちが利益獲得を目指して雑誌を立ち上げたのは確かだが、最初に資金をどのように準備していたかまでは考えていなかった。しかし第 1 号の前に定期購読者は募っている。その方法を使っていたかもしれない」との回答があった。エールマンが出した広告はヴィーラントの雑誌広告の下に掲載されており、雑誌に注目を集めようとの意図が感じられる。19 世紀にも、定期購読者の募集広告は見られ、さらに元々あった雑誌を買い取り、意匠替えすることや、様々な個人や団体と交渉して出資者を獲得する場合などもあった、雑誌の主な財源は、1870 年代頃になると定期購読料から広告料に変わり、販売方法も郵便・行商人などによる輸送が主だったのに対し、19 世紀末には街頭でのばら売りが出現するようになったとの追加説明が竹田からあった。いずれも大量消費社会の出現と歩調を合わせた変化だといえる。

次に、外国から、特に 18 世紀にはイギリスからの、20 世紀にはアメリカからの影響があったのではないかとの質問があった。これに対して、北原と桑原から、18 世紀後半に出版された女性雑誌は啓蒙主義の道徳週刊誌に依拠しており、当時の道徳週刊誌はイギリスの『タトラー』や『スペクテイター』を手本としたことは周知の通りである、一方、20 世紀前半におけるアメリカからの影響について、カメラや印刷の技術革新を背景にグラフ・ジャーナリズムの時代が到来するが、この起源はヨーロッパ、とりわけドイツにあるとの回答があった。世界恐慌が収まって、ヨーロッパで最大の出版社となったウルシュタイン社は、19 世紀末から写真中心の『ベルリン・グラフ新聞』を発行していたが、1930 年代始めの発行部数は 200 万部に達していたのである。しかし、ナチスが政権を取ると、有能なユダヤ人編集者がアメリカやイギリスに亡命。アメリカに亡命したクルト・コルフは『ライフ』の初代編集長となり、一方、イギリスへ亡命したハンガリー系ユダヤ人のシュテファン・ローラントは『ピクチャー・ポスト』の初代編集長となり、グラフ・ジャーナリズムの黄金時代を作り上げることになった。さらに、戦後西ドイツの女性誌『コンスタンツェ』には、多国籍企業の広告が少なからず掲載されており、アメリカだけではなく、むしろ国際的な性格も見られたという横山からの指摘もあった。

第 3 に雑誌タイトルの由来についての質問があり、発表者全員がそれぞれの時代について回

答した。まず 18 世紀のエールマンが用いた「アマーリエ」は自身のペンネームで、『アマーリエ』という自伝的書簡体小説もある。コッタ社による後継誌『フローラ』は花の女神の名前がタイトルだが、女神（や神話）に由来するものがよく見られた。しかし啓蒙主義時代の女性向け雑誌は、例えばゴットシェートの『理性的女性批評家たち』や後の女性雑誌でも E. ホーフマンの『ハンブルクの娘たちのために』、ゾフィー・ラ・ロッシュの『ドイツの女性のためのポモナ』のように、啓蒙主義的タイトルを持ち、個人名は含まないのが普通だった。19 世紀の家庭雑誌には、『ガルテンラウベ』を始めとして『炉端の楽しみ』、『我が家』など家庭を連想させるもの、『陸と海を超えて』、『岩山から海へ』など世界を意識したものがある。前者には反動時代に平穏な家庭に引きこもろうとする意識、後者には産業が発達した 19 世紀後半の広い世界への憧れや野心が見て取れる。1890 年の社会主義者鎮圧法の廃止後にはさまざまな女性運動組織が設立され、『女子大生』、『女性労働者』からレスビアン雑誌『女友だち』まで実に多種多様な機関誌が発行された。一方、商業女性雑誌でも、上流階級の女性向けの『淑女』、『主婦の雑誌』、『若い女性』など、タイトルには読者対象が集合的に明示されるのが一般的だった。ところが、戦後西ドイツの女性雑誌市場では、代表的女性雑誌は『コンスタンツェ』、『ブリギッテ』あるいは『ペトラ』など女性名を前面に出している。これは、集団的読者ではなく、読者とのパーソナルな関係をアピールするものだった。実際、多くの投書は編集部宛ではなく、「親愛なるコンスタンツェ様」と書き始められていた。1956 年創刊の東ドイツの女性誌『ジビレ』のタイトルも、発行者ジビレ・ゲルストナーの名から付けられたと考えられているが、女性の名前をタイトルに据えた点では『コンスタンツェ』などと同じ現象だといえる。全体的に見ると、タイトルの変遷は、理念から親しみ易さへと関心が移り、読者が集合としてではなく個人的に捉えられるようになったことを示すものといえよう。また、雑誌がターゲットとした読者の年齢層は、19 世紀の家庭雑誌は「家族」が読者として想定されていたため、あらゆる年代層を対象とし、様々な関心に対応するため幅広いジャンルの記事が掲載されたが、19 世紀末頃には年代別、テーマ別に細分化し、それぞれが関心に応じて異なった雑誌を手に取るようになった。例えば、第 5 発表で取り上げられた『コンスタンツェ』のターゲットは 30―50 代の女性である。

第 4 の質問は、18 世紀～19 世紀の女性雑誌・新聞の女性編集者・出版者についてだった。18 世紀後半には道徳週刊誌に刺激され、ラ・ロッシュやエールマンのように雑誌を出版する女性たちが登場するが、多くの雑誌は短命だった。彼女たちは出版、編集、執筆全てを行っていたが、これは出版社の多くが小規模で家内工業的な経営だった当時の多くの雑誌・新聞出版に共通しており、妻が夫と共同で作業に当たっていたケースも多い。女性編集者・出版者の活動が活発になるのは、3 月革命前から女性新聞を発行していたルイーゼ・オットー=ペータースらが 1865 年に「全国ドイツ女性協会」という、女性教育協会の全国組織を立ち上げてからである。『新しい道』はその機関誌だった。他にも全国レベルの女性組織が誕生し、組織が雑誌を発行する時代となった。1890 年には社会主義者鎮圧法が廃止され、政党の女性向け機関誌も次々に発刊され始め、女

性向けには女性が出版者、編集責任者を務めた。一方、19 世紀末のメディアの大変革により、A. シェルル、L. ウルシュタイン、R. モッセなど新聞・雑誌コンツェルンが誕生し、大衆ジャーナリズムの時代となり、大出版社から出版部数も格段に多い多種多様な商業雑誌・新聞が発行されるようになった。企業家としての女性出版者は生まれる余地のない時代ではあったが、ウルシュタイン社の有能な編集者として活動し、20 世紀初頭から『淑女』や『主婦の雑誌』等を担当し、後に「『ブリギッテ』の産みの親」と呼ばれたバルバラ・フォン・トレスコーのような人物も生まれた。

一方、女性作家についても、スウェーデンの女流作家ラーゲルレーヴを例に挙げ、特に 19 世紀の雑誌でデビューして成功した女性の存在についての質問が竹田に対してあった。雑誌から成功をつかんだ女性の最も有名な例は E.マルリットである。彼女は 1866 年に『ガルテンラウベ』に作品が掲載されて作家デビューし、爆発的な人気を得、雑誌の売り上げにも大きく貢献した。彼女に刺激された多くの女性が作品を雑誌に投稿するようになり、それが更なる女性読者の獲得にもつながっていった。しかし作品の質は通俗小説に止まったものがほとんどであり、それは女性作家全体に対する批判的評価の原因となった。19 世紀後半は、作品をまず雑誌に発表し、その後単行本として出版するというやり方が一般的だった。出版社は読者数を増やすため、フォンターネ、シュトルム、ケラーといった知名度の高い作家の連載小説を掲載した。20 世紀に入っても連載小説の重要性は変わらず、ベルリンの三大新聞・雑誌コンツェルンの一つであるウルシュタイン社が発行した 1911 年創刊の女性雑誌『淑女』にも、ベルトルト・ブレヒト、ハンナ・ヘーヒ、クルト・トゥホルスキー、カール・ツックマイヤー等、著名な作家が登場する文学マガジンの付録があったと桑原の追加説明があった。

第 6 に『ガルテンラウベ』に関して、制度としての読者との結びつき、具体的な流通範囲、18-19 世紀の雑誌、新聞について質問があった。『ガルテンラウベ』は読者との親密な関係を重視していた。投書欄を設け、読者からの意見や質問に対する編集部からの回答を掲載した。それにより、読者は雑誌が自分個人に対して回答してくれたように感じ、雑誌との一体感を強くするようになった。発行地がライプツィヒだったこともあり、この雑誌の主な流通地域は北ドイツだったが、南欧、ロシア、さらに北米・南米、日本でも販売されていた。流通地域がこれほど広かったのは、印刷技術や輸送技術の発展、読書人口の増大とならんで、海外移民の増加が理由として考えられる。文化闘争時代には記事はプロテスタント側の立場から書かれたが、楽観的進歩主義、寛容の精神を基調としていたこの雑誌は、宗教にこだわるあまり進歩や人間の自然な心情が抑圧されることを批判したのであり、カトリックの教義そのものを否定したわけではなく、カトリック地域でも広く流通していたことが指摘された。

このシンポジウムは 18 世紀末からおよそ 170 年に渡る家庭雑誌・女性誌の歴史を振り返るものだったが、質疑応答を通して 18 世紀の教養雑誌が大衆化し、より多くの読者を獲得して社会に広がっていく過程を示せたのではないかと考えている。

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 124
Alle Rechte vorbehalten
©2017 Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo

日本独文学会研究叢書　１２４号
2017 年 9 月 30 日発行

時代を映す鏡としての雑誌

18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る

編集　竹田　和子
発行　日　本　独　文　学　会
〒170－0005
東京都豊島区南大塚 3－34－6－603
電話　03－5950－1147
メールフォーム　http://www.jgg.jp/mailform/buero/

© 2017　日本独文学会

SrJGG

ISBN 978-4-908452-14-7